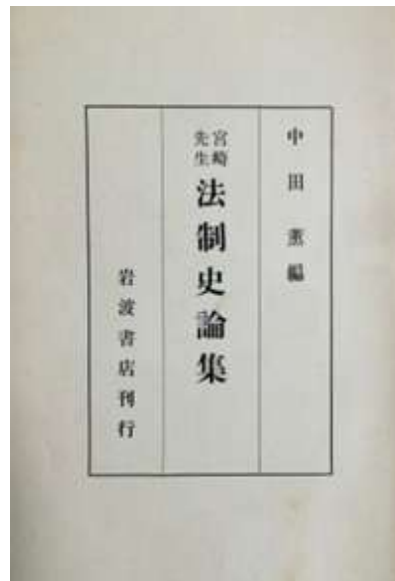


宮崎道三郎博士略年譜・著作目録 (五十訂稿)

(平成 31 (2019) 年 1 月 31 日 (木) 初稿作成)

(令和 7 (2025) 年 1 月 1 日 (水) 現在 (五十訂稿))



〔目 次〕

(補正経緯)	5
【参考 HP】	9
【関連 HP】	13
はしがき	15
1 略年譜	17
2 著作目録抄	21
(1) 著書・編書	21
(2) 論説、漢詩文その他	25
(3) 翻訳校訂	33
(4) 講義録（調査中）	35
① はじめに	35
② 法制史（日本法制史）関係	35
③ 羅馬法乃至比較法制史（含独逸法律史）関係	37
ア 「羅馬法」乃至「比較法制史」（含独逸法律史）筆記講義録 の意義	37
イ 現存筆記講義録	39
(5) 漢詩文（調査中）	44
① 宮崎道三郎博士漢詩文に言及する著作	44
② 宮崎道三郎博士漢詩文紹介	45
ア 中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和4（1929） 年6月20日刊）巻頭他所載分	45
イ その他収載分（諸雑誌、『同窓集』第壹編・第貳編等）	50
（・井上哲次郎（巽軒、1856～1938）編『同窓集』第壹編 （和装、出版地不明、出版社不明、明治15（1882）年5 月7日刊）	62
（・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、 出版社不明、明治17（1884）年5月刊）	63
③ 宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試み —宮崎道 三郎博士漢詩文一覧—	64
3 試験問題（調査中）	71
4 その他	77
(1) 井上哲次郎（巽軒）博士との関係	77
① 漢詩文関連	77
② 井上哲次郎（巽軒）博士回想録、ドイツ留学時代関連	79
③ 『巽軒日記』関連	80
(2) 末松謙澄博士との関係	82

(3) 宮崎道三郎博士大学生時代明治 13 (1880) 年答案の件	86
5 関係文献	87
(1) 戦前期	87
(2) 戦後期	93
【参考】	109
【参考 1】 東京大学法学部法制史資料室所蔵コレクション	109
【参考 2】 穂積陳重博士・宮崎道三郎博士関係最近論稿・報告等一 覧	109
【参考 3】 穂積陳重博士関係最近論稿等一覽	113
【参考 4】 宮崎道三郎博士関係最近論稿等一覽	114
【参考 5】 山口道弘教授講義その他	115
【参考 6】 第 74 回法制史学会総会 (令和 5 (2023) 年 6 月 10、11 日) 「ミニ・シンポジウム」の件	116
【参考 7】 国立国会図書館、CiNii 関係	117

(補正経緯)

HP 初載: ・平成 31 (2019) 年 1 月 31 日 (木) 初稿作成

- ・平成 31 (2019) 年 2 月 11 日 (月) 改訂稿作成
- ・平成 31 (2019) 年 4 月 7 日 (日) 再訂稿作成
(「3 (3) 著作目録抄」中の文献を増補した。)
- ・平成 31 (2019) 年 4 月 17 日 (水) 三訂稿作成
(「3 (4) 講義録」、「3 (5) 漢詩」欄を新設するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・平成 31 (2019) 年 4 月 23 日 (火) 四訂稿作成
(「4 試験問題」欄を新設するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 5 月 7 日 (火) 五訂稿作成
(「6 その他」欄を新設するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 5 月 10 日 (金) 六訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 5 月 25 日 (土) 七訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 5 月 31 日 (金) 八訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 6 月 11 日 (火) 九訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 6 月 24 日 (月) 十訂稿作成
(冒頭レイアウトを変更し、全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 6 月 28 日 (金) 十一訂稿作成
(「3 (2) 論説その他」を「3 (2) 論説、漢詩その他」に改め、富澤周平氏御示教の宮崎道三郎編『同窓集』第弐編 (明治 17 (1884) 年 5 月刊) に基づき本稿掲載漢詩文関係の記述を補正した。富澤氏の御厚情に深く感謝いたします。)
- ・令和元 (2019) 年 7 月 9 日 (火) 十二訂稿作成
(「3 (5) 漢詩」も「3 (5) 漢詩文」に改め、井上哲次郎 (1856~1938) 編『同窓集』第壹編 (明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) に基づき本稿掲載漢詩文関係の記述を再度補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 7 月 11 日 (木) 十三訂稿作成
(「3 (1) 著書」を「3 (1) 著書・編書」に改め全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 7 月 22 日 (月) 十四訂稿作成
(「5 関係文献」と「6 その他」の順序を入れ替え、新たに「5 (3) 宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試み—宮崎道三郎博士漢詩文一覧—」を追加するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和元 (2019) 年 7 月 25 日 (木) 十五訂稿作成
(「2 略年譜」のデジタル資料を追加、「5 (3)」の記載方法を修正するとともに、全体にわたって補正した。)

- ・令和元（2019）年7月31日（水）十六訂稿作成
（「3（2）論説、漢詩文その他」中掲載「明治13（1880）～14（1881）年の履歴」を補充するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年8月20日（火）十七訂稿作成
（『有造会報』関係記事を補充するとともに、全にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年9月2日（月）十八訂稿作成
（「3（5）漢詩文（調査中）」を補充するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年9月8日（日）十九訂稿作成
（「3（4）講義録（調査中）」中「羅馬法、比較法制史」関連を補充するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年9月10日（火）二十訂稿作成
（「3（4）講義録（調査中）」中「法制史（日本法制史）」関連を補充するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年10月22日（火）二十一訂稿作成
（全体にわたって補正した。）
- ・令和元（2019）年11月18日（月）二十二訂稿作成
（「3（5）漢詩文（調査中）」を一部修正するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年2月16日（日）二十三訂稿作成
（「3（5）漢詩文（調査中）」を一部修正するとともに、「6 関係文献」に追加した。）
- ・令和2（2020）年2月21日（金）二十四訂稿作成
（「6 関係文献」に追加するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年3月2日（月）二十五訂稿作成
（「6 関係文献」に追加するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年3月12日（木）二十六訂稿作成
（日本法律学校関連記事を追加するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年4月18日（土）二十七訂稿作成
（「6 関係文献」に追加するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年5月9日（土）二十八訂稿作成
（三浦周行博士関連（高塩博先生御教示）及び「日本研究のための歴史情報」（名古屋大学）関連〈<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/>〉その他を追加。）
- ・令和2（2020）年5月26日（火）二十九訂稿作成
（『日本法学』関係論稿等を追加、修正等した。）
- ・令和2（2020）年6月24日（水）三十訂稿作成
（全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年6月30日（火）三十一訂稿作成
（高柳賢三教授の宮崎博士回想記（「法科大学時代の諸先生」、昭和13年）を追加するとともに、全体にわたって補正した。）
- ・令和2（2020）年7月15日（水）三十二訂稿作成
（『日本法学』関係論稿等を追加するとともに、全体にわたって補正した。）

- ・令和 3 (2021) 年 1 月 17 日 (日) 三十三訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和 3 (2021) 年 2 月 14 日 (日) 三十四訂稿作成
(高柳眞三 (紹介及批評)「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』」等を追加するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和 3 (2021) 年 9 月 8 日 (水) 三十五訂稿作成
(全体レイアウトをかなり修正した上で、『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 掲載稿の追加等全体にわたって補正した。)
- ・令和 3 (2021) 年 10 月 19 日 (火) 三十六訂稿作成
(津関係資料を追加するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和 4 (2022) 年 3 月 9 日 (水) 三十七訂稿作成
(国立国会図書館次世代デジタルライブラリー <<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>>に言及するとともに、全体にわたって補正した。)
- ・令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 三十八訂稿作成
(全体にわたって補正の上、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯) —』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録した。)
- ・令和 4 (2022) 年 6 月 1 日 (水) 三十九訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和 4 (2022) 年 11 月 20 日 (日) 四十訂稿作成
(全体にわたって補正した。)
- ・令和 5 (2023) 年 1 月 26 日 (木) 四十一訂稿作成
(和仁かや教授「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一巻 公法・基礎法編』(成文堂、令和 4 (2022) 年 12 月 28 日刊) が公表されたことから一部補正した。和仁教授の御教示に厚く御礼申し上げます。)
- ・令和 5 (2023) 年 2 月 26 日 (日) 四十二訂稿作成
(従来原文掲載のみであった漢詩「宿山寺題画壁」『東洋学芸雑誌』14 号 364 頁 [1882/11/25 (明治 15 年)] に書下し文、要旨を追加。高橋均先生の御教示に厚く御礼申し上げます。その他全体にわたって一部補正した。)
- ・令和 5 (2023) 年 4 月 2 日 (日) 四十三訂稿作成
(『奠南詩文集 奠南山田喜之助遺稿』(編集兼発行者: 小林俊三、発行所: 小林俊三法律事務所、昭和 35 (1960) 年 10 月 10 日刊) 所載の件を追加。高橋均先生の御教示に厚く御礼申し上げます。その他「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正三年-』」『東京大学史紀要』第 40 号 (令和 3 (2022) 年 3 月刊) 記載の件を追加。)
- ・令和 5 (2023) 年 4 月 20 日 (木) 四十四訂稿作成
(『法の思想と歴史』第 3 号 (信山社、令和 5 (2023) 年 4 月 17 日刊) 及び第 74 回法制史学会総会 (令和 5 (2023) 年 6 月 10、11 日)「ミニ・シンポジウム」(予定) の件を追加。その他一、二補正した。)

- ・令和 5 (2023) 年 5 月 19 日 (金) 四十五訂稿作成
 (「巽軒詩鈔序」東洋学芸雑誌 28 号 265—266 頁 [1884/01/25]) の句読、書下し文、大意を掲載した。高橋均先生の御示教に拠る。厚く御礼申し上げます。その他関係文献補足等一、二修正した。)
- ・令和 5 (2023) 年 5 月 30 日 (火) 四十六訂稿作成
 (冒頭「はじめに」を「はしがき」に、また、従来の「4 (3) 宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試み 一宮崎道三郎博士漢詩文一覧」の配置場所を「2 (5)」に変更するとともに、その他全体にわたって一部補正した。)
- ・令和 5 (2023) 年 7 月 18 日 (火) 四十七訂稿作成
 (北康宏教授『中田薫』(人物叢書、吉川弘文館、令和 5 (2023) 年 8 月 1 日刊) が刊行された〈<http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b626819.html>〉ことから一、二追加するとともに、その他全体にわたって一部補正した。)
- ・令和 5 (2023) 年 12 月 12 日 (火) 四十八訂稿作成
 (「4 (2) 末松謙澄博士との関係」を新設するとともに、その他全体にわたって一部補正した。加えて、本稿は電子版であることに鑑み、本四十八訂稿から黒、赤二色刷とした。併せ口絵を掲載した。)
- ・令和 6 (2024) 年 1 月 1 日 (月) 四十九訂稿作成
 (全体にわたって補正の上、『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 一ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十六輯) 一』(CD 版、令和 6 (2024) 年 1 月 1 日刊) に収録した。)
- ・令和 7 (2025) 年 1 月 1 日 (水) 五十訂稿作成
 「5 関係文献」に浦野都志子「黒河春村『地頭名義考』について」『汲古』第 86 号 (令和 6 (2024) 年 12 月刊) 12~18 頁を追加するとともに、全体にわたって補正した。

【参考 HP】

(令和 3 年 9 月 8 日、同 12 月 5 日、同 4 年 11 月 20 日、同 6 年 1 月 1 日、同 7 年 1 月 1 日各一部修正)

* 法制史学会 HP (平成 14 (2002) 年 10 月 5 日公開、平成 24 (2012) 年 4 月 1 日移転)

〈<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jalha/toppage.htm>〉 ⇒

(新) 〈<https://www.jalha.org/>〉

・ 〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E5%B1%B1%E5%AE%89%E6%95%8F>〉

* 全体 HP

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/>〉

・ 「日本のローマ法」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Romanist2003.htm>〉

・ 「法制史学者著作目録選 (WEB 版)」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Historian2003.htm>〉

・ 「法制史コーナー」 所載項目一覧」

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ichiran002.pdf>〉

・ 本 HP 本稿: 宮崎道三郎博士略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miyazaki001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 池辺義象氏著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ikebe001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 三浦周行博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miura001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 中田薫博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nakata001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 牧健二博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/makikenji001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 内藤吉之助教授略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/naito001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 瀧川政次郎博士関係資料抄

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/takikawa001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 金田平一郎博士略年譜・著作目録

〈<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kaneda001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 小早川欣吾先生略年譜・著作目録

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa001.pdf>〉

・ 本 HP 別稿: 「小早川欣吾先生記念メダルによせて

—小田輝子氏「叔父小早川欣吾の思い出」とともに—

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/odateruko.pdf>〉

- ・本 HP 別稿: 『小早川欣吾先生東洋法制史論集』収録論稿目次その他
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayakawa_toyohoseishi.pdf>
- ・本 HP 別稿: 牧英正博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/maki001.pdf>>
- ・本 HP 別稿: 小林宏先生著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kobayashi001.pdf>>
- ・本HP別稿: 千賀鶴太郎博士著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/senga001.pdf>>
- ・本HP別稿: 戸水寛人博士著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tomizu001.pdf>>
- ・本HP別稿: 春木一郎博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/haruki001.pdf>>
- ・本HP別稿: 原田慶吉教授略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/harada2003.htm>>
- ・本HP別稿: 船田享二博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/funada2003b.htm>>
- ・本HP別稿: 田中周友博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/tanaka2003b.htm>>
- ・本HP別稿: 栗生武夫先生略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu001.pdf>>
- ・本 HP 別稿: 「栗生武夫先生『婚姻法の近代化』の中訳本について」
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_chuhon.pdf>
- ・本 HP 別稿: 「『栗生武夫先生隨筆拾遺』作成の思い出
 —『栗生武夫先生隨筆拾遺—栗生武夫先生単行本未収録論稿集第一輯—」
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_zuihitsu_shui.pdf>
- ・本 HP 別稿: PDF 版『栗生武夫先生隨筆拾遺—栗生武夫先生単行本未収録論稿集第一輯—』
 <https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kuryu_zuihitsu_shui_002.pdf>
- ・本HP別稿: 西本穎博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nishimoto001.pdf>>
- ・本HP別稿: 久保正幡博士著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kubo001.pdf>>
- ・本HP別稿: 井上周三教授関係資料抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/inoue001.pdf>>
- ・本HP別稿: 上山安敏先生著作目録等抄
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/ueyama001.pdf>>
- ・本HP本別稿: 笥克彦博士略年譜・著作目録
 <<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kakei001.pdf>>

- ・本HP別稿: 近藤英吉博士略年譜・著作目録
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/kondo001.pdf>〉
- ・本HP別稿: 増田福太郎博士関係資料一斑
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/masuda001.pdf>〉
- ・本 HP 別稿: 山崎丹照先生著作目録
〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/yamazaki001.pdf>〉
- ・本 HP 別稿: 戴炎輝博士略年譜・著作目録
〈https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/Tai_Yen-hui001.pdf〉

- * 和田徹氏HP「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」（令和5（2023）年12月31日閉館）
〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/>〉
- ・春木一郎電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/haruki.htm>〉
- ・原田慶吉電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/harada.htm>〉
- ・栗生武夫電子文庫（和田徹氏寄贈図書）
〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/kuryu.htm>〉
- ・いろいろ電子文庫
〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/iroiro.htm>〉
- ・PD 図書室（「梅雨空文庫」のデータを整理してまとめたもの）
〈<http://books.salterrae.net/about/tuyuzora.html>〉
（註）早くには「船田享二電子文庫」の平成22（2010）年開設予告もなされていた（平成14（2002）年12月14日初出か?）が、その後平成18（2006）年6月3日に「2006/06/03 船田享二電子文庫計画中止」の表示が出た。

⇒（令和6（2024）年1月1日追加）

- ・「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」告知 2023年12月31日をもって閉館（2023/12/12 閉館告知）〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/>〉
（参考）

2011/07/13 いたづら文庫新設

2012/06/01 春木一郎電子文庫全文書 HTML 化（PDF 文書保存庫収納）

2012/06/01 栗生武夫電子文庫全文書 HTML 化（PDF 文書保存庫収納）

2012/06/01 原田慶吉電子文庫全文書 HTML 化（PDF 文書保存庫収納）

2023/12/12 閉館告知

⇒（令和7（2025）年1月1日追加）

- * 先に閉館した上記和田徹氏 HP「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」は、令和6（2024）

年6月5日（水、公開公表日）に再開された。

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/>〉

・春木一郎電子文庫（和田徹氏寄贈図書）

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/haruki.htm>〉

・原田慶吉電子文庫（和田徹氏寄贈図書）

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/harada.htm>〉

・栗生武夫電子文庫（和田徹氏寄贈図書）

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/kuryu.htm>〉

・いろいろ電子文庫

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/iroiro.htm>〉

・梅雨空文庫

〈<http://tosyokan.my.coocan.jp/tuyuzora.htm>〉

*「西村稔先生（1947～2019）年譜・著作目録（阪本尚文編）（初版）（2020（令和2）年4月現在）」⇒爾後逐次改訂⇒（最新版：令和5（2023）年11月現在第8稿掲載）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/nishimura001.pdf>〉

（註）本著作目録は、阪本尚文編『Aún aprendo それでもまだ学ぶぞ——西村稔先生追悼集』（私家版、2020（令和2）年2月28日刊（福島大学学術機関情報リポジトリ所収〈<http://hdl.handle.net/10270/5154>〉））に収録した「西村稔先生年譜・著作目録」に逐次修正を加えつつあるものである。

【関連 HP】

(令和 4 (2022) 年 11 月 20 日、同 5 (2023) 年 1 月 26 日、同 6 (2024) 年 1 月 1 日各一部修正)

- ・法制史学会: <<https://www.jalha.org/>>
- ・国立国会図書館: <<https://www.ndl.go.jp/>>
- ・国立国会図書館デジタルコレクション <<https://dl.ndl.go.jp/>>
- ・国立国会図書館個人向けデジタル化資料送信サービス (個人送信) (令和 4 (2022) 年 5 月 19 日開始)
<https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html>
(下記: 令和 5 (2023) 年 1 月 26 日追加)
<https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2022/221202_01.html>
「ホーム>新着情報>ニュース> 「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルします (令和 4 年 12 月 21 日)
「2022 年 12 月 2 日「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルします (令和 4 年 12 月 21 日)」
国立国会図書館は、令和 4 年 12 月 21 日に、国立国会図書館デジタルコレクションをリニューアルします。リニューアルにより、全文検索可能なデジタル化資料が増加するとともに、閲覧画面が改善されます。詳しくはプレスリリースをご覧ください。」
- ・ (下記: 令和 6 (2024) 年 1 月 1 日追加)
「2024 年 1 月 5 日 新「国立国会図書館サーチ」を公開しました」⇒
「国立国会図書館は、従来のウェブサービス「国立国会図書館検索・申込オンラインサービス (国立国会図書館オンライン)」及び「国立国会図書館サーチ」を統合・リニューアルし、令和 6 年 1 月 5 日 (金) から、新「国立国会図書館サーチ」としてサービスを開始しました。」
<https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2023/240105_01.html>
- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー
<<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>>
- ・CiNii: <<https://ci.nii.ac.jp/>> ⇒ <<https://cir.nii.ac.jp/>> (【[2022] 4/18 更新】CiNii Articles の CiNii Research への統合について)、<<https://ci.nii.ac.jp/books/>>
- ・朝日新聞クロスサーチ (令和 4 (2022) 年春「聞蔵Ⅱビジュアル」を全面リニューアル)
<<http://www.asahi.com/information/db/2for1.html>>
- ・ヨミダス歴史館
<<https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>>
- ・每索 (マイサク)
<<http://xn--https-ft8kv51h//mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>>
- ・雑誌記事索引集成データベース「ざっさくプラス」(令和 5 (2023) 年 1 月 26 日追加)
<<http://info.zassaku-plus.com/>>

< https://zassaku-plus.com/service/login?return_url=https%3A%2F%2Fzassaku-plus.com%2F>

はしがき

遅まきながら宮崎道三郎博士(1855～1928)の略年譜、著作目録を作成することとする。今後逐次補正に努めることとしたい。五十年余りの昔宮崎博士初学の師櫻木春山先生(正宏、1822～1903.3.20)¹ゆかりの方にお会いしたことを思い出しつつ記す。

(平成 31 (2019) 年 1 月 31 日 (木) 記)

(追記 1)

本稿は、改訂途次(令和 4 (2022) 年 3 月 9 日時点)で西英昭先生より「国立国会図書館次世代デジタルライブラリー」〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉の御教示を受けたことから、本来であればこれに基づき抜本的に改稿の要があるが、今更如何ともし難く、このまま継続することとする。(令和 4 (2022) 年 3 月 9 日追加、同 5 (2023) 年 12 月 12 日一部補正)

(追記 2)

本稿は、電子版であることに鑑み、第四十八訂稿から黒、赤二色刷とした。併せ、口絵を掲載した。(令和 5 (2023) 年 12 月 12 日追加)

¹ 三村竹清氏(1876～1953)は最晩年の櫻木春山先生に師事した由である(『三村竹清集』五(印話・印人伝)、日本書誌学大系 23 (5)、青裳堂書店、昭和 58 年 5 月 31 日刊) 191～194 頁)。(令和元年 5 月 10 日追加) 三ッ村健吉(1918～2008)『碑 碑が語る津の歴史』(碑: いしぶみ。私刊、平成 9 (1997) 年 12 月 20 日刊) 42 頁には令孫櫻木幹雄氏が再建された「櫻木春山先生之寿碑」の件を載せる。(令和 3 年 2 月 14 日追加) 三ッ村氏にはその後遺著として『三重の碑(いしぶみ)百選』(伊勢新聞社、平成 21 (2009) 年 12 月 16 日刊)があるが、同書には上記「櫻木春山先生之寿碑」は収載されていない。(令和 5 年 7 月 18 日追加)

1 略年譜

(作成中、下記参照)

- ・「宮崎道三郎先生伝」法学士渋谷慥爾(ぞうじ、英吉利法律学校初代幹事、1854～1895)校閲・前川普左二郎編述『批評法律名家纂論 附 明法家列伝』(九春堂、明治 20 (1887)年 6 月刊) 259 頁(国会図書館デジタルコレクション、137 齣)(令和元年 7 月 25 日追加)
<<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000439460-00>>
- ・「法学博士宮崎道三郎君」花房吉太郎・山本源太編輯『日本博士全伝』(博文館、明治 25 年 8 月 20 日刊) 70～72 頁(国会図書館デジタルコレクション、47～48 齣)(令和元年 7 月 25 日追加)
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992465/105>>
(復刻『日本人物誌叢書③ 日本博士全伝』(日本図書センター、平成 2 年 9 月 25 日刊))
(令和元年 7 月 31 日追加)
- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー(西英昭先生の御示教に拠る。厚く御礼申し上げます。令和 4 (2022) 年 3 月 9 日追加)
<<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>>
- ・「日本研究のための歴史情報」<<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/>>(名古屋大学法学研究科)⇒<<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/search/about>>(令和 5 (2023) 年 1 月 26 日現在閲覧)初版、第 4 版に記載あり。
⇒「人事興信録データベース」(令和 2 年 5 月 9 日、令和 5 年 1 月 26 日(初版分)追加)
<<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who1-2927>>(初版(明治 36 年 4 月刊))
<<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-12373>>(第 4 版(大正 4 年 1 月刊))
<<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-10053>>(木場貞長関係)
<<http://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-24005>>(山本彌右衛門関係)
- ・「宮崎道三郎」『大日本博士録(1888-1920)第 1 巻(全六巻之内)法学博士及薬学博士之部』(発展社、大正 10 年 1 月 11 日刊) 15～16 頁(平成 31 年 2 月 11 日追加)
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1749208/125>>(125～126 齣)
- ・中田薫「宮崎道三郎先生小伝」中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和 4 (1929)年 6 月 20 日刊)(令和 3 年 10 月 19 日追加)
<<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879594/1/1>>
- ・『学位大系博士氏名録 昭和七年版』(発展社出版部、昭和 6 年 10 月 25 日刊)「法学博士」1 頁(120 齣)<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1447306>>
- ・東京大学文書館デジタル・アーカイブ<<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>>
「[7 月 25 日] 文部省御用掛宮崎道三郎本学兼勤ノ件」(明治 14 (1881) 年 7 月 27 日)
(令和元年 7 月 25 日追加)
<<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/document/e0b16e62368673833505c3a54419079c>>
- ・国立公文書館デジタルアーカイブ<<https://www.digital.archives.go.jp/>>
「理科大学教授関谷清景陸叙并宮崎道三郎法科大学教授ニ被任ノ件」(明治 21 (1888) 年 6 月 29 日)(宮崎道三郎博士履歴書あり。: 明治 13 年 7 月東京大学卒業～明治 21 年 10

月帰朝。関谷清景: 1855～1896) (令和元年7月25日追加)

〈 https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/MetSearch.cgi?DEF_XSL=default&IS_KIND=detail&IS_SCH=META&IS_STYLE=default&IS_TYPE=meta&DB_ID=G9100001EXTERNAL&GRP_ID=G9100001&IS_SORT_FLD=&IS_SORT_KND=&IS_START=1&IS_TAG_S1=id&IS_CND_S1=ALL&IS_KEY_S1=M0000000000000950979&IS_NUMBER=100&ON_LYD=on&IS_EXTSCH=F99999999999999999999999000000%2BF2009121017005000405%2BF2005021820554600670%2BF2005021820554900671%2BF2005031513391003002%2BF00000000000000073662%2BM00000000000000950979&IS_DATA_TYPE=&IS_LYD_DIV=&LIST_TYPE=default&IS_ORG_ID=M0000000000000950979&CAT_XML_FLG=on〉

・『幕末 明治 海外渡航者総覧』第2巻 人物情報編 (柏書房、平成4年3月21日刊) 381頁 (3670 宮崎道三郎) (令和元年7月18日追加)

・『津城下図 (嘉永期写)』(津市教育委員会、平成24年10月刊) (附録資料として「津城下図 [嘉永期写・1850年代] 記載内容 (地名・施設名・藩士名等) の詳細」あり。) (令和3年10月19日追加)

・中村勝利 (1905～?) 編『藤堂藩 (津・久居) 功臣年表一分限録一』(三重県郷土資料叢書第86集。三重県郷土資料刊行会、昭和60年2月20日刊) 107、116頁 (令和3年10月19日追加)

〈 <https://dl.ndl.go.jp/pid/9571441/1/1>〉

・フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

〈 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E>〉

・デジタル版 日本人名大辞典+Plus の解説

〈 <https://kotobank.jp/word/%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E-1113742>〉

・HP「日本大学の歴史 創立者総代 宮崎道三郎」

〈 <http://www.nihon-u.ac.jp/history/forerunner/miyazaki/>〉

・HP「日本大学大学史ニュース」 (平成31年2月11日追加)

〈 https://www.nihon-u.ac.jp/pr/pr_jornal/historical/〉

・聞蔵Ⅱ (令和元年5月25日追加)

〈 <https://database.asahi.com/index.shtml>〉

⇒ 朝日新聞クロスサーチ (令和4 (2022) 年春「聞蔵Ⅱ ビジュアル」を全面リニューアル) (令和5年5月19日補正)

〈 <http://www.asahi.com/information/db/2forl.html>〉

・ヨミダス歴史館

〈 <https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/>〉

・毎索 (マイサク) (令和5年5月19日追加)

〈 <http://xn--https-ft8kv51h//mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>〉

・『東京大学百年史 部局史 1』(東京大学、昭和 61 年 3 月 1 日刊) (令和 2 年 5 月 26 日追加)

〈https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/z1901_00030.html〉

〈https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=8329&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=28&block_id=31〉

・墓所関係サイト (令和 3 年 1 月 17 日追加)

〈<http://meiji-ishin.com/miyazakimichisaburo.html>〉

〈<http://daitabou.sakura.ne.jp/aoyama/botitibanjyunitiran.html>〉

2 著作目録抄

(利用資料等)

- ・ 国立国会図書館（「宮崎道三郎」で検索）
〈<http://www.ndl.go.jp/>〉
- ・ CiNii Books（「宮崎道三郎」で検索）
〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉
- ・ Webcat Plus（ウェブキャット・プラス）
〈<http://webcatplus.nii.ac.jp/webcatplus/details/creator/45479.html>〉
- ・ 〈<https://calil.jp/>〉（カーリル）
- ・ ざっさくプラス（雑誌記事索引集成データベース）（令和元年 5 月 25 日追加）
〈https://zassaku-plus.com/service/login?return_url=http%3A%2F%2Fzassaku-plus.com%2F〉
- ・ 『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』（大空社刊）各巻
〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN09089530>〉（令和元年 5 月 31 日追加）
- ・ （財）史学会編『史学雑誌総目録（創刊号～第 100 編）』（山川出版社、平成 5 年 1 月 31 日刊）〈<http://www.shigakukai.or.jp/journal/index/>〉（令和元年 5 月 31 日追加）

(1) 著書・編書

- ・ 宮崎道三郎編『同窓集』第式編（漢詩文集、和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）（詳しくは後掲「3（5）漢詩文」参照。）（令和元年 7 月 11 日追加）
（参考）近代書誌・近代画像データベース 〈<http://base1.nijl.ac.jp/~kindai/>〉
『同窓集 第式編』（令和 2 年 6 月 24 日追加）
〈[〉](https://dbrec.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi?DEF_XSL=default&SUM_KIND=CsvSummary&SUM_NUMBER=20&META_KIND=NOFRAME&IS_DB=G0000203KDS&IS_KIND=CsvDetail&IS_SCH=CSV&IS_STYLE=default&IS_TYPE=csv&DB_ID=G0000203KDS&GRP_ID=G0000203&IS_START=1&IS_EXTSCH=&SUM_TYPE=normal&IS_REG_S1=none&IS_TAG_S1=Identifier&IS_KEY_S1=G0000203KDS:WASD-01074&IS_LGC_S2=AND&IS_CND_S1=ALL&IS_NUMBER=1&XPARA=&IS_DET_AILTYPE=&IMAGE_XML_TYPE=&IMAGE_VIEW_DIRECTION=)
- ・ 中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和 4（1929）年 6 月 20 日刊。著作権相続者 宮崎於菟丸（次男、嗣子、陸軍軍人、1894～1961）
〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/3>〉（令和 5（2023）年 2 月 26 日追加）
（収載一覧）
- ・ 扉、肖像、中田薫「宮崎道三郎先生小伝」、津城詩稿①「寄敬宇先生詩」、中田薫「序言」、津城詩稿②（「夜坐偶成」）、凡例、津城詩稿③（「大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山荘。五言律二十首 録三」）、目次、津城詩稿④（「末松子爵受帝国学士院嘱。・・・」）
- ・ 第 1 律令に就きて（明治 32 年 2 月 12 日東京学士会院例会講演、同年 3 月同院雑誌第

21 編第 3 号) 1—10 頁

・第 2 質屋の話 (明治 32 年 11 月 12 日東京学士会院例会講演、33 年 1 月同院雑誌第 22 編第 1 号) 11—44 頁

・第 3 日本支那古代の為替制度 (明治 33 年 10 月 20 日史学会例会講演、34 年 1 月史学雑誌第 12 編第 1 号) 45—62 頁

・第 4 手附の話 (明治 33 年 11 月 11 日東京学士会院例会講演、同月同院雑誌第 22 編第 9 号) 63—97 頁

・第 5 家人の沿革 (明治 34 年 10 月 13 日東京学士会院例会講演、東洋学芸雑誌第 18 巻第 242 号至第 244 号) 98—147 頁

・第 6 唐代の茶商と飛錢 (明治 35 年 11 月 9 日東京学士会院例会講演、東洋学芸雑誌第 19 巻第 254 号至第 255 号) 148—182 頁

・第 7 都加佐名義考 (明治 36 年 4 月、法学協会雑誌第 21 巻第 4 号) 183—203 頁
(参考) 和仁かや「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一巻 公法・基礎法編』(成文堂、令和 4 (2022) 年 12 月 28 日刊) 213~231 頁
(<http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html>) (令和 5 年 1 月 26 日追加)

・第 8 日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の価値 (明治 37 年 4 月及 5 月、法学協会雑誌第 22 巻第 4 号至第 5 号) 204—240 頁

・第 9 朝鮮語と日本法制史 (明治 37 年 7 月、国家学会雑誌第 18 巻第 209 号) 241—253 頁

・第 10 朝鮮意流村の地名を論じて日本古代の内治外交に関する二三の事項に及ぶ (明治 37 年 10 月、国家学会雑誌第 18 巻第 212 号) 254—277 頁

・第 11 朝鮮語と日本歴史 (明治 37 年 12 月 11 日東京学士会院例会講演、東洋学芸雑誌第 21 巻第 279 号) 278—293 頁

・第 12 姓氏雑考 (明治 38 年 2 月至 39 年 3 月、法学協会雑誌第 23 巻第 2 号、第 3 号、第 11 号、第 24 巻第 3 号) 294—328 頁

・第 13 賒と出挙 (明治 38 年 9 月、国家学会雑誌第 19 巻第 9 号) 329—343 頁

・第 14 啄評の原義 (明治 39 年 1 月、史学雑誌第 17 編第 1 号) 344—372 頁

・第 15 贖の字義を論じて日本支那印度古代の手附に及ぶ (明治 39 年 2 月、法学協会雑誌第 24 巻第 2 号) 373—380 頁

・第 16 日韓両国語の比較研究 (明治 39 年 7 月至同 40 年 11 月、史学雑誌第 17 編第 7 号第 10 号及第 12 号、第 18 編第 4 号、第 8 号、第 10 号及第 11 号) 381—499 頁

・第 17 佐刀 (郷里) の原義 (明治 39 年 10 月、国家学会雑誌第 20 巻第 110 号) 500—505 頁

・第 18 部曲考 (明治 40 年 3 月、法学協会雑誌第 25 巻第 3 号) 506—530 頁

・第 19 部曲考補遺 (明治 40 年 4 月、法学協会雑誌第 25 巻第 4 号) 531—534 頁

・第 20 再び服匿 (保止支) の事を論じて匈奴語と蒙古語の比較談に及ぶ (明治 40 年 7 月、史学雑誌第 18 編第 7 号) 535—548 頁

・第 21 阿利那礼河と新羅の議会 (明治 41 年 4 月至 6 月、法学協会雑誌第 26 巻第 4 号至第 6 号) 549—588 頁

- ・第 22 須恵（陶）の語原を論じて鳥居龍藏君に答ふ（明治 41 年 11 月、史学雑誌第 19 編第 11 号） 589—598 頁
- ・第 23 履中紀の史に就て（明治 42 年 1 月、国家学会雑誌第 23 卷第 1 号） 599—613 頁
- ・第 24 勝部考（明治 42 年 3 月、法学協会雑誌第 27 卷第 3 号） 614—631 頁
- ・第 25 漢字の別訓流用と古代に於ける我邦制度上の用語（明治 43 年 5 月、法学協会雑誌第 208 卷第 5 号） 632—647 頁
- ・第 26 皆叱知考補遺（明治 43 年 8 月 28 日書翰） 648—651 頁
- ・第 27 毛麻利叱智に就いて（明治 43 年 10 月、東亜之光第 5 卷第 10 号） 652—665 頁
- ・第 28 任那疆域考（明治 43 年 12 月及 44 年 2 月、国家学会雑誌第 24 卷第 12 号及第 25 卷第 2 号） 666—690 頁
- ・第 29 任那宰の韓名「吉」の本義（明治 44 年 3 月、法学協会雑誌第 29 卷第 3 号） 691—698 頁
- ・附録（699—754 頁）
 - ・津城詩稿⑤（「暮江」） 700 頁
 - ・第 1 国司の起原（明治 25 年 9 月、法学協会雑誌第 10 卷第 9 号） 701—716 頁
 - ・第 2 津城漫筆（明治 26 年 3 月至 27 年 4 月、法学協会雑誌第 11 卷第 3 号至第 12 卷第 4 号） 717—731 頁
 - 1 建武式目 717—718 頁、2 養老律 718—722 頁、3 本朝書籍目録 722—724 頁、4 家本令集解奥書 724—728 頁、5 文治の記録所（裁判至要抄由来考の補正） 728—731 頁
 - ・第 3 裁判至要抄の由来（明治 27 年 1 月、法学協会雑誌第 12 卷第 1 号） 732—739 頁
 - ・第 4 古代の人身賣買（明治 27 年 9 月、法学協会雑誌第 12 卷第 9 号） 740—749 頁
 - ・第 5 隨筆二種（明治 25 年 2 月、法学協会雑誌第 10 卷第 2 号及 26 年 2 月、同誌 11 卷第 2 号） 750—753 頁
 - 1 サウキニー氏の略伝 750—752 頁、2 ウインドシヤイド（Windscheid）氏の勤学 53 頁
- ・津城詩稿⑥（「還家有感」） 754 頁
- ・索引 755—766 頁、奥付

【書評】

- ・高柳眞三（1902～1990）『国家学会雑誌』第 43 卷第 6 号（昭和 4 年 6 月 1 日刊）171～180 頁（令和 3 年 2 月 14 日追加）
- ・牧健二（1892～1989）『東京朝日新聞』昭和 4 年 7 月 26 日（金）6 面「読書ページ」（令和元年 5 月 31 日追加）
- ・福田徳三（1874～1930）「穂積、宮崎両博士遺著の新刊」『改造』昭和 4 年 8、10 月号⇒同『厚生経済研究』下卷（刀江書院、昭和 5 年 3 月 5 日刊）647～685 頁に再録。（令和 6 年 1 月 1 日追加）

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1442725/1/1>〉（180～200 齣）

〈 <https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/15413/060FT00816.pdf> 〉 ン

〈<https://www.lib.hit-u.ac.jp/images/2019/12/fukudatokuzopapers.pdf>〉(福田徳三関係資料目録)

⇒ (復刊)『【福田徳三著作集 第19巻】厚生経済研究』(信山社、平成29年7月31日刊)

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b308906.html>〉

・藤木(藤木邦彦(1907~1993)か?)『史学雑誌』第41編第10号(昭和5年10月○日刊)1240頁(未見)(令和元年5月31日追加)

(参考)

・宮崎道三郎・中田薫『法制史研究上日韓語比較論文集』(出版社不明、明治年間。宮崎道三郎稿16編、中田薫稿2編を収載)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000001003358-00>〉

(2) 論説、漢詩文その他

(註1) 行初「*」は上記中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4(1929)年6月20日刊〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/3>〉)に収載を、行末「第1」等はその収載番号を示す。「?」は調査中のものである。

(註2) 『同人社文学雑誌』、『明法志林』、『東洋学芸雑誌』、『史学雑誌』及び『東京学士会院雑誌』所収論稿については調査中である。なお、『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』(大空社刊)各巻を適宜参照した。(平成31年4月30日、同5月25日一部修正)

(註3) 行初「**」は宮崎道三郎編『同窓集』第二編(和装、出版地不明、出版社不明、明治17(1884)年5月刊)〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉(早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫)に収載を、行末括弧内丁数はその掲載丁数を示す。(令和元年6月28日追加)

[安政2(1855)年9月4日(10月14日) 出生]

[明治13(1880)年7月 東京大学法学部卒業]

[同年 法学士の学位を受く、東京大学法学部研究生] (令和元年7月31日追加)

[明治13(1880)年12月28日 文部省御用掛] (令和元年7月31日追加)

[明治14(1881)年7月25日 東京大学御用掛兼勤] (令和元年7月31日追加)

[同年同日 和漢法律史編輯被仰付] (令和元年7月31日追加)

[明治14(1881)年11月11日 東京大学助教授、法学部勤務]

明治14(1881)年

- ・読相馬永胤君権利説 明法志林5号15—27頁 [1881/05/15] (相馬永胤: 1850~1924)〈<https://www.chuo-u.ac.jp/uploads/2018/10/8.pdf?1654905600061>〉(『明法志林』関連)
- ・日本古今離縁法ノ解剖 明法志林10号11—20頁 [1881/08/1]
- ・日本古今離縁法ノ解剖(前号ノ続) 明法志林11号15—19頁 [1881/08/15]
- ・日本古今離縁法ノ解剖(前号ノ続) 明法志林12号20—25頁 [1881/09/1]
- ・日本古今離縁法ノ解剖(第十二号ノ続) 明法志林14号39—46頁 [1881/10/1]

明治15(1882)年

・井上哲次郎(1856~1938)編『同窓集』第老編(明治15年5月7日刊)収録漢詩文(「宮崎津城」名義): 〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308>〉

(三丁表)「梅花次巽軒詞兄韻」、同「桶峽作」、(三丁裏)「墨陀觀花」、(四丁裏)「雨後過山寺有感」、(五丁表)同(続き)、(六丁表)「偶成寄伯兄」、(六丁裏)同(続き。但しここは信夫恕軒(1835~1910)の評語部分)、(七丁表)「巽軒居士函嶺雜咏序」、(七丁裏)同(続き)、(八丁表)同(続き)、同「寄英国留学生和田垣子謙」(和田垣子謙: 謙三?、1860~1919)、同「題画」、(八丁裏)同(続き)、同「夜過古戰場」、同「偶成」、(参考)(一丁裏)元田石窓(肇、1858~1938)「題山居図」に宮崎津城の「評語」あり。(令和元年7月9日追加、同11日一部補正)

・** 寄敬宇先生 同人社文学雑誌78号15—16頁 [1882/06/10] (敬宇: 中村敬宇(1832

～1891)) (四丁表) (平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 6 月 28 日一部修正)

- ・(翻訳) 英人トマス氏英国憲法判決録抄訳― 明法志林 31 号 271—275 頁 [1882/06/15]
- ・(翻訳) 英人トマス氏英国憲法判決録抄訳 (前号続) 明法志林 32 号 328—331 頁 [1882/07/1]
- ・祭祀ト法律トノ関係 明法志林 33 号 341—349 頁 [1882/07/15]
- ・(翻訳) 英人トマス氏英国憲法判決録抄訳 (前号続) 明法志林 33 号 358—363 頁 [1882/07/15]
- ・祭祀ト法律トノ関係 (第三十三号続) 明法志林 35 号 433—440 頁 [1882/08/15]
- ・**同窓集第二編序 同人社文学雑誌 83 号 8—9 頁 [1882/09/20] (序一丁表) (後掲「3 (5) 漢詩」参照) (平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 6 月 28 日一部修正)
- ・祭祀ト法律トノ関係 (第三十五号続) 明法志林 38 号 50—56 頁 [1882/10/1]
- ・**夜座偶成 東洋学芸雑誌 14 号 363—364 頁 [1882/11/25] (四丁裏) (令和元年 6 月 28 日一部修正)
〈<https://kotobank.jp/word/%E6%9D%B1%E6%B4%8B%E5%AD%A6%E8%8A%B8%E9%9B%91%E8%AA%8C-1189339>〉 (東洋学芸雑誌)
- ・**宿山寺題画壁 東洋学芸雑誌 14 号 364 頁 [1882/11/25] (五丁表) (令和元年 6 月 28 日一部修正)

[明治 16 (1883) 年 7 月から同 17 (1884) 年 6 月にかけて東大文学部政治学理財学科で「日本古今法制」を講ず。(『阪谷芳郎伝』(故人阪子爵記念事業会、昭和 26 年 2 月 28 日刊) 74～76 頁)] (令和元年 6 月 11 日追加)

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3008525/1/1>〉 (57、58 齣)

明治 17 (1884) 年

- ・刑罰ノ沿革 明法志林 68 号 311—315 頁 [1884/01/1]
 - ・巽軒詩鈔序 東洋学芸雑誌 28 号 265—266 頁 [1884/01/25] (巽軒: 井上哲次郎: 1856～1944)
〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/show.php?title=toyogakuge&issue=28&num=30&size=50&page=29>〉
 - ・巽軒詩鈔序 『巽軒詩鈔』(阪上半七、明治 17 (1884) 年 2 月 8 日出版届、上・下)
〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991935>〉、〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991936>〉
 - ・旧幕時代夫婦ノ関係 (雑録) 法学協会雑誌第 3 号 57—60 頁 [1884/05/?]
 - ・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 17 (1884) 年 5 月刊) (早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。)
〈https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/discovery/search?vid=81SOKEI_WUNI:WIN
E〉
- (上記**印以外の同書収録漢詩文: 「懷古」(二丁表)、「夜遊山寺」(二丁表)、「冬夜読書。寄井上巽軒」(二丁表裏)) (令和元年 6 月 28 日、7 月 9 日各一部修正)

[明治 17 (1884) 年 8 月～同 21 (1888) 年 10 月 欧州留学]

(参考)

・『鷗外全集』第 35 卷 (岩波書店、昭和 50 年 1 月 22 日刊)「航西日記」75、76 頁 (明治 17 (1884) 年 8 月 24、29 日条、船中同行者 (「日東十客」) 関係)、「獨逸日記」90 頁 (明治 17 (1884) 年 11 月 12 日条、宮崎道三郎、井上哲次郎関係) (『獨逸日記 小倉日記』 (森鷗外全集 13、ちくま文庫、平成 8 (1996) 年 7 月 24 日刊) 14、15 頁参照。) (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加、令和 5 (2023) 年 5 月 19 日「航西日記」の件追加)

明治 20 (1887) 年

・日本古今離縁法ノ解剖 批評法律名家纂論 附 明法家列伝 (法学士渋谷慥爾 (1854～1895) 校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治 20 年 6 月刊) 260—266 頁 [1887/6/ (日付なし)] (上記明法志林所収論稿か。)

・刑罰ノ沿革 批評法律名家纂論 附 明法家列伝 (法学士渋谷慥爾 (1854～1895) 校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治 20 年 6 月刊) 266—269 頁 [1887/6/ (日付なし)] (上記明法志林所収論稿か。)

・漢詩三題 (夜遊山寺、偶成寄伯兄、雨後過山寺有感) 批評法律名家纂論 附 明法家列伝 (法学士渋谷慥爾 (1854～1895) 校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治 20 年 6 月刊) 266—269 頁 [1887/6/ (日付なし)] (「偶成寄伯兄」と「雨後過山寺有感」は上記井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) に、また「夜遊山寺」は上記宮崎道三郎編『同窓集』第貳編 (明治 17 (1884) 年 5 月刊) にそれぞれ先に収録。(このみ令和元年 6 月 28 日、同 7 月 9 日各一部修正))

[明治 21 (1888) 年 10 月 19 日 帰朝、帝国大学法科大学教授]

明治 22 (1889) 年

・羅馬法の独乙国に伝来したる始末を述ぶ 法学協会雑誌 6 卷 (通号 59 号) 587—596 頁 [1889/2/20]

・羅馬法の独逸国に伝来したる始末を述ぶ (前号のつゞき) 法学協会雑誌 7 卷 (通号 60 号) 1—5 頁 [1889/3/25]

・羅馬法の独逸国に伝来したる始末を述ぶ 法学協会雑誌 7 卷 (通号 61 号) 98—105 頁 [1889/4/25]

明治 23 (1890) 年

・独乙国法学家アイヒホルン氏ノ伝 法学協会雑誌 8 卷 (通号 73 号) 236—242 頁 [1890/4/25]

・独逸法学家アイヒホルン氏ノ伝 (承前) 法学協会雑誌 8 卷 (通号 75 号) 411—414 頁 [1890/6/25]

・創立者総代宮崎道三郎君の陳述 臨時科外講義録第 7 号 (日本法律学校、明治 23 年 10 月 4 日刊) 附録 2～10 頁 (『日本大学百年史』第 1 卷 (日本大学、平成 9 (1997) 年 3 月 31 日刊) 184～187 頁に再録。) (令和 2 (2020) 年 3 月 12 日追加)

明治 24 (1891) 年

- ・ベルンハルト、ヨセフ、ウキンドシヤード氏ノ小伝 法学協会雑誌 9 卷 2 号 82—83 頁 [1891/2/1] [雑録] 無記名
- ・法律沿革ノ研究ニ就テ 明治二十四年五月三日大学通俗講談会ニ於テ 東洋学芸雑誌 8 卷 117 号 269—281 頁 [1891/06/25] (令和元年 5 月 25 日一部修正)

[明治 24 (1891) 年 8 月 法学博士]

明治 25 (1892) 年

- ・法律史料の蒐集は目下の急務なり[史料] 法学協会雑誌 10 卷 1 号 68—71 頁[1892/1/1] (註: 表紙表題は何故か「法律史料ノ研究ハ目下ノ急務タリ[史料]」とある。) (令和元年 5 月 25 日一部修正)
- ・*サウキニー氏の略伝[伝記] 法学協会雑誌 10 卷 2 号 177—180 頁 [1892/2/1] 附録第 5—1
- ・ゲルベル (Gerber) 及ひリヨンネ (Roenne) 二氏の訃音 法学協会雑誌 10 卷 5 号 486—486 頁 [1892/5/1]
- ・*国司ノ起源 法学協会雑誌 10 卷 9 号 779—797 頁 [1892/9/1] 附録 第 1

明治 26 (1893) 年

- ・ウインドシヤイド氏の訃音 法学協会雑誌 11 卷 2 号 165—166 頁 [1893/2/1] [海外記事] 無記名
- ・ウインドシヤイド(Windscheid)氏の勤学 法学協会雑誌 11 卷 2 号 166—166 頁[1893/2/1] [漫筆]執筆等名: 津城漁史 附録第 5—2
- ・*津城漫筆 法学協会雑誌 11 卷 4 号 343—346 頁 [1893/4/1] 附録第 2
- ・*津城漫筆 法学協会雑誌 11 卷 5 号 447—449 頁 [1893/5/1] 附録第 2
- ・*津城漫筆 法学協会雑誌 11 卷 6 号 540—543 頁 [1893/6/1] 附録第 2
- ・羅馬法ノ影響ニ就テ 東洋学芸雑誌 10 卷 146 号 577—583 頁 [1893/11/25]
- ・羅馬法ノ影響ニ就テ(前号ノ続) 東洋学芸雑誌 10 卷 147 号 617—619 頁[1893/12/25]

明治 27 (1894) 年

- ・*裁判至要抄ノ由来 法学協会雑誌 12 卷 1 号 30—40 頁 [1894/1/1] 附録第 3 (参考) 高柳眞三 (1902~1990) (紹介及批評)「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』『国家学会雑誌』第 43 卷第 6 号 (昭和 4 年 6 月 1 日刊) 173~174 頁 (令和 3 年 2 月 14 日追加)
- ・(漫録) 詩四首 (津城 宮崎道三郎、奠南 山田喜之助連名 (宮崎博士:「寄奠南山田君 津城 宮崎道三郎」、山田氏「次前韻却呈津城兄」、宮崎博士「寄奠南山田君 津城」、山田氏「次前韻却呈宮崎兄」)) 法学新報 34 号 64—66 頁 [1894/1/28] (山田喜之助: 奠南 (てんなん)、1859~1913、東京法学院創設に尽瘁。法学新報は明治 24 (1891) 年 4 月 25 日創刊) (平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 5 月 25 日、5 月 31 日各一部修正)
- ・*津城漫筆 (其五) 法学協会雑誌 12 卷 4 号 337—339 頁 [1894/4/1] 附録第 2
- ・*古代売買ノ方式 其ノ一、人身売買 法学協会雑誌 12 卷 9 号 723—734 頁[1894/9/1]

附録第 4

- ・徳政参考文書(大樹寺文書)[史料] 法学協会雑誌 12 卷 12 号 986—987 頁 [1894/12/1]

[明治 30 (1897) 年 6 月 東京帝国大学法科大学教授]

[明治 31 (1898) 年 12 月 11 日 東京学士会院会員 (明治 39 (1906) 年 6 月 12 日帝国学士院に改称)] (令和 2 年 4 月 18 日追加、同年 5 月 9 日一部修正)

明治 32 (1899) 年

- ・*律令に就きて (明治 32 年 2 月 12 日東京学士会院例会講演) 東京学士会院雑誌 21 編 3 号 99? (100?) —112 頁 [1899/3/28] 第 1

明治 33 (1900) 年

- ・*質屋の話 (明治 32 年 11 月 12 日東京学士会院例会講演) 東京学士会院雑誌 22 編 1 号 1—45 頁 [1900/1/28] 第 2
- ・手附の話 東洋学芸雑誌 17 卷 231 号 504—511 頁 [1900/12/25] (平成 31 年 4 月 30 日追加)

明治 34 (1901) 年

- ・*日本支那古代の為替制度 (明治 33 年 10 月 20 日史学会例会講演) 史学雑誌 12 編 1 号 1—21 頁 [1901/1/25] 第 3
- ・手附の話 (承前) 東洋学芸雑誌 18 卷 232 号 6—12 頁 [1901/1/25] (平成 31 年 4 月 30 日追加)
- ・手附の話 (承前、完) 東洋学芸雑誌 18 卷 233 号 58—66 頁 [1901/2/25] (平成 31 年 4 月 30 日追加)
- ・*手附の話 (明治 33 年 11 月 11 日東京学士会院例会講演) 東京学士会院雑誌 22 編 9 号 447—496 頁 [1901/11/28] 第 4
- ・*家人ノ沿革 (明治 34 年 10 月 13 日東京学士会院例会講演) 東洋学芸雑誌 18 卷 242 号 465—478 頁 [1901/11/25]、243 号 512—525 頁 [1901/12/25]、244 号 18—29 頁 [1902/01/25] 第 5

明治 35 (1902) 年

- ・*唐代ノ茶商ト飛銭 (明治 35 年 11 月 9 日東京学士会院例会講演) 東洋学芸雑誌 19 卷 254 号 493—503 頁 [1902/11/?]、第 255 号 (承前、完) 535—547 頁 [1902/12/25] 第 6

明治 36 (1903) 年

- ・*都加佐名義考 法学協会雑誌 21 卷 4 号 183—203 頁 [1903/4/1] 第 7
(参考) 和仁かや「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一卷 公法・基礎法編』(成文堂、令和 4 (2022) 年 12 月 28 日刊) 213~231 頁
<<http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html>> (令和 5 年 1 月 26 日追加)

明治 37 (1904) 年

- ・*日本法制史ノ研究上ニ於ケル朝鮮語ノ価値 法学協会雑誌 22 卷 4 号 461—472 頁

[1904/4/1] 第 8

・*日本法制史ノ研究上ニ於ケル朝鮮語ノ価値 (承前) 法学協会雑誌 22 卷 5 号 637—668 頁 [1904/5/1] 第 8

(参考) 高柳真三 (1902~1990) (紹介及批評) 「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』」『国家学会雑誌』第 43 卷第 6 号 (昭和 4 年 6 月 1 日刊) 177~178 頁 (令和 3 年 2 月 14 日追加)

・*朝鮮語ト日本法制史 国家学会雑誌 18 卷 (通号 209 号) 35—49 頁 [1904/7/20] 第 9

(浅見倫太郎 (1868~1943) 『朝鮮法制史稿』(アジア学叢書 82、大空社、平成 13 年 5 月刊。大正 11 (1922) 年巖松堂書店発行の復刻) の「参考資料」として添付) (令和元年 8 月 20 日追加)

・日本法制史研究上ニ於ケル朝鮮語ノ価値 史学雑誌 15 編 7 号?—?頁 [1904/7/?] (令和元年 5 月 30 日追加)

・*朝鮮意流村ノ地名ヲ論シテ、日本古代ノ内治外交ニ関する二三ノ事項ニ及フ 国家学会雑誌 18 卷 (通号 212 号) 27—50 頁 [1904/10/20] 第 10

・*朝鮮語ト日本歴史 (明治 37 年 12 月 11 日東京学士会院例会講演、東洋学芸雑誌第 21 卷第 279 号 554—566 頁 [1904/12/25] 第 11

明治 38 (1905) 年

・*姓氏雑考 法学協会雑誌 23 卷 2 号 143—155 頁 [1905/2/1] 第 12

・*姓氏雑考 (承前) 法学協会雑誌 23 卷 3 号 330—337 頁 [1905/3/1] 第 12

・*賂ト出挙 国家学会雑誌 19 卷 9 号 (通号 223 号) 1—12 頁 [1905/9/1] 第 13

・*姓氏雑考 (第三号ノ続キ) 法学協会雑誌 23 卷 11 号 1525—1535 頁 [1905/11/1] 第 12

・*賂ト出挙 (第九号ノ続) 国家学会雑誌 19 卷 12 号 (通号 226 号) 1—5 頁 [1905/12/1] 第 13

明治 39 (1906) 年

・啄評ノ原義 史学雑誌第 17 編第 1 号?—?頁 [1906/1/?]

・*暉ノ字義ヲ論シテ、日本・支那・印度古代ノ手附ニ及フ 法学協会雑誌 24 卷 2 号 117—125 頁 [1906/2/1] 第 15

・*姓氏雑考 (承前) 法学協会雑誌 24 卷 3 号 306—315 頁 [1906/3/1] 第 12

・*日韓兩國語ノ比較研究 史学雑誌 17 編 7 号 657—?頁、8 号 809—?頁、9 号 926—?頁、10 号 1012—?頁及 12 号 1225—?頁、18 編 4 号 357—?頁、8 号 839—?頁、10 号 1055—?頁及 11 号 1173—?頁 [1906/7/?—1907/11/?] 第 16 (令和元年 5 月 31 日一部修正)

・*佐刀 (郷里) ノ原義 国家学会雑誌 20 卷 10 号 (通号 236 号) 1—7 頁 [1906/10/1] 第 17

明治 40 (1907) 年

・*部曲考 法学協会雑誌 25 卷 3 号 299—326 頁 [1907/3/1] 第 18

・*部曲考補遺 法学協会雑誌 25 卷 4 号 536—539 頁 [1907/4/1] 第 19

・*再び服匿 (保止支) の事を論じて匈奴語と蒙古語ノ比較談ニ及ぶ 史学雑誌 18 編 7

号 709—?頁 [1907/7/?] 第 20 (令和元年 5 月 31 日追加)

明治 41 (1908) 年

- ・* [上古] 阿利那礼河ト新羅ノ議會 法学協会雑誌 26 卷 4 号 241—260 頁 [1908/4/1] 第 21
- ・* [上古] 阿利那礼河ト新羅ノ議會(承前) 法学協会雑誌 26 卷 5 号 323—338 頁 [1908/5/1] 第 21
- ・* 阿利那礼河ト新羅ノ議會 (承前) 法学協会雑誌 26 卷 6 号 402—413 頁 [1908/6/1] 第 21
- ・* 須恵(陶)の語原を論じて鳥居龍蔵君に答ふ 史学雑誌 19 編 11 号 1226—?頁 [1908/11/?] (鳥居龍蔵: 1870~1953) 第 22 (令和元年 5 月 31 日追加)

明治 42 (1909) 年

- ・* 履中紀ノ史ニ就テ 国家学会雑誌 23 卷 1 号 (通号 263 号) 1—20 頁 [1909/1/1] 第 23
- ・* 勝部考 法学協会雑誌 27 卷 3 号 333—356 頁 [1909/3/1] 第 24

明治 43 (1910) 年

- ・浩瀚なる『日本法制史』の講座を担当せる余の時間利用 実業之日本 13 卷 8 号 (春季増刊) 75—76 頁 [1910/4/10 (印刷納本)] (令和元年 5 月 25 日一部修正)
- ・* 漢字ノ別訓転用ト古代ニ於ケル我邦制度上ノ用語 法学協会雑誌 28 卷 5 号 724—743 頁 [1910/5/1] 第 25
- ・* 皆叱知考補遺 (明治 43 年 8 月 28 日書翰) (論集 648 頁) 第 26
- ・毛麻利叱智に就いて 東亜之光 5 卷 10 号 33—47 頁 [1910/10/1] 第 27
- ・* 任那雑考 国家学会雑誌 24 卷 12 号 (通号 286 号) 1715—1730 頁 [1910/12/1] 第 28

明治 44 (1911) 年

- ・* 任那雑考 国家学会雑誌 25 卷 2 号 (通号 288 号) 189—200 頁 [1911/2/1] 第 28
- ・* 任那幸ノ韓名『吉』ノ本義 法学協会雑誌 29 卷 3 号 341—350 頁 [1911/3/1] 第 29

[明治 45 (1912) 年 6 月~大正 2 (1913) 年 7 月 帝国学士院幹事] (令和 2 年 4 月 18 日追加)

[大正 3 (1914) 年 4 月 妻よし逝去 (1867~1914)] (令和 5 (2023) 年 4 月 2 日追加)

大正 4 (1915) 年

- ・上田万年・高楠順次郎・白鳥庫吉・村上直次郎・金沢庄三郎共編『日本外来語辞典』(三省堂、大正 4 年 (1915) 5 月 11 日刊。項目の「署名略字」には松村任三 (J.M.)・宮崎道三郎 (M.M.)・中田薫 (N.)・常磐井堯猷 (J.T.)のものもある。この署名は語源など

の解説を書いた人のもので、疑義が残る場合に付けられた。

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/969166/1/3>〉

〈<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/ayumi23>〉(三省堂辞書の歩み 第23回)

・このうち宮崎道三郎博士と中田薫博士分については、以下の箇所が存在するが、取り急ぎ目を通しただけで精査していないことから、見落としがあることと思う。いずれ再確認の予定である。もとよりすべてローマ字検索であるが、記載に不便なため併用の漢字で示した。数字(①、②、③)は各語源解説で順番があるものを指し、それに細注があるものは(細注)として記した。各頁は左右二段に分かれるが諸般の事情で頁数のみにした。重複署名者が宮崎博士・中田博士以外の方のものもあるが併記していない。なお、同書復刻版として『辞典叢書①日本外来語辞典』(東出版、平成7(1995)年12月10日刊)がある。(令和4(2022)年1月16日追加)

ア 宮崎道三郎博士分

10～11頁 鴨緑江、13頁 朝臣①、14頁 直③、57頁 畠(畑)、59頁 篋(へら)、85頁 鎌②、116頁 郡②、160頁 造②、③+(細注①)②、166頁 村②、166頁 群、184頁 女房、190頁 女、190頁 母、267頁 郷里+(細注)、289頁 白③、296頁 舅①、296頁 姑①、306頁 村主①、325頁 足、341頁 之①、344頁 釣瓶、366頁 海

イ 中田薫博士分

2頁 県③、13頁 朝臣②、13頁 直①、②、61頁 彦①、62頁 姫①、160頁 造③+(細注②)①、166頁 連、186頁 首、190頁 臣、306頁 村主②

[大正8(1919)年2月6日 東京帝国大学教授、法学部勤務]

[大正11(1922)年3月 東京帝国大学教授退官、同年7月27日 同名誉教授]

昭和2(1927)年

・書簡(抄)池田竜蔵(1892～1938)『「稿本 無尽の実際と学説」批評紹介等』(著者発行、昭和2年4月20日刊)40頁(平成31年4月10日追加)

[昭和3(1928)年4月18日 逝去(於市外千駄谷563自邸)]

(訃報:『東京朝日新聞』昭和3年4月20日(金)朝刊11面、黒枠広告:同昭和3年4月20日(金)朝刊12面)(令和元年5月31日追加)

[昭和4(1929)年6月20日 中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店)刊行]

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/1>〉

(3) 翻訳校訂 (令和元年 5 月 9 日一部修正)

・原田慶吉 (1903～1950) 「我が国に於ける外国法史学の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』(東京帝国大学、昭和 17 (1942) 年 4 月 13 日刊)

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879592>〉

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/data/HARADA007.html>〉

「同 [明治四十二] 年一月帝国学士院は羅馬法律書翻訳出版の議を決し、先づ同 [春木一郎: 1870～1944] 教授に儒帝の法学提要の翻訳を委嘱し、四十四年七月に其の草稿成つて、末松謙澄 [1855～1920] が其の校訂に当つたが、第三者には不明瞭な経過の裡に、宮崎道三郎の校訂を経た末松謙澄単独の翻訳書として、「ユスチーニアヌス帝欽定羅馬法学提要」²なる名のもとに、大正二年帝国学士院より第一版【四版大正一三年】が出版せられてゐる。帝国学士院は引続きガイウスの法学提要とウルピアーヌスの法範の翻訳を末松謙澄に委嘱し、大正四年には「ガイウス羅馬法解説」³【三版大正一三年】、「ウルピアーヌス羅馬法範 [羅馬法総評十二表其多附録]」⁴【三版大正一三年】なる名のもとに、同じく帝国学士院より出版せられた。」(297 頁、161 コマ)

⇒後掲「4 (2) 末松謙澄博士との関係」参照。(この分令和 5 (2023) 年 12 月 12 日追加)

【参考1】『日本学士院ニュースレター』2015.4 No. 15 5頁

学士院の歩み 第8回 研究調査事業

〈<http://www.japan-acad.go.jp/pdf/newsletter/janews15.pdf>〉

【参考2】宮崎道三郎博士『津城詩稿』から転載 (中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) 巻頭所載分)

「末松子爵受帝国学士院嘱。訳解需帝欽定羅馬法学提要。及禹氏法範駕氏羅馬法解説三書。大正二年春起筆。前後実互五年之久。洵可謂勉矣。余亦受同院嘱。得俱尽微力。卒業之日賦此。于時大正六年七月也。」

(「末松子爵帝国学士院ノ嘱ヲ受ケ。需帝欽定羅馬法学提要及ビ禹氏法範駕氏羅馬法解説ノ三書ヲ訳解ス。大正二年春起筆シ。前後実ニ五年ノ久シキニワタル。洵 (マコト) ニ勉ムルト謂ベシ。余マタ同院ノ嘱ヲ受ケ。俱ニ微カヲ尽クスヲエタリ。業ヲ卒 (オ) ウルノ日此ヲ賦ス。時ニ大正六年七月也。」(書下し文については高橋均先生の御示教を賜った。)

【参考3】『穂積陳重遺文集』の件 (令和元年 9 月 2 日追加)

・『穂積陳重遺文集』第三冊 (岩波書店、昭和 9 年 1 月 28 日刊。穂積陳重: 1855～1926) 676～679 頁 (末松謙澄翻訳関係)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-I000000780878-00>〉

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879634/1/1>〉

・『穂積陳重遺文集』第四冊 (岩波書店、昭和 9 年 9 月 20 日刊) 9 頁 (末松謙澄翻訳関係)

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1444340/1/1>〉

² 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946830>〉 (大正 13 年 7 月 17 日刊、訂正増補四版)

³ 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946857>〉 (大正 13 年 7 月 15 日刊、訂正増補三版)

⁴ 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946855>〉 (大正 13 年 7 月 17 日刊、訂正増補参版)

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879636/1/1>〉

【参考 4】当該翻訳書への田中秀央博士関与の件

・菅原憲二（1947～）・飯塚一幸（1958～）・西山伸（1963～）『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』（京都大学学術出版会、平成 17 年 3 月 25 日刊）122～124 頁（「11 末松子爵」）、126～127 頁（「13 長女悠紀子、次女英子」）、286～287 頁（末松謙澄書簡）、346～347 頁（解説）

・松平千秋（1915～2006）「田中秀央先生と日本の西洋古典学」『古代文化』第 38 卷第 8 号（昭和 61（1986）年 8 月刊。田中秀央（ひでなか）：1886～1974）40～45 頁（通頁：374～384 頁）中 43 頁（通頁：377 頁）⇒上記『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』214～223 頁に再録。（令和元年 5 月 10 日一部修正）

〈<http://clsoc.jp/aboutcsj/historia/2013/130611.pdf#search=%27%E7%94%B0%E4%B8%AD%E7%A7%80%E5%A4%AE%27>〉

・山崎和夫（1927～）「父田中秀央の「思ひ出の記」」『京都大学大学文書館だより』第 3 号（平成 14（2002）年 10 月 31 日刊）2～4 頁（令和元年 5 月 22 日追加）

〈http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/wp-content/themes/kyoto-u-2014/img/kanko/pdf/newsletter_3.pdf〉

【参考 5】宮崎道三郎博士西洋法制史研究論文の件

・原田慶吉（1903～1950）「我が国に於ける外国法史学の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』（東京帝国大学、昭和 17 年 4 月 13 日刊）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879592>〉

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/data/HARADA007.html>〉

「宮崎道三郎の如きは羅馬法に対するゲルマン法の意義を認識しつつ、独逸法制史を講述した最初の人であらうが、文書に遺されたものは何等ない（二〇）。」（303 頁）

（註）「（二〇） アイヒホルン伝（本文二九六頁参照）に於ては、明かにゲルマニストとしてのアイヒホルンを描いて、ゲルマン法研究の勃興を記述せんと意図してみたに違ひないが、肝心な所で中絶して了つてゐる。……」（307 頁）

(4) 講義録

(平成 31 (2019) 年 4 月 17 日新設、令和元 (1931) 年 9 月 8 日、同月 10 日追加) (調査中)

(参考)

- ・国立国会図書館 (「宮崎道三郎」で検索)

〈<http://www.ndl.go.jp/>〉

- ・CiNii Books (「宮崎道三郎」、「Roman law+宮崎道三郎」、「独逸法律史+宮崎道三郎」等で検索)

〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉

- ・早稲田大学図書館 (「宮崎道三郎」で検索)

〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉

- ・早稲田大学図書館所蔵 岡松参太郎文書 (令和元年 5 月 1 日追加)

〈https://myrp.maruzen.co.jp/book/ysd_a_gc15362/〉

〈https://myrp.maruzen.co.jp/wp-content/uploads/Y-08043_okamatsu.pdf#search=%27%E5%B2%A1%E6%9D%BE%E5%8F%82%E5%A4%AA%E9%83%8E%27〉

- ・東京都立中央図書館 特別買上文庫 横山健堂旧蔵資料 (令和元年 11 月 18 日追加)

〈<https://www.library.metro.tokyo.jp/>〉

〈https://www.library.metro.tokyo.jp/collection/features/catalog/special_acquisition/index/yokoyama/index.html〉

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%AA%E5%B1%B1%E5%81%A5%E5%A0%82>〉

(横山健堂: 1872~1943)

① はじめに

宮崎道三郎博士がされた講義検討のためには、博士自身執筆のものが存在しないこともあって、学生その他による筆記講義録探求が意味あること、今更言うを待たない。以下では、不十分ではあるが、その一端を記載しておくこととする。

② 法制史 (日本法制史) 関係

宮崎道三郎博士の法制史 (日本法制史) 講義録は、現在かなり多くのものが全国各大学に保存されている。例えば、CiNii 〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉、日本大学図書館法学部分館 OPAC、〈<https://www.law.nihon-u.ac.jp/library/>〉、明治大学図書館 OPAC 〈<http://www.lib.meiji.ac.jp/>〉、早稲田大学図書館 OPAC 〈<https://www.waseda.jp/library/>〉、立教大学図書館 OPAC 〈<http://library.rikkyo.ac.jp/>〉 等中「宮崎道三郎」でほぼ検索でき

る。

このうち、日本大学図書館法学部分館所蔵本は、著名な沼義雄教授（1883～1966）の筆記ノートであり、一般注記として、「故沼義雄先生の東大学生時代のノート 宮崎道三郎先生の「日本法制史」を筆記す」とある。沼義雄教授は明治 37（1904）年に一高英法科を卒業して法科大学法律学科（英法兼修）に入っているが、当時法律学科の必修科目であった「法制史」は第二回試験科目であったから、おそらく明治 38（1905）年度の講義ノートかと思われる。但し、沼教授の法科大学卒業は何故か明治 42（1909）年 7 月であるので、年次のずれがあるのかもわからない。

注目されるのは、立教大学図書館所蔵本で、これは、大久保利謙教授（1900～1995）により講義年次の違う 4 冊が蒐集され、現在は同図書館所蔵大久保利謙文庫に収蔵されている。その詳細につき、佐藤雄基教授（1981～）「立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫とその内覧会—歴史家の蔵書から見る史学史」『立教大学日本学研究所年報』第 17 号（平成 30（2018）年 7 月刊）70～61（（1）～（10））頁に、詳しい紹介がなされている。

〈<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021680386>〉

〈https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=17098&item_no=1&page_id=13&block_id=49〉

伊能秀明氏（1953～）『法制史料研究 3』（巖南堂書店、平成 14（2002）年 8 月 25 日刊）中「第一章 「日本法制史」概説書 細目次総覧—クロニクル日本法制史学 明治～大正期—」16、44～45 頁は、明治大学図書館所蔵本を用い、「7 宮崎道三郎述『日本法制史』（大正三・一九一四年九月、文信社、非売品）」として、「附言」及び「目次」を掲げている。また、同書 15～16、24～28 頁には、宮崎博士講義案に依拠したともいわれる「4 三浦菊太郎『日本法制史』（明治三三・一九〇〇年五月、博文館）」を紹介している。

この他、末弘巖太郎博士（1888～1951、明治 45（1912）年 7 月法科大学法律学科（独法兼修）卒）の講義ノートは、当時有名であったようである（六本佳平（1939～）・吉田勇（1945～）編『末弘巖太郎と日本の法社会学』（東京大学出版会、平成 19 年 3 月 30 日刊）10 頁参照。）。

（参考 1）山口道弘教授講義（令和 2 年 7 月 15 日追加）

・「日本法制史演習」（千葉大学）

〈<http://www.chiba-u.ac.jp/syllabus/2012/A1/2012A114A7601.htm>〉

・「日本法制史」（九州大学、令和元（2019）年 2 月 8 日最終更新）

〈http://www.law.kyushu-u.ac.jp/faculty/syllabus/syllabus_v2.cgi?nengakki=2019_2&iid=52〉

（参考 2）『法の思想と歴史』第 3 号（信山社、令和 5（2023）年 4 月 17 日刊）所収資料
・『法の思想と歴史』第 3 号（信山社、令和 5（2023）年 4 月 17 日刊。石部雅亮（大阪公立大学名誉教授）責任編集）（※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺—和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載。）（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加。その後同年 5 月 5 日田口先生の御示教に与った。厚く御礼申し上げます）

す。)

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉

(内容)

◆新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺—和漢書目録と雑考」

- I 宮崎道三郎の略歴など
- II 東京帝国大学法学部，法制史蔵書の再建過程
- III 宮崎道三郎旧蔵書群（和漢書）
- IV 三浦周行旧蔵書に関する若干のトピック

◆田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」

- I はじめに
- II 宮崎旧蔵洋書の探索
- III 蔵書の特徴
- IV 宮崎旧蔵洋書と宮崎の仕事
- V おわりに

(参考 3) 法制史学会第 74 回総会（令和 5（2023）年 6 月 10、11 日）「ミニ・シンポジウム」（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加）

・法制史学会第 74 回総会（令和 5（2023）年 6 月 10、11 日）「ミニ・シンポジウム」（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加）

第 1 日 令和 5（2023）年 6 月 10 日（土）

〈<https://www.jalha.org/>〉 ⇒

〈 <https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/> 〉

13 : 30～17 : 00 [ミニ・シンポジウム 1]

「法制史学資料の来し方と行く末—紙媒体資料・蔵書の継承に向けて—」

「趣旨説明」

和仁かや（早稲田大学）

青木睦（前国文学研究資料館）「アーカイブズ保存論の新展開—「脱・保管(post-custodial)」時代の渦中で—」

山根泰志（九州大学附属図書館）「特殊文庫の死蔵と再生」

新田一郎（東京大学）・田口正樹（東京大学）「宮崎道三郎旧蔵書の紹介」

「コメント」

ディミトリ・ヴァンオーヴェルバーク（東京大学）

③ 羅馬法乃至比較法制史（含独逸法律史）関係

ア 「羅馬法」乃至「比較法制史」（含独逸法律史）筆記講義録の意義

・原田慶吉（1903～1950）「我が国に於ける外国法史学の発達」『東京帝国大学学術大観 法

学部 経済学部』（東京帝国大学、昭和 17（1942）年 4 月 13 日刊）

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879592/1/160>〉

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/data/HARADA007.html>〉

「帝国大学、東京帝国大学【明治三〇年六月以来】に於て羅馬法を講じた宮崎道三郎【担任明治二二年-二七年】は、法制史学者として羅馬法を講じた最初の学者であらうが、彼は羅馬法の専門家ではない。遺した羅馬法に関する研究も、「羅馬法の独逸に伝来したる始末を述」べた一篇【法協五九号六〇号六一号（明治二一年・二二年）】の外アイヒホルン伝【法協七三号七五号（明治二三年）】に於て註釈学派と後期註釈学派を語り、「古代売買ノ方法」【法協一二卷（明治二七年）九号】に於てマンキパチオ、人身売買に触れてゐる位に過ぎない。」

「比較法制史講座 [明治 26（1893）年 9 月設置] 以前に西洋法制史的な内容を含んでみたかと想像されるものに、明治二十三年の法科大学の学科科目改正時に、政治学科に「日本法制沿革」に対して「法制沿革通論」なるものがあり、二十四年の改革時に法律学科に「独逸法律史」「仏国法律史」、政治学科に「本邦法制沿革」に対して「法制沿革」があつた。文献方面に於ても、慣例上も実質的理由よりしても西洋法制史の範囲から除外されてゐる英国の公法史関係のものを除けば寥々たるものであつて、到底羅馬法と比較することは出来ない。」

・長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第 10 号（平成 19（2007）年 10 月刊）1～31 頁 ⇒同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成 21 年 10 月刊）附録 1 255 頁以下に再録。〈http://book.geocities.jp/ruichi_nagao/miyazakimitisaburou.html〉 ⇒（下記に移転との由）〈<http://ouranos2.web.fc2.com/>〉

〈<http://ouranos2.web.fc2.com/miyazakimitisaburou.html>〉

「彼の西洋法に関する著述としては、小論「羅馬法の独乙国に伝来したる始末を述ぶ」（『法学協会雑誌』五九号）及びアイヒホルン、サヴィニー、ヴィントシャイトに関する小文（42） [註（42） 「独逸国法学家アイヒホルン氏ノ伝」『法学協会雑誌』七三卷、「サウキニー氏の略伝」同一〇卷二号、「ウインドシャイト氏の勤学」同一卷二号。] があるのみで、ローマ法伝来論も文献引用のない概説である。しかし、宮崎のドイツにおける勉学ぶりを窺わせるものが他に存在する。『比較法制史』の講義録である。」

・藤野奈津子「岡松参太郎とローマ法研究—『岡松参太郎文書』の手稿からみえてくるもの—」『千葉商大論叢』第 48 卷第 2 号（平成 23（2011）年 3 月刊）57～84 頁

〈<https://ci.nii.ac.jp/els/contents110008439074.pdf?id=ART0009680816>〉

・吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 卷第 3 号（池村正道教授古稀記念号、平成 30（2018）年 12 月 25 日刊）423～451 頁（令和元年 10 月 17 日追加）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

・藤野奈津子（報告「明治前期における西洋法史学の成立過程—宮崎道三郎『羅馬法講義』ノートを中心に—」（法制史学会東京部会第 274 回例会「テーマ：日本における法史研究の歴史」（下記法制史学会第 71 回総会〔ミニ・シンポジウム〕準備会との由。平成 31（2019）年 4 月 13 日午後（土）、於東京大学東洋文化研究所大会議室）の一つとして）

<https://www.jalha.org/tokyo/>

・法制史学会第 71 回総会〔ミニシンポジウム〕「日本における法史研究の歴史」（令和元（2019）年 6 月 8 日（土）午後、於神戸学院大学ポートアイランドキャンパス。田口正樹、神野潔、赤城美恵子、藤野奈津子、松沢裕作、大中有信各氏）

・藤野奈津子（報告）「明治前期における西洋法史学の誕生」あり。

<https://www.jalha.org/soukai2/>

<https://www.jalha.org/wordpress/wp-content/uploads/2019/05/71soukai.pdf>

⇒『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）179～207 頁に収録（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

・吉原達也編「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 巻第 1 号（令和元年 6 月 28 日刊）1～96 頁（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf

【書評】林智良『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）417～420 頁（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

・吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 巻第 2 号（日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元（2019）年 9 月 27 日刊）1～30 頁（令和元年 10 月 22 日追加）

https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf

【書評】林智良『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）417～420 頁（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

・吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 巻第 4 号（南部篤教授退職記念号、令和 2（2020）年 3 月刊）223～266 頁（令和 2 年 6 月 24 日追加）

https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf

イ 現存筆記講義録

・詳しくは CiNii <<https://ci.nii.ac.jp/books/>>、早稲田大学図書館 OPAC <<https://www.waseda.jp/library/search/find/>> 等で「宮崎道三郎」、「宮崎道三郎+比較法制史」、「宮崎道三郎+Roman Law」又は「宮崎道三郎+独逸法律史」等を検索のこと。（*宮崎道三郎博士は明治 21（1888）年 10 月欧州留学より帰朝したが、明治 23（1890）年より穂積陳重博士（1855～1926）の後を継いで「羅馬法」の講義を開始した。）

（参考：全体及び穂積陳重博士等関係）

・吉原達也「東京大学草創期におけるローマ法講義—穂積陳重博士・宮崎道三郎博士・戸水寛人博士の場合—」東京大学大学院人文社会系研究科『2014—2018 年度他分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』（平成 31（2019）年 3 月刊）219～262 頁（令和 2 年 7 月 15 日追加）

・吉原達也「穂積陳重のローマ法講義について」『日本法学』第 84 巻第 1 号（平成 30 年 6 月 30 日刊）1～51 頁

https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_1.pdf

・吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』総論及び第一編 羅馬法律史」『日本法学』第 85 卷第 3 号 (令和 2 年 1 月 31 日刊) 147～215 頁 (令和 2 年 7 月 15 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_3/each/06.pdf〉

・吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』第二編 羅馬法正編第 1 卷及び第 2 卷」『日本法学』第 86 卷第 1 号 (令和 2 年 6 月 26 日刊) 37～125 頁 (令和 2 年 7 月 15 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf〉

(*宮崎博士は例えば明治 24 (1891) ～26 (1893) 年は「法制沿革、羅馬法、独逸法律史」を担当との由。)

・吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 卷第 2 号 (日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元 (2019) 年 9 月 27 日刊) 1～30 頁 (令和元年 10 月 22 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf〉

・春木一郎 (1870～1944) 筆記「Roman Law (羅馬法)」: 明治 24 (1891) 年 第 1 年次 (明治 24 (1891) ～25 (1892) 年講義) (京都大学法学部図書室所蔵、愛久澤直紀寄贈印)

・吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 卷第 4 号 (南部篤教授退職記念号、令和 2 年 3 月刊) 223～266 頁 (令和 2 年 6 月 24 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉

・春木一郎 (1870～1944) 筆記 (書写者不明、「明治 27 (1894) 年 2 月 15 日書写了」とのこと)「独逸法律史」: 第 1 年次 (明治 24 (1891) ～25 (1892) 年講義) (京都大学法学部図書室所蔵、愛久澤直紀寄贈印)

・岡松参太郎 (1871～1921) 筆記「Roman Law (羅馬法)」: 明治 24 (1891) 年 第 1 年次 (明治 24 (1891) ～25 (1892) 年講義) (早稲田大学図書館所蔵、岡松参太郎文書)

(*明治 26 (1893) 年 9 月講座制に移行。宮崎博士は羅馬法講座担任、法制史、比較法制史講座兼任。翌明治 27 (1894) 年に法制史、比較法制史講座担任となり、羅馬法講座担任は戸水寛人 (1861～1935) となる。明治 26 (1893) 年度の羅馬法は宮崎博士が講義するも、同年度の法制史の講義は文科大学助教授であった三上参次 (1865～1939) が代わって担当せしとの由。)

・松木幹一郎 (1872～1939) 筆記『羅馬法』: 明治 26 (1893) 年 第 1 年次 (早稲田大学図書館所蔵、現在未整理との由)

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%9C%A8%E5%B9%B9%E4%B8%80%E9%83%8E>〉

・吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 卷第 3 号 (池村正道教授古稀記念号、平成 30 (2018) 年 12 月 25 日刊) 423～451 頁

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

・筆記者・年代不明『比較法制史』(京都大学法学部図書室所蔵、宮本英脩氏 (1882～1944、明治 38 (1905) 年 7 月東大法卒) 寄贈印) (第一部 羅馬法制史、第二部 独乙法制史)

〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB20050909>〉

・筆記者・年代不明『比較法制史』（九州大学中央図書館所蔵）

〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BA56076532>〉

・筆記者・年代不明『比較法制史』（上巻：緒言、第一部 羅馬法制史、下巻：第二部 独逸法制史）（日本大学総合学術情報センター、東京大学総合図書館、天理大学附属天理図書館各所蔵（同一の謄写印刷本との由））（明治 27（1894）年 9 月以降明治 34（1901）年以前のいずれかの年次講義か。）〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BB15790983>〉

・筆記者・年代不明「〔特 4502〕 希臘羅馬法制史（ぎりしゃろうまほうせいし）題簽（巻頭・比較法制史） 宮崎道三郎 // 著〔明治〕寫」（東京都立中央図書館 特別買上文庫 横山健堂旧蔵資料、横山健堂：達三、1872～1943）

〈https://www.library.metro.tokyo.jp/collection/features/catalog/special_acquisition/index/yokoyama/〉（令和元年 11 月 18 日追加）

⇒（令和 5（2023）年 7 月 14 日（金）実見）（以下、令和 5（2023）年 7 月 18 日追加）
東京都立図書館「特別買上文庫 横山健堂旧蔵資料」

〈https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/collection/features/catalog/special_acquisition/index/yokoyama/index.html〉

「萩出身、当代随一の評論家が、山口県の歴史・人物・風土をはじめて世に問う奇書
長周游覧記 横山 健堂 マツノ書店 復刻版 *原本は昭和 5 年

〈<http://www.e-furuhon.com/~matuno/bookimages/10617.htm>〉」あり。

これに拠れば、横山健堂は東大国史学科卒であることから、本筆記講義録が横山本人の筆記に係るものかは不明。また、題簽が何故「希臘羅馬法制史」かも不明。

・吉原達也「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』緒言及び第一部 羅馬法制史」『日本法学』第 84 巻第 4 号（平成 31（2019）年 3 月 25 日刊）303～387 頁

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_4.pdf〉

・吉原達也「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 巻第 1 号（令和元（2019）年 6 月 28 日刊）1～96 頁

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf〉

・筆記者・年代不明『比較法制史』（第一部 羅馬法制史、下巻：第二部独逸法制史）（明治 34（1901）年 9 月～同 35（1902）年 5 月講義）（撰南大学所蔵。インクによる筆記ノートを製本。）（宮崎博士による最後の「比較法制史」講義か。）

〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN06979644>〉

（*明治 35（1902）年 3 月法制史、比較法制史講座がそれぞれ独立し、宮崎博士は法制史講座担任、比較法制史講座担任は美濃部達吉（1873～1948）となる。⇒その後明治 44（1911）年比較法制史講座は中田薫（1877～1967）に引き継がれる。）

（参考 1）春木一郎博士関係書籍

（令和元年 5 月 10 日追加、同 5 月 25 日、6 月 11 日、7 月 27 日、8 月 7 日、9 月 8 日各一部修正）

春木一郎博士（1870～1944）の京都帝国大学法科大学での羅馬法講義自筆本（明治 40 年 9 月乃至 41 年 5 月の学年における講義に使用したもの）が記念のため昭和 15 年京都帝国大学法学部に寄贈されていること（『京都帝国大学史』（京都帝国大学、昭和 18 年 12 月 20 日刊）205～206 頁）は、周知のとおりである

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1460809>〉（136～137 齣）。

寄贈者は、愛久澤直紀氏（愛久澤直哉（1866～1940、春木一郎博士の高校、大学同学生）令孫）であって、同時にかなりのものが寄贈されているようである。この春木一郎博士関係書籍の件については、前掲菅原憲二（1947～）・飯塚一幸（1958～）・西山伸（1963～）『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』（京都大学学術出版会、平成 17 年 3 月 25 日刊）310 頁参照。但し、翻刻文中「山田乙三」はあるいは「山田正三（1882～1949）」の誤植か。（〈<https://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/rireki/>〉）。山田乙三（1881～1965）は最後の関東軍総司令官）

（春木一郎）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/haruki001.pdf>〉

（愛久澤直哉）：

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%84%9B%E4%B9%85%E6%BE%A4%E7%9B%B4%E5%93%89>〉

（山田正三）

・七戸克彦（1959～）「山田喜之助・正三・作之助・弘之助：一神戸学院大学・山田作之助関係資料に寄せて—」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号（平成 28 年 10 月刊）87～185 頁

〈<http://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-03.pdf>〉

・辻村亮彦「弁護士・最高裁判事 山田作之助——その生涯」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号（平成 28（2016）年 10 月刊）27～89 頁

〈<https://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-02.pdf>〉

（参考 2）関連論考

・吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 巻第 2 号（日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元年 9 月 27 日刊）1～30 頁（令和 2 年 6 月 24 日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf〉

・吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 巻第 4 号（南部篤教授退職記念号、令和 2 年 3 月刊）223～266 頁（令和 2 年 6 月 24 日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉

・その他（調査中）

（参考 3）関連翻刻資料等

平成 30（2018）年

・（参考）吉原達也「穂積陳重のローマ法講義について」『日本法学』第 84 巻第 1 号（平成 30（2018）年 6 月 30 日刊）1～51 頁（穂積陳重：1855～1926）（令和元年 7 月 11 日追加）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_1.pdf〉

・(参考) 吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 卷第 3 号(池村正道教授古稀記念号、平成 30(2018)年 12 月 25 日刊) 423~451 頁(令和元年 7 月 11 日追加)

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

平成 31/令和元(2019)年

・吉原達也編「(資料) 宮崎道三郎博士講述『比較法制史』緒言及び第一部 羅馬法制史」『日本法学』第 84 卷第 4 号(平成 31(2019)年 3 月 25 日刊) 303~387 頁(平成 31 年 4 月 17 日追加)

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_4.pdf〉

・吉原達也編「(資料) 宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 卷第 1 号(令和元(2019)年 6 月 28 日刊) 1~96 頁(令和元年 7 月 11 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf〉

【書評】林智良(1962~)『法制史研究 70(2020)』(令和 3(2021)年 3 月 30 日刊) 417~420 頁(令和 3(2021)年 9 月 8 日追加)

・(参考) 吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 卷第 2 号(日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元(2019)年 9 月 27 日刊) 1~30 頁(令和元年 10 月 22 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf〉

【書評】林智良(1962~)『法制史研究 70(2020)』(令和 3(2021)年 3 月 30 日刊) 417~420 頁(令和 3(2021)年 9 月 8 日追加)

令和 2(2020)年

・(参考) 吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』総論及び第一編 羅馬法律史」『日本法学』第 85 卷第 3 号(令和 2(2020)年 1 月 31 日刊) 147~215 頁(穂積陳重: 1855~1926)(令和 2 年 3 月 2 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_3/each/06.pdf〉

・(参考) 吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 卷第 4 号(南部篤教授退職記念号、令和 2(2020)年 3 月 27 日刊) 223~266 頁(令和 2 年 5 月 27 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉

・(参考) 吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』第二編 羅馬法正編第 1 卷及び第 2 卷」『日本法学』第 86 卷第 1 号(令和 2(2020)年 6 月 26 日刊) 37~125 頁(令和 2 年 7 月 15 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf〉

・(参考) 『法の思想と歴史』第 3 号(信山社、令和 5(2023)年 4 月 17 日刊。石部雅亮(大阪公立大学名誉教授)責任編集)(※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺一和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載)(令和 5(2023)年 7 月 18 日追加)

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉

(5) 漢詩文 (調査中)

(平成 31 (2019) 年 4 月 17 日「漢詩」新設。令和元 (2019) 年 5 月 7 日一部修正、同 7 月 9 日「漢詩」を「漢詩文」に変更。同 7 月 22 日一部修正、令和 5 (2023) 年 5 月 30 日従来の「5 (3) 宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試み 一宮崎道三郎博士漢詩文一覧」をここに移して「漢詩文」関係を再整理した)

① 宮崎道三郎博士漢詩文に言及する著作 (令和元年 7 月 9 日「小見出し」追加)

・「法学博士宮崎道三郎君」花房吉太郎・山本源太編輯『日本博士全伝』(博文館、明治 25 (1892) 年 8 月 20 日刊) 70~72 頁 (国会図書館デジタルコレクション、47~48 齣) (令和元年 7 月 25 日追加) (<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992465/105>)

(復刻『日本人物誌叢書③ 日本博士全伝』(日本図書センター、平成 2 (1990) 年 9 月 25 日刊)) (令和元年 7 月 31 日追加)

・小谷保太郎 (1868~1940) 編『三幅対』(「旧東京大学三幅対」)(吉川弘文館、明治 36 (1903) 年 6 月 15 日刊) 18、24、36、37、113、146 頁 (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加)

〈<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/777966?keyword=&keyword=%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E&keyword=>〉(14、17、23、61、78 齣)

・斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」鳥海安治編『東西両京之大学』(明治 37 (1904) 年 1 月 7 日刊) 169~181 頁 (国立国会図書館デジタルコレクション、88~94 コマ)

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809035>〉⇒斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』(講談社学術文庫、昭和 63 (1989) 年 11 月 10 日刊) 192~205 頁に再録。(令和元年 11 月 18 日追加)

・中田薫 (1877~1967) 「宮崎道三郎先生小伝」中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和 4 (1929) 年 6 月 20 日刊) 3 頁 (「先生壮年より漢詩を善くし、往時山田奠南 (喜之助) 井上巽軒 (哲次郎) 元田石窓 (肇) の諸氏と酬和する所あり。詩稿一卷其家に蔵す。」)

(山田奠南 (喜之助) : 1859~1913、井上巽軒 (哲次郎) : 1856~1944 元田石窓 (肇) : 1858~1938。⇒例えば、井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明 明治 15 年 5 月 7 日刊) 及び宮崎道三郎編『同窓集』第貳編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 17 (1884) 年 5 月刊) 所収漢詩文のこと等を指すのか。)(令和元年 7 月 9 日一部修正)

・高柳眞三 (1902~1990) (紹介及批評) 「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』」『国家学会雑誌』第 43 卷第 6 号 (昭和 4 (1929) 年 6 月 1 日刊) 171、180 頁は、上記『宮崎先生法制史論集』所載「津城詩稿」の一部を引用、紹介する。(令和 3 年 2 月 4 日追加)

・柏村哲博 (1949~) 「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号 (平成 7 (1995) 年 12 月 22 日刊) 1~18 頁中 16 頁「彼はまた、青年時より漢詩を善くし、「津城詩稿」なる漢詩集が残っていた (中田薫編『宮崎先生法制史論集』中に「寄敬宇 (中村敬宇) 先生詩」が収録されている) が、現在その所在はわからない。」

・『日本大学百年史』第1巻（日本大学、平成9（1997）年3月31日刊）65～66頁（令和2年4月18日追加）

・長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第10号（平成19年10月刊）1～31頁（同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成21年10月刊）附録1 255頁以下に再録。）末尾（（註88）部分）に「「冬夜読書」『同窓集』第貳編（1884年）」を引用する。（令和元年7月9日追加）<http://ouranos2.web.fc2.com/miyazakimitisaburou.html>

・「宮崎道三郎博士漢詩文題目抄」『法史学研究会会報』第23号（小林宏先生米寿記念号、令和2（2020）年3月30日刊）213～216頁（令和2年4月18日追加）

② 宮崎道三郎博士漢詩文紹介（令和元年7月9日「小見出し」追加）

〔目 次〕

ア 中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和4（1929）年6月20日刊） 巻頭他所載分……………	45
イ その他収載分……………	50
（・井上哲次郎（巽軒、1856～1938）編『同窓集』第壹編（和装、出版地不明、出版社不明、明治15（1882）年5月7日刊）……………	62
（・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治17（1884）年5月刊）……………	63

ア 中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和4（1929）年6月20日刊）巻頭他所載分 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/1>

（「津城詩稿」として下記六稿（①～⑥）が掲載されているので、掲載原文とその書下し文を収録しておく。書下し文については、今回も高橋均先生の御示教に与りました。謹んで厚く御礼申し上げます。）

津城詩稿①「寄敬宇先生詩」（掲載箇所：「宮崎道三郎先生小伝」3頁裏）、津城詩稿②「夜坐偶成」（掲載箇所：「序言」5頁裏）、津城詩稿③「大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山荘。五言律二十首 録三」（掲載箇所：「凡例」1頁裏）、津城詩稿④「末松子爵受帝国学士院囑。・・・」（掲載箇所：「目次」3頁裏）、津城詩稿⑤「暮江」（掲載箇所：「附録」700頁裏）、津城詩稿⑥「還家有感」（掲載箇所：最終753頁裏）（令和元年9月2日一部補正）

（初出判明分）①「寄敬宇先生詩」：同人社文学雑誌78号15—16頁 [1882/06/10]、②「夜坐偶成」：東洋学芸雑誌14号363—364頁 [1882/11/25]（平成31年4月30日追加）

（追記）高柳真三（1902～1990）（紹介及批評）「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』『国家学会雑誌』第43巻第6号（昭和4年6月1日刊）171、180頁は、上記津城詩稿④を引用する。（令和3年2月4日追加）

①寄敬宇先生詩

敬宇先生嗜学問。万卷経史手自抄。本邦之人無
論耳。海外名士亦結交。是文是詩皆絶妙。堪感
鬼神起潜蛟。先生何以能如此。不求名利豈問爻。

[爻は易の卦の横棒。問爻で易を学ぶ、学問をするということか]

窓前樹高百尺許。馴禽日日鳴其梢。門外碧流亦
清淺。釣魚人来舟欲膠。吾亦昔年客門下。愛顧
幸辱如同胞。追思誰不濺感涙。有似帰鳥慕故巢。
当時先生始買宅。園蕪庭荒未誅茅。書生半住金
剛寺。梵唄絃誦互喧呶。爾来忽経幾歲月。学業
無成奈斗筭。雖然平生有詩癖。一枝秃筆猶未拋。
先生倘不厭応接。幽扉一日欲十敲。先賦蕪詩寄
梧下。字句拙幸勿嘲。

中村敬宇曰。推奨過当。不敢当。但中所
云。始買宅未誅茅。半住金剛寺一兩段。
使人憶起当日景況。非情意之厚。何以至
此。銘感銘感。

津城詩稿

敬宇先生ノ詩ニ寄ス

敬宇先生学問ヲ嗜（タシナ）ミ。万卷ノ経史（ケイシ）手ズカラ自ラ抄ス。

本邦ノ人論ズル無キノミ。海外ノ名士マタ交ヲ結ブ。

是（コ）ノ文是（ノ）詩 皆絶妙。堪（タエ）テ鬼神ヲ感ゼシメ潜蛟ヲ起ツ。

先生何ヲ以テ能（ヨク）此（カク）ノゴトク。名利ヲ求メズアニ爻ヲ問ウ。

窓前ノ樹高キコト百尺許（バカリ）。馴禽（ジュンキン・飼いならされた小鳥）日日ソノ
梢ニ鳴ク。

門外ノ碧流（ヘキリュウ）マタ清淺。釣魚ノ人来リ舟膠（コウ）セント欲ス。

吾マタ昔年（セキネン）門下ニ客タリ。愛顧幸辱（アイココウジョク）同胞ノ如シ。

追思スレバ誰カ感涙ヲ濺（ソソ）ガザル。帰鳥（キチョウ）故巢（コソウ）ヲ慕ウニ似タ
リ。

当時先生始メテ宅ヲ買イ。園蕪（アレ）庭荒（アレ）イマダ茅ヲ誅（チュウ）セズ。

書生半（ナカバ）住ム金剛寺。梵唄絃誦（ボンバイゲンショウ）互ニ喧呶（ケンド）。

*金剛寺は近くの荒れ寺か。

爾来（ジライ）忽（タチマチ）経ルコト幾歲月。学業成ル無ク斗筭（トショウ）イカン。

然リト雖モ平生詩癖アリ。一枝ノ秃筆ナオイマダ抛ラズ。

先生倘（タチマチ）応接ヲ厭（イト）ワズ。幽扉一日十敲ヲ欲ス。

先ニ蕪詩ヲ賦シ梧下（ゴカ・机のした）ニ寄セ。字句ノ拙幸嘲（アザケ）ルコトナカレ。

中村敬宇曰。推奨過当。敢テ当ラズ。タダ中所ニ云ウ。始買宅未誅茅。半住金剛寺ノ一兩
段ハ。人ヲシテ当日ノ景況ヲ憶（オモイ）起ス。情意ノ厚キニアラズンバ。何ゾ以テ至

此ニ至ラン。銘感銘感。

津城詩稿

②夜座偶成

草蟲不息林徑昏。乍聞剥啄響空谷。深更何物来
叩門。開戸無所見。閉戸如有聞。魑魅耶魍魎
何為訪幽人。先生垂髻已嗜学。日夜抄書筆不乾。
僕婢私笑先生拙。先生磨勵志益堅。古今東西書
尽読。至微之理莫不論。作為文章極其大。渤海
浪高洗崑崙。敬字曰、作是言者、漢洋兼学
人所独也、〔敬字⇒中村敬字〕先生此中有余
樂。不似俗客塵事纏。魑魅魍魎我謝汝。去矣莫
復訪柴関。霜階雲破山月白。翠竹舞風玉琅玕。

大沼沈山曰。通篇逼韓昌黎。

津城詩稿

夜座偶成

草蟲息（ヤマ）ズ林徑（リンケイ）昏（クラ）ク。乍チ聞ク剥啄（ハクタク）ノ空谷ニ響
クヲ。深更何物カ来リ門ヲ叩ク。戸ヲ開クニ見ルトコロ無ク。戸ヲ閉スニ聞ユル有ルゴト
シ。魑魅（チミ）カ魍魎（モウリョウ）。何為（ナンスレゾ）幽人ヲ訪レン。先生髻（ケ
イ）ヲ垂ラシスデニ学ヲ嗜（タシナ）ミ。日夜書ヲ抄シテ筆乾カズ。僕婢私笑ス先生ノ拙
ナルヲ。先生磨勵シ 志益（マスマス）堅ナリ。古今東西ノ書尽ク読ミ。至微ノ理 論ゼ
ザルナシ。

作為ノ文章其ノ大ヲ極メ。渤海ノ浪高ク崑崙ヲ洗ウ。

敬字曰ク、是ノ言ヲ作ル者、漢洋兼学ノ人 独リスルトコロ也、〔敬字⇒中村敬字〕
先生此ノ中ニ余樂有リ。俗客塵事ノ纏（マト）ウニ似ズ。

魑魅魍魎 我レ汝ニ謝サン。去レ復（マタ）柴関（サイカン）ヲ訪レルコトナカレ。
霜階雲破レ山月白ク。翠竹（スイチク）舞風（ブフウ）玉琅玕（ギョクロウカン）。

大沼沈山曰。通篇韓昌黎ニ逼（セマ）ル。

津城詩稿

*魑魅魍魎とは、自らの怠る気持ちを言ったものか。

③大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山莊。五言律二十首 録三〔末松貴爵 ⇒子爵末松謙澄
（1855～1920）。二十首中残り十七首については不明〕

暮投高館宿。松樹入雲堆。月仄寒雲動。風鳴急

霰来。論詩俱啜茗。評画且傾盃。清興何時尽。
曉鐘鄰寺催。
風流非我事。養氣試幽尋。日脚垂前浦。波光映
遠林。鳥啼如有意。雲宿豈無心。対坐清窓下。
茶烟傍竹深。
興来尋勝地。飄有似孤雲。笑語忘為客。朝昏喜
遇君。前山弦月上。遠浦夜潮聞。明日歸家去。
奈何塵事紛。

津城詩稿

大正七年冬。再（フタタ）ビ末松貴爵ノ寿福山莊ニ遊ブ。五言律二十首 録三
暮ニ投ズ高館ノ宿。松樹雲堆ニ入ル。
月仄（ホノカ）ニ寒雲（カンウン）動キ。風鳴リテ急霰（キュウサン）来タル。
詩ヲ論ジ俱ニ茗（メイ）ヲ啜（スス）リ。画ヲ評シ且（カツ）盃ヲ傾ク。
清興（セイキョウ）何レノ時カ尽キン。曉鐘（ギョウショウ）鄰寺ヨリ催サル。
風流ハ我事ニ非ズ。氣ヲ養ナイ幽尋（ユウジン・静かにあたりを尋ねる）ヲ試ミン。
日脚前浦ニ垂レ。波光遠林ニ映ル。
鳥啼キ意有ルガ如ク。雲宿リアニ無心ナラン。
対坐ス清窓ノ下。茶烟傍竹ニ深シ。
興来リ勝地（ショウチ）ヲ尋ネ。飄（ヒョウ）有リ孤雲ニ似タリ。
笑語ニ客タルヲ忘レ。朝昏（チョウコン）君ニ遇ウヲ喜ブ。
前山ニ弦月上リ。遠浦（エンポ）ニ夜潮聞ユ。
明日家ニ帰り去ル。奈何（イカン）ゾ塵事ニ
紛レン。

津城詩稿

（註）寿福山莊

当時の鎌倉の別荘については、例えば『鎌倉市史 近代通史偏』（吉川弘文館、平成 6 年 3 月 31 日刊）162～167 頁参照（〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/9523044/1/1>〉（100～102 齣））。これからすると、鎌倉五山の一つの寿福寺がある扇ヶ谷に末松謙澄の別荘があったことがわかる。ちなみに、菅原憲二（1947～）・飯塚一幸（1958～）・西山伸（1963～）『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』（京都大学学術出版会、平成 17 年 3 月 25 日刊）には、126～127 頁に「鎌倉扇ヶ谷の御別荘」、286 頁に「鎌倉町扇谷別荘末松謙澄」、346 頁に「鎌倉の末松の別荘」とある。（令和 5（2023）年 12 月 12 日追加）〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/9523044/1/1>〉（100～102 齣）

④ 末松子爵受帝国学士院嘱。・・・于時大正六年七月也。

末松子爵受帝国学士院嘱。訳解需帝欽定
羅馬法学提要。及禹氏法範駕氏羅馬法解
説三書。大正二年春起筆。前後実互五年
之久。洵可謂勉矣。余亦受同院嘱。得俱
尽微力。卒業之日賦此。于時大正六年七
月也。

潜心日夜独研磨。烏兔忽忽容易過。莫向鏡中窺
鬢髮。今朝霜雪更添多。

春日偶成

門外不来長者車。疎慵厭掃路三叉。貧居占得蕭
閒景。滿地青苔滿地花。

津城詩稿

末松子爵帝国学士院ノ嘱ヲ受ケ。需帝欽定羅馬法学提要。及ビ禹氏法範駕氏羅馬法解
説ノ三書ヲ訳解ス。大正二年春起筆シ。前後実ニ五年ノ久シキニワタル。
洵（マコト）ニ勉ムルト謂ベシ。余マタ同院ノ嘱ヲ受ケ。俱ニ微カヲ尽クスヲエタリ。
業ヲ卒（オ）ウルノ日此ヲ賦ス。時ニ大正六年七月也。

潜心（センシン）日夜独り研磨。烏兔（ウト・日と月、歳月）忽忽容易ニ過グ。
鏡中ニ向カイ鬢髮ヲ窺ウナカレ。今朝霜雪更ニ多キヲ添ウ。

春日偶成（シュンジツグウセイ）

門外来ラズ長者ノ車。疎慵（ソヨウ・ものぐさな様子）掃クヲ厭ウ路三叉。
貧居占得ス蕭閒ノ景。滿地ノ青苔 滿地ノ花。

津城詩稿

（参考）

- ・ 需帝欽定羅馬法学提要: ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946829?contentNo=2>>
- ・ 禹氏法範: ウルピアーヌス羅馬法範
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946854>>
- ・ 駕氏羅馬法解説: ガーイウス羅馬法解説
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946856>>

⑤ 暮江

暮江

山樹帯残照。数峯雲外青。渡頭人去盡。寒鳥落前汀。
野渡春潮急。舟横翠竹辺。前崖人不見。暮雨白如煙。

津城詩稿

暮江

山樹残照ヲ帯ビ、数峯雲外ニ青シ。
渡頭（ととう）の人去リ盡キ、寒鳥前汀ニ落ツ。
野渡（やと）春潮（しゅんちょう）急ニシテ、舟ハ横タワル翠竹ノ辺。
前崖ニ人見エズ、暮雨白キコト煙ノ如シ。

津城詩稿

⑥ 還家有感

還家有感

逆旅浮生夢一場。白頭帰国客心傷。柴門有樹如前日。
竹馬無朋似異郷。欲訪鄰家先問姓。行過遠道屢迷方。
他年埋骨知何処。目送孤雲立夕陽。

津城詩稿

還家感有リ

逆旅（げきりょ）浮生（ふせい）夢一場、白頭ノ帰国客心傷ム。
柴門ニ樹有リ前日ノ如ク、竹馬に朋無ク異郷ニ似タリ。
鄰家ヲ訪ネント欲シ先ニ姓ヲ問ウ、行過（こうか）遠道（えんどう）屢（しばしば）方ニ迷ウ。
他年埋骨何ノ処カ知ラン、孤雲ヲ目送シ夕陽ニ立ツ。

津城詩稿

イ その他収載分（諸雑誌、『同窓集』第壹編・第貳編等）

・夜座偶成

東洋学芸雑誌 14号 363—364頁 [1882/11/25]（明治15年）

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/toyogakuge/014/PDF/tygz-014.pdf>〉

⇒前掲「ア② 夜座偶成」と同一であるが、他に文末に「井上巽軒曰。渤海一句最有力。結末亦佳」が存在する。また、圈点をつけてある部分には、句点が入っていない。しかしそこに句点が入らないのはおかしいことから、「ア② 夜座偶成」のように句点をいれること。このことは、下記「宿山寺題画壁」についても同様である。

⇒宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉。早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）四丁裏に収録。（この分：令和元年 6 月 28 日一部修正）

（参考）『東洋学芸雑誌』（日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]）（令和 5（2023）年 2 月 26 日追加）

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/bunken.php?title=toyogakuge>〉

・宿山寺題画壁（令和元年 5 月 22 日、令和 5 年 2 月 2 日各一部修正）

東洋学芸雑誌 14 号 364 頁 [1882/11/25]（明治 15 年）

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/toyogakuge/014/PDF/tygz-014.pdf>〉

（追記）「宿山寺題画壁」は、従来原文のみ掲載していたが、令和 5（2023）年 1 月 29 日高橋均先生から下記注記、書下し文及び要旨の御示教に与った。先生の御厚情に深く感謝申し上げます。（令和 5（2023）年 2 月 26 日追記）

（注記）

「宿山寺題画壁」の詩の 11) の長い部分は、大沼枕山（1818～1891）の誉め言葉にあるように、優れているとして圈点がついているが、あるいは、当時の印刷技術として圈点を附けると句を切る点がつけれなかったのではないかということも考えられる。というのも、その前の「夜座偶成」も圈点をつけてある部分には、句点が入っていない。しかしそこに句点が入らないのはおかしい。ここから考えると、「宿山寺」の方も、整理原稿とする場合には、21 字部分は 7 字ずつ 3 行に分けていいのではなかろうかと思われる。「。＊」は、句点追加を表示する。ただし、下の 9 字はこれで一句であるから変えようもない。

宿山寺題画壁

凄風一陣排帷入。吹滅案前読書灯。破壁模糊群鬼出。张口吐焰光熒熒。草堂雖陋非無主。醜鬼何得恣侵凌。起推窓戸霜蟾落。天色黯黹無一星。乱峯突兀環如障。緑蘿纏絡樹冥冥。巖下溪深不見底（。＊）乳狼踏葉葉有声（。＊）詩人欲揮椽大筆。描却鬼状示山僧。紙燭點来拍掌笑。画図満壁百怪呈。僧言昔游鎮西日。偶然購得囊底傾。爾来愛玩如珠玉。何厭筆者不題名。

先生多才富文字。況復今夜宿吾亭。願賦一詩記来歴。天下其奈衆目盲。嗚呼画図神妙既如此。世人雖盲誰敢輕。只怕不蔵鐵櫃底。群鬼夜深脱画行。

大沼沈山曰。巖下二句。勝於淡窓翁。

井上巽軒曰。奇之又奇者。唯恐失于奇耳。

⇒宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉。早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）五丁表に収録。（この分：令和元年 6 月 28 日一部修正）

- | | |
|----------------|--------------------------------------|
| 1) 凄風一陣排帷入。 | 凄風一陣 帷（とぼり）を排（ひら）きて入り、 |
| 2) 吹滅案前読書灯。 | 案前（あんぜん）の読書灯を吹き滅す。 |
| 3) 破壁模糊群鬼出。 | 壁を破り模糊たる群鬼出で、 |
| 4) 張口吐焰光熒熒。 | 口を張り焰（ほのお）を吐き光熒熒（ひかりけいけい）たり。 |
| 5) 草堂雖陋非無主。 | 草堂陋なりと雖も主無きに非ざるに、 |
| 6) 醜鬼何得恣侵凌。 | 醜鬼何ぞ得ん恣（ほしい）ままに侵凌するを。 |
| 7) 起推窓戸霜蟾落。 | 起ちて窓戸を推すに霜蟾（そうせん）落ち、 |
| 8) 天色黯黹無一星。 | 天色黯黹（てんしょくあんたん）として一星も無し。 |
| 9) 乱峯突兀環如障。 | 乱峯突兀（らんほう とっこつ）として環（めぐ）ること障（とぼり）の如く、 |
| 10) 緑蘿纏絡樹冥冥。 | 緑蘿纏絡（りょくら てんらく）して樹冥冥（き めいめい）たり。 |
| 11) 巖下溪深不見底 | 巖下（がんか）溪（たに）深くして底を見ず、 |
| 12) 乳狼踏葉葉有声 | 乳狼（にゅうろう）葉を踏み葉声（は せい）有り。 |
| 13) 詩人欲揮椽大筆。 | 詩人椽大（てんだい）の筆を揮（ふる）わんと欲し、 |
| 14) 描却鬼状示山僧。 | 鬼状を描却（びょうきやく）し山僧に示す。 |
| 15) 紙燭點来拍掌笑。 | 紙燭を點じ来り掌（て）を拍（たた）きて笑い、 |
| 16) 画図満壁百怪呈。 | 画図壁に満ち百怪呈（あらわ）る。 |
| 17) 僧言昔游鎮西日。 | 僧言う昔 鎮西に遊びし日、 |
| 18) 偶然購得囊底傾。 | 偶然購得し囊底（のうてい）傾く。 |
| 19) 爾来愛玩如珠玉。 | 爾来（じらい）愛玩すること珠玉の如く、 |
| 20) 何厭筆者不題名。 | 何ぞ厭（いと）う筆者 名を題（しる）さざるを。 |
| 21) 先生多才富文字。 | 先生 多才にして 文字に富み、 |
| 22) 況復今夜宿吾亭。 | 況や 復（また）今夜 吾亭に宿す。 |
| 23) 願賦一詩記来歴。 | 願くは一詩を賦して来歴を記し、 |
| 24) 天下其奈衆目盲。 | 天下其れ奈（いか）んぞ衆目の盲なる。 |
| 25) 嗚呼画図神妙既如此。 | 嗚呼画図の神妙なること既に此（かく）の如くんば、 |
| 26) 世人雖盲誰敢輕。 | 世人盲なりと雖も誰かあえて輕んぜん。 |
| 27) 只怕不藏鐵櫃底。 | 只怕（おそ）る 鐵櫃（てつとく）の底に藏（しま）わざれば、 |
| 28) 群鬼夜深脱画行。 | 群鬼 夜深くして画を脱して行くを。 |

大沼沈山曰。巖下二句。勝於淡窓翁。大沼沈山曰く。巖下の二句。淡窓翁より勝れり。
井上巽軒曰。奇之又奇者。唯恐失于奇耳。井上巽軒曰く。奇之又奇なる者。唯奇に失するを恐るのみ

凄風一陣排帷入。	強風がとばりを越えて入ってきて、
吹滅案前読書灯。	机の前の書を読む灯りを吹き消した。
破壁模糊群鬼出	暗闇の中に壁を破って得体のしれない群鬼が現れ、
張口吐焰光熒熒	口を大きく開けて火炎を吐いている。
草堂雖陋非無主。	みすぼらしい草堂だが主がないわけではないのに、
醜鬼何得恣侵凌。	不気味な鬼たちはどうして勝手に入ってくるのか。
起推窓戸霜蟾落。	立って窓を開ければ月も沈み、
天色黯黹無一星。	空はうす暗く星ひとつ見えない。
乱峯突兀環如障。	そびえ立つ峰々が周りをとばりのようにかこみ、
緑蘿纏絡樹冥冥。	緑のつたが木々と絡まりあっている。
巖下溪深不見底 (。*)	岩の下ははるか深く谷底も見えないが、
乳狼踏葉葉有声 (。*)	水の流れは子もち狼が落ち葉を踏んでいるように不気味だ。
詩人欲揮椽大筆。	詩人(わたし)は自慢の筆をふるい、
描却鬼状示山僧。	鬼のかたちを詩に書いて山僧に示した。
紙燭點来拍掌笑。	(山僧は)灯りをともして手をたたいてよろこび、
画図満壁百怪呈。	壁いっぱい描かれた絵に百怪が現れた。
僧言昔游鎮西日。	僧のいうことには、昔九州をめぐる時、
偶然購得囊底傾。	たまたま有り金をはたいて手に入れたもの。
爾来愛玩如珠玉。	以来珠玉のようにいつくしんできたが、
何厭筆者不題名。	どうしたわけか作者は名を記さなかった。
先生多才富文字。	先生は多才で文章も素晴らしく、
況復今夜宿吾亭。	それにたまたま今夜わが家に宿泊された。
願賦一詩記来歴。	詩を作って由来を記してほしいと願うのは、
天下其奈衆目盲。	この世は何と無知の人であふれているから。
嗚呼画図神妙既如此。	ああ絵がこんなにすぐれているのだから、
世人雖盲誰敢輕。	たとえ世人にわからなくても軽んじられることはないだろう。
只怕不藏鐵櫃底。	気がかりは鉄の箱にしまっておかないと、
群鬼夜深脱画行。	群鬼が夜中に絵から抜けだして徘徊することです。

大沼沈山曰。巖下二句。勝於淡窓翁。大沼沈山曰く、巖下の二句は、淡窓翁よりすぐれている。

井上巽軒曰。奇之又奇者。唯恐失于奇耳。井上巽軒曰く、奇の上にさらに奇、ただ奇にとらわれすぎる点が気になる。

(注)

3) 模糊の糶は、原文では米に見えるが、米でも木でも同じ。

7) 霜蟾：月。月のような霜の光、月にいるガマからこういう。

- 12) 乳狼:子育て中の狼
 13) 椽大(てんだい)の筆:立派な文章
 24) 天下「其奈衆目盲」。

上記括弧内の部分はよくわからず、とりあえず訳をつけたが、あるいは違っているかもしれない。

- 27) 只怕不藏鐵櫃底は、文字が出ないが、鐵と同字なので、鐵にする。原文の真ん中の下は、佳か。

・異軒詩鈔序 東洋学芸雑誌 28号 265—266頁 [1884/01/25] (異軒:井上哲次郎:1856～1944) (令和元年5月31日一部修正。⇒この段階では書下し文未作成)

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldl/show.php?title=tovogakuge&issue=28&num=30&size=50&page=29>〉

・異軒詩鈔序 『異軒詩鈔』(阪上半七、明治17(1884)年2月8日出版届、上・下)

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991935>〉

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991936>〉

以下、本「異軒詩鈔序」の句読、書下し文及び大意を新たに掲載する。これについては、令和5(2023)年5月6日及び同21日高橋均先生の御示教に与った。先生の重ねての御高配に謹んで厚く御礼申し上げます。(令和5(2023)年5月19日追加、同年5月30日一部修正)

〔原文〕(「異軒詩鈔序」東洋学芸雑誌 28号 265—266頁 [1884/01/25])

○異軒詩鈔序 宮崎道三郎(士文=宮崎道三郎、君迪=井上哲次郎)

〔原文〕

○異軒詩鈔序 宮崎道三郎

一大家出焉、天下靡然奉爲標的、徧規背矩、務摹倣而不止。其弊也、高古者流爲枯淡、奇幻者變爲怪僻、清麗英爽者化爲浮華、爲踈豪、均出于同源、而其氣力不相及遠矣。於是有豪傑起而排舊習、一字一句、務出奇以反先輩之爲。天下已厭陳腐、乃喜其能新、競相摹倣、而詩風遂復一變。古今三千年、詩體之變、要如此耳。

漢魏逸矣、六朝之詩、文勝於質、其弊也浮華。於是陳子昂張九齡以蒼勁之筆、出而排之、而唐詩漸振。然時猶屬草創、未能祛六朝宮掖之風、能祛之者其李杜歟。故韓昌黎嘗賞其功、以比治水之航、磨天之刃。詩至二公、可謂盡美矣。然二公同其時、而不齊其體。若夫天馬行空、不可羈勒者、非青蓮之詩乎。蒼蒼莽莽、若登崑崙而瞰黃河者、非少陵之詩乎。要之、少陵以沈鬱見長、青蓮以飄逸得妙。其故何也。曰、其體不殊、其人不足自成一家也。繼李杜起者爲韓白。然李杜之前無李杜、故縱橫馳驟、雖得任其奔放、至韓白之時、則李杜在乎前、我所欲言、彼已言之、苟拘泥焉、則跋蹇瞻顧、幾乎一步不可行矣。於是昌黎尚奇警、務言人所不敢言、香山尚坦易、務言人所欲共言、纔以自異、然終不能脫李杜窠臼也。韓白之所以不及李杜、其在於此耶。宋以下宗唐、而詩運之淪胥亦甚矣。然觀其所謂詩人、不專

事撫仿、而自出機軸者、常得勝、而抱柱守株、不敢踰限一步者、必埋沒無聞。嗚呼、欲以詩成一家者、其亦可不察乎。

本邦詩家亦不乏其人。前之祇南海梁蛻巖源白石、後之菅茶山頼杏坪梁星巖頼山陽、是其尤也。余讀其詩、有豪放者、有流麗者、有奇險者、有清新温雅者。究之邯鄲之學步、里人之働顰、不足以樹一赤幟。宜矣其遠不及漢土也。

余也、修法學者非詩人也。然自幼嗜詩文、每談及此、亦未嘗不嘆息也。一日學友君迪袖詩卷來、徵序於余。披而覽之、則其講學之餘所作也。而葩菜繽紛、光怪錯落、短則二十字、長則二三百韻、徃徃取泰西詩意、出以漢土文字、比諸先輩所為、迥然別矣。嗚呼君迪齡未滿三十、而其所為、業已如此。余知數年之後、直駕蛻巖白石諸子而上。而其飄逸者、必如天馬行空、不可羈勒、沈鬱者、如登崑崙而瞰黃河矣。君迪平生專攻哲學、著書已行于世、固不待余喋喋也。是爲序。

中村敬字曰、士文與君迪、才學相伯仲、一究心法律、一用力哲學、如詩文若不深致思者。然詩文亦足以名于世矣、可知學識其本根而詩文特其支流。此文一氣盤旋、渾浩流轉、唯士文可以釵君迪之詩矣。

〔書下し文〕

一大家出ずれば天下靡然（びぜん）として奉じて標的となし、規に倂（そ）むき矩に背（そむ）き、務めて摹倣（もこう）して止（とど）めず。その弊や、高古なるものは流れて枯淡となり、奇幻なるものは変じて怪僻となり、清麗、英爽なるものは化して浮華となり、踈豪となる。均しく一源より出るも、その氣力あい及ばざること遠し。是（ここ）において豪傑あり起ちて舊習を排し、一字一句、務めて奇を出だし先輩の爲（なす）に反せんとす。天下すでに陳腐を厭い、乃ちそのよく新なるを喜び、競いてあい摹倣し、而して詩風ついにまた一変す。古今三千年、詩体の變、要すれば此の如きのみ。

漢魏逸（はるか）なり、六朝の詩、文（ぶん）は質（しつ）に勝り、その弊や浮華なり。ここにおいて陳子昂、張九齡蒼勁の筆をもって、出でてこれを排し、唐詩漸（よう）やく振えり。しかれども時なお草創に属し、いまだよく六朝宮掖の風を祛（はら）う能（あた）わず。よくこれを祛うはそれ李杜か。故に韓昌黎かつてその功を賞し、もって治水の航、磨天の刃に比す。詩二公に至り、美を尽くすといふべきなり。しかれども二公その時を同じくするも、その体を齊（ひとし）くせず。それ天馬空を行き、羈勒（きろく）すべからざるごときは、青蓮の詩にあらずや。蒼蒼莽莽（そうそうぼうぼう）、崑崙に登りて黃河を瞰（み）るがごときは、少陵の詩にあらずや。これを要するに少陵は沈鬱（ちんうつ）をもって長を見（あら）わし、青蓮は飄逸（ひょういつ）をもって妙をう。その故は何ぞや。曰（いわ）く、その体殊ならざれば、その人おのずから一家を成すに足らざればなり。李杜を継ぎて起つは韓白たり。しかれども李杜の前に李杜なければ、故（もとより）縦横（じゅうおう）馳驟（ちしゅう）、その奔放に任（まか）すを得るといへども、韓白の時に至らば、すなわち李杜前に在り、我の言わんと欲するところ、彼すでにこれを言い、苟（かり）に拘泥すれば、すなわち跋蹇瞻顧（ばつけんせんこ）、幾乎（ほとんど）一步も行くべからず。是（ここ）において昌黎奇警を尚（たっ）とび、務めて人のあえて言わざるところをいい、香山坦易（たんい）を尚（たっ）とび、務めて人の共に言わんと欲するところをいい、纔（わずか）にもって自（おのず）と異なるも、然れども終に李杜の窠臼（かきゅう）を脱する能わざるなり。韓白の李杜に及ばざる所以は、それここに在るか。宋以下は唐を宗とし、而して詩運の淪胥（りんしょ）また甚し。然（しか）れどもその謂（いう）ところの詩人を觀るに、専ら撫仿（ぶほう）を事とせずして、自から機軸を出だすものは、常に勝をえ、柱を抱き株を守りてあえて一步を踰限（こえ）ざるもの、必ず埋沒して聞ゆるなし。嗚呼詩をもって一家を成さんと欲するもの、それまた察せざるべけんや。

本邦の詩家もまたその人に乏しからず。前（さき）には祇南海、梁蛻巖、源白石、後（のち）には菅茶山、頼杏坪、梁星巖、頼山陽、是（これ）その尤（ゆう）なり。余その詩を讀むに、豪放なるものあり、流麗なるものあり、奇險なるものあり、清新温雅なるものあり。これを究むれば邯鄲の歩を学び、里人の働に倂（なら）い、もって一赤幟を樹（たつ）にたらず。宜矣（むべなるかな）それ遠く漢土におよばざるなり。

余は、法学を修むるものにして詩人にあらざるなり。然れども幼より詩文を嗜み、毎（つね）に談じて此に及ぶに、またいまだかつて嘆息せずんばあらざるなり。一日學友君迪詩卷を袖（しゅう）して來り、序を余に徵す。披（ひら）きてこれを覽（みる）に、則ちそ

の講学の余に作るどころなり。しかして葩菜(はさい) 繽紛(ひんぷん)、光怪(こうかい) 錯落(さくらく)、短きは二十字、長きは二三百韻、徃徃(おうおう) 泰西の詩意を取り、出すに漢土の文字を以ってし、諸(これ)を先輩の為すところに比すれば、迥然(けいぜん)として別なり。嗚呼君廸齡(よわい) 三十に満たざるに、その為すところ、業已(すで)にすでに)かくの如し。余知らん、数年の後、直(ただ)に蛻巖白石の諸子に駕して上(のぼ)らんことを。しかしてその飄逸なること、かならずや天馬の空を行くに、羈勒すべからざるがごとく、沈鬱なること、崑崙に登り黄河を瞰(み)るがごとし。君廸平生哲学を専ら攻(おさ)め、著書すでに世に行わること、もとより余の喋喋するを待たず、これを序とす。

中村敬宇曰く、士文と君廸は、才学あい伯仲し、一は心を法律に究め、一は力を哲学に用い、詩文のごときは深く思いを致さざるがごとし。然れども詩文もまた世に名あるに足り、学識その本根にして詩文ただその支流たるを知るべし。この文一氣盤旋、渾浩流轉、ただ士文もって君廸の詩を釵(かざす)べし。

〔大意〕

ひとりの優れた詩人が現れると、世の人々は奉じて目標とし、それまでのやり方を捨ててその詩人を徹底的にまねる。その悪いところは、古きよきものが味気ないものへと変り、人の目を引いたものがそれほどでもなくなり、さわやかさや優れたものが浮ついたもの、荒っぽいものとなり、同じところから生まれたはずなのに、その引きつける力はまるでくればものにならない。そんなところに人とは違う優れた人物が現れ、古いやり方を捨て、一字一句新しさを求め、それまでの人たちのやり方を覆そうとする。世の人々はありふれた表現にあきあきしているから、新しさを喜び、あらそってまねし、詩風はあつという間に変わってしまう。古今三千年、詩体の変化とは、要するにこのようなことであったのだ。

(総論)

漢魏の時代が遠くなり、六朝の詩風は、素朴さよりも華やかさを求めたから、中身のない派手さがその欠点となった。そこに陳子昂(661-702)、張九齡(673-740)などが力強い筆力でもって現れ、派手さを取り除いて、唐詩がようやく盛んになった。しかし時代は始まったばかりで、六朝の宮廷風のはなやかさから離れることができなかつた。それができるようになるのは李白(701-762)、杜甫(712-770)からであろうか。故に韓昌黎はかつてその功績をほめたたえ、治水の際の船、磨天の際の刃に引き比べた。詩はこの二人の時代になって、美をきわめたといえよう。しかしこの二人は時代は同じであったが、その詩風は違っていた。天馬が空を駆け、繋ぎとめようもないのは、青蓮(李白)の詩風ではなかろうか。はてもなく広く、崑崙山に登って黄河を望むというふうなのは、少陵(杜甫)の詩ではなかろうか。要するに少陵は沈鬱(ちんうつ・落ちついたようす)さに特色が現れ、青蓮は飄逸(ひょういつ)さに妙を示す。それはどうしてか。それは、詩風が他と異ならなければ一家と認められないからである。李白、杜甫を継いで現れるのは韓昌黎(韓愈・768-824)、白香山(白居易・772-846)である。しかし李白、杜甫の前に李白、杜甫はいないから、当然のことながら思うままにふるまうことができ、その奔放さは何に気兼ねすることもないが、韓昌黎、白香山の時には、その前に李白、杜甫がいたから、何か言おうとしても、すでに言われているし、そのことにこだわると、あれこれ気遣うことばかりで、一步も進むことができない。そこで韓昌黎は奇警を狙い、他人が言おうとしないうことを言おうとし、白香山は平明さを狙い、誰もが言っていることを言おうとすることで、何とか違いを出そうとしたが、しかし最後まで李白、杜甫の枠から抜け出ることができなかつた。韓昌黎、白香山が李白、杜甫に及ばないのは、この点なのである。宋以降は唐を宗としたが、詩運の衰えも甚だしかつた。ところで詩人とよばれる人を見てみると、まねるばかりでなく、自からの機軸を出そうするものは世に高く評価されるが、ひたすら守るばかりで一步を踏み出そうとしないなら、埋もれてしまつて他に知られることもない。ああ、詩でもって一家を成そうとするものは、そうした状況をよくよく知らなければならぬのである。(中国詩の概観)

わが国にも多くの詩家がいる。先には祇園南海(1676-1751)、梁田蛻巖(ぜいがん、1672-1757)、源白石(新井・1657-1725)、後には菅茶山(1748-1827)、頼杏坪(きょうへい、1756-1834)、梁川星巖(1789-1858)、頼山陽(1781-1832)など、いずれも優れた詩人である。わたしがその詩を読むと、豪放なるもの、流麗なるもの、奇險なる

もの、清新温雅なるものとそれぞれである。しかし所詮しやれたふうのものまね、成り上がりのものまね、いずれも赤いのぼりを立てるほどの人はいない。当然のことながら、漢土には遠く及ばないのである。(日本の詩が中国詩のまねであること)

わたしは法学を修めるもので詩人ではない。だが幼いころから詩文を学んでも優れた作品を思うたび、嘆くばかりである。最近、学友の君廸氏が詩文を携えてきて、わたしに序文を求めた。開いてみると、講学の余暇に作ったものである。とはいえ用語は華やかで、きらびやか、短いもので二十字、長いものは二三百韻、しばしばテーマを西洋に求め、それを漢土の文字で表現しようとするもので、先人の作にくらべると、優れていること明らかである。ああ、君廸は三十歳にもならないのに、その作品はすでに素晴らしい出来栄である。数年の後には、蛻巖や白石の諸氏に並ぶことは明らかである。さらにその飄逸なること、天馬の空を行くようで、繋ぎとめることはできず、沈鬱なること、崑崙山に登って黄河を眺めるようである(李白、杜甫にもなぞらえられよう)。君廸氏は哲学を専ら研究し、著書もすでに世に行われていること、わたしがあれこれ言うこともない。以上をもって序とする。(自らの未熟さと君廸氏の詩の評価)

中村敬宇のことば。士文と君廸は、才学互いに伯仲し、一人はひたすら法律を追求し、一人は哲学を学ぶことに努め、いずれも詩文などに深い関心をもたないようである。ところがその詩文においてもまた世に名高く、学識はその根本、詩文はその支流と言えよう。この序文は力にあふれ、広い知識にうらづけられていて、士文の序でもって君廸の詩を引き立てているといえよう。

*原文は何カ所か訂正し、句読点をつけた。

*とりあえずの句読と書下し訳であり、いずれ修正予定。

注

青蓮居士：李白の別号

少陵：杜甫の号

跋蹇瞻顧：裾をあげたり下げたり、前を見たり後ろを見たりする。うろうろする。

邯鄲之學歩：莊子秋水篇の故事、邯鄲風の歩き方をまねする。

効顰：莊子天運篇の故事、見にくい女が、西施のしかめつらをまねる。

赤幟：韓信が趙を攻めた時の旗から。漢の旗。

葩：詩をほめる場合に用いる語。

繽紛：落英繽紛、花が咲き乱れて美しい。(陶淵明・桃花源記)

・漢詩三題(夜遊山寺、偶成寄伯兄、雨後過山寺有感) 批評法律名家纂論 附 明法家列伝(法学士渋谷慥爾校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治 20 (1887) 年 6 月刊(日付なし)) 266—269 頁 [1887/6/*]

<<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000439460-00>>

<<https://dl.ndl.go.jp/pid/786286/1/137>>

夜遊山寺

夜坐空林下。乾坤静気凝。

篆烟口半壁。仏暈映孤灯。

古木啼霜鳥。寒溪汲月僧。

一遊忘世事。明日復来登。

夜山寺ニ遊ブ

夜ニ坐ス空林ノ下、乾坤ノ静気凝（こご）ル。

篆烟（てんえん）半壁に「上り」、仏暈孤灯ニ映ズ。

古木ニ霜鳥啼キ、寒溪ニ月僧汲ム。

一タビ遊ビテ世事ヲ忘レ、明日復タ来リ登ラン。

（注）

○篆烟□半壁：この句、4字ではおかしいことから、□に一字（動詞）が入るのでは。仮に「上」を入れてみた。篆烟とは、篆文のような曲がりくねった煙、もや。

○仏暈：仏像の光背かを指すのか。

⇒宮崎道三郎編『同窓集』第弐編（和装、出版地不明、出版社不明、明治17（1884）年5月刊）（<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>）。早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）二丁表に収録。初出は現時点では不明。（令和元年6月28日一部修正）

・近代書誌・近代画像データベース（<http://base1.nijl.ac.jp/~kindai/>）

『同窓集 第弐編』（令和2年6月24日追加）

〈

偶成寄伯兄

河梁一別水東流。心跡依然不繫舟。

夜半夢驚春寂寂。梨花淡月小高楼。

偶成（ぐうせい）伯兄ニ寄ス

河梁一別シ水東ニ流ル、心跡依然トシテ舟ヲ繫ガズ。

夜半ノ夢驚（むきょう）春寂寂（はるじゃくじゃく）、梨花淡月小高ノ楼。

⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編（和装、出版地不明、出版社不明、明治15（1882）年5月7日刊）六丁表に収録。初出は現時点では不明。（この分：令和元年6月28日、同7月9日各一部修正）

雨後過山寺有感

雨歇山光樹外明。層樓依旧半空橫。
長松夾路青苔密。飛瀑懸崖白霧輕。
戰骨百年留古塚。樵歌半月滿荒城。
無心我亦徘徊久。雲外堪聞斷磬聲。

雨後ニ山寺ヲ過（よ）ギリ感有リ

雨歇（や）ミ山光樹外ニ明ルク、層樓旧ニ依リ半空ニ横ル。
長松夾路青苔密ニシテ、飛瀑懸崖（ひばくけんがい）白霧輕シ。
戰骨百年古塚ニ留マリ、樵歌半月荒城ニ滿ツ。
無心ニ我亦タ徘徊久シク、雲外ニ堪聞（たえきく？）斷磬ノ聲。

⇒井上哲次郎編『同窓集』第壱編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 15（1882）年 5 月 7 日刊）四丁裏、五丁表に収録。初出は現時点では不明。（この分：令和元年 6 月 28 日、同 7 月 9 日各一部修正）

・詩二首（津城 宮崎道三郎、奠南 山田喜之助連名（宮崎博士：「寄奠南山田君 津城 宮崎道三郎」、山田氏「次前韻却呈津城兄 奠南 山田喜之助」、宮崎博士「寄奠南山田君 津城」、山田氏「次前韻却呈宮崎兄 奠南」）） 法学新報 34 号 64—66 頁 [1894/1/28]

中田博士によれば宮崎博士は奠南山田喜之助氏とも「酬和する所あり。」とのことであるが、これもその一つか。宮崎博士が山田氏に二回にわたり「寄奠南山田君 津城 宮崎道三郎」として漢詩を寄せ、それに山田氏が「同じ韻字を用いた漢詩」で「次前韻却呈津城兄 奠南 山田喜之助」（「前韻に次（じ）し却（しりぞ）いて津城兄に呈す 奠南 山田喜之助」とする）として答えているものである。山田氏の関係していた東京法学院（中央大学の前身）関係の『法学新報』第 34 号（明治 27 年 1 月刊）「漫録」に掲載されたものであるが、各詩及び全体につき同校出身の高名な弁護士稚翠花井卓蔵博士（山田氏高弟、1868～1931）の評語が付されている。（⇒書下し文末作成）

（山田喜之助：奠南（てんなん）、1859～1913、東京法学院創設に尽瘁。法学新報は明治 24（1891）年 4 月 25 日創刊。山田喜之助については、

・七戸克彦（1959～）「山田喜之助・正三・作之助・弘之助—神戸学院大学・山田作之助関係資料に寄せて—」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号（平成 28（2016）年 10 月刊）87～185 頁

・辻村亮彦「弁護士・最高裁判事 山田作之助——その生涯」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号（平成 28（2016）年 10 月刊）27～89 頁

等参照。）（平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 5 月 25 日、5 月 31 日、同 2 年 2 月 16 日、同 5 年 2 月 26 日、4 月 2 日各一部修正）

<http://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-03.pdf>

<https://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-02.pdf>

・『奠南詩文集 奠南山田喜之助遺稿』（編集兼発行者：小林俊三（1888～1982、山田喜之助女婿、元最高裁判事）、発行所：小林俊三法律事務所、昭和 35（1960）年 10 月 10 日刊）（ヤフオク令和 5（2023）年 3 月 29 日購入）には、宮崎道三郎博士関連として、下記が収録されている。

（17～20 頁所載） 「14 次宮崎律城（〈ママ〉、津城）所贈詩韻 却呈二首」（宮崎律城（〈ママ〉、津城）贈る所の詩の韻に次（じ）し却（しりぞ）いて二首を呈す）（上記法学新報 34 号 64—66 頁 [1894/1/28] 所載のものの再録、ただし、花井卓蔵博士の評語は未掲載）

（29～31 頁所載） 「20 寄宮崎律城（〈ママ〉、津城）在于朝鮮」（宮崎律城（〈ママ〉、津城）朝鮮に在るに寄す）（初出不明）

本件については、高橋均先生に改めて御示教を賜った。厚く御礼申し上げます。

（令和 5（2023）年 4 月 2 日追加）

・小林俊三（1888～1982）『私の会った明治の名法曹物語』（日本評論社、昭和 48（1973）年 10 月 31 日刊。40～60 頁に「山田喜之助（奠南）」あり。）

（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加）

・冬夜読書 斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」鳥海安治編『東西両京之大学』（明治 37 年 1 月 7 日刊）179～180 頁に記載あり。（国会図書館デジタルコレクション、93～94 コマ）宮崎博士が井上巽軒博士に送ったものとの由。但し、作成年月日、出所等記載なし。

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809035>〉 ⇒斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』（講談社学術文庫、昭和 63 年 11 月 10 日刊）202～203 頁に再録。（令和元年 11 月 18 日追加）

⇒柏村哲博（1949～）「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号（平成 7 年 12 月 22 日刊）16～18 頁に掲載のもの（ここには「冬夜読書」の書下し文あり。）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4428443>〉（平成 31 年 4 月 29 日、令和元年 11 月 18 日一部修正）

⇒『日本大学百年史』第 1 卷（日本大学、平成 9 年 3 月 31 日刊）65～66 頁にも掲載（ここにも「冬夜読書」の書下し文あり。）（令和 2 年 4 月 18 日追加）

⇒その後、長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第 10 号（平成 19 年 10 月刊）1～31 頁（同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成 21 年 10 月刊）附録 1 255 頁以下に再録。）末尾（（註 88）部分）に「冬夜読書」『同窓集』第貳編（1884 年）を引用していることの教示を受く。（令和元年 7 月 9 日追加）

〈<http://ouranos2.web.fc2.com/miyazakimitisaburou.html>〉

⇒当該「冬夜読書」は宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）中に「冬夜読書。寄井上巽軒」（二丁表裏）として収録されているものと確認

する。但し、更にその初出があるかは現時点では不明。(令和元年6月28日追加、同7月9日一部修正)

冬夜読書

陰晴日夜変
世事徒紛糾
貧賤業難就
研学豈忘勤
謝絶浮華客
中夜膏油焚
古今成敗理
一一白黒分
西嶺凝積雪
天籟四檐聞
原頭寒月落
犬吠隔野雲
忽思巽軒子
廢寢攻斯文
平生共積善
知己独算君
志士甘艱苦
欲策濟世勲
鴻鵠天地闊
終不混燕群

冬夜読書

陰晴日夜変じ、
世事^{いたづら}徒に紛糾。
貧賤の業就き難ければ、
研学豈に勤を忘るべけんや。
浮華の客を謝絶し、
中夜膏油を焚く。
古今成敗の理、
一一白黒に分つ。
西嶺積雪凝り。
天籟^{らい たん}四檐に聞く。
原頭寒月落ち、
犬吠野雲を隔つ。
忽ち巽軒子を思ひ、

靡寝して斯文を攻^{まな}ぶ
平生積善を共にし、
知己独り君を算ふるのみ。
志士艱苦に甘んじ、
濟世の勲を策せんと欲す。
鴻鵠天地に闊く、
終に燕群に混らず。

『同窓集』第壹編、第貳編

『同窓集』は、井上哲次郎編『同窓集』第壹編及び宮崎道三郎編『同窓集』第貳編の二冊が存在するとのことであり、その後は刊行されていないようである。

・井上哲次郎（巽軒、1856～1938）編『同窓集』第壹編（和装、出版地不明、出版社不明、明治15（1882）年5月7日刊）〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308>〉
（東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）所蔵。「寄贈者 瀬木博尚殿（一篇一冊）」⇒瀬木博尚：1852～1939、博報堂創業者）
〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%AC%E6%9C%A8%E5%8D%9A%E5%B0%9A>〉
（令和元年7月9日追加）

（下記は、同書収録の「宮崎津城」名義漢詩文。括弧内丁数は同書収録丁数を指す。）

- ・「梅花次巽軒詞兄韻」（三丁表）（初出不明）
- ・「桶峽作」（三丁表）（初出不明）
- ・「墨陀觀花」（三丁裏）（初出不明）
- ・「雨後過山寺有感」（四丁裏、五丁表）（初出不明）
- ・「偶成寄伯兄」（六丁表裏）（裏：但しここは信夫恕軒（1835～1910）の評語部分）（初出不明）
- ・「巽軒居士函嶺雜咏序」（七丁表裏、八丁表）（初出不明）
- ・「寄英国留学生和田垣子謙」（和田垣子謙：謙三？、1860～1919）（八丁表）（初出不明）
- ・「題画」（八丁表裏）（初出不明）
- ・「夜過古戰場」（八丁裏）（初出不明）
- ・「偶成」（八丁裏）（初出不明）
- ・（参考）元田石窓（肇、1858～1938）「題山居図」に宮崎津城の「評語」あり。（一丁裏）

・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）（令和元年 6 月 28 日一部修正）

〈 <http://wine.wul.waseda.ac.jp/search> ~
S12*jpn?/a{u5BAE}{u5D0E}{u3000}{u9053}{u4E09}{u90CE}/a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}/1%2C1%2C11%2CB/frameset&FF=a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}+1855+1928&1%2C%2C11〉

（下記は、同書収録の「宮崎津城」名義漢詩文。括弧内丁数は同書収録丁数を指す。）

- ・「同窓集第二編序」（序一丁表）（初出：同人社文学雑誌 83 号 8—9 頁 [1882/09/20]）
 - ・「懷古」（二丁表）（初出不明）
 - ・「夜游山寺」（二丁表）（初出不明）
 - ・「冬夜読書。寄井上巽軒」（二丁表裏）（初出不明。既載のように、斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」鳥海安治編『東西両京之大学』（明治 37 年 1 月 7 日刊）等に引用あり。）（令和元年 11 月 18 日一部修正）
 - ・寄敬字先生詩（四丁表）（初出：同人社文学雑誌 78 号 15—16 頁 [1882/06/10]。敬字：中村敬宇〈1832～1891〉）
 - ・夜座偶成（四丁裏）（初出：東洋学芸雑誌 14 号 363—364 頁 [1882/11/25]）
 - ・宿山寺題画壁（五丁表）（初出：東洋学芸雑誌 14 号 364 頁 [1882/11/25]）
- （参考）近代書誌・近代画像データベース 〈<http://base1.nijl.ac.jp/~kindai/>〉
『同窓集 第貳編』（令和 2 年 6 月 24 日追加）

〈 https://dbrec.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi?DEF_XSL=default&SUM_KIND=CsvSummary&SUM_NUMBER=20&META_KIND=NOFRAME&IS_DB=G0000203KDS&IS_KIND=CsvDetail&IS_SCH=CSV&IS_STYLE=default&IS_TYPE=csv&DB_ID=G0000203KDS&GRP_ID=G0000203&IS_START=1&IS_EXTSCH=&SUM_TYPE=normal&IS_REG_S1=none&IS_TAG_S1=Identifier&IS_KEY_S1=G0000203KDS:WASD-01074&IS_LGC_S2=AND&IS_CND_S1=ALL&IS_NUMBER=1&XPARA=&IS_DET_AILTYPE=&IMAGE_XML_TYPE=&IMAGE_VIEW_DIRECTION=〉

③宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試み—宮崎道三郎博士漢詩文一覧—
(令和元年7月22日新設、同7月25日、同2年2月16日、同3月12日、同5(2023)
年5月30日(従来の配置場所(4(3))からここに移した。)各一部修正)

(はじめに)

柏村哲博(1949～)「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号(平成7(1995)年12月22日刊)1～18頁中16頁は、「彼はまた、青年時より漢詩を善くし、「津城詩稿」なる漢詩集が残っていた(中田薫編『宮崎先生法制史論集』中に「寄敬宇(中村敬宇)先生詩」が収録されている)が、現在その所在はわからない。」という。

本節では、上記①、②を踏まえ、宮崎道三郎博士『津城詩稿』復元への一つの試みを模索することとする。なお、当該時期漢詩文集編纂の一つの参考として『奠南詩文集 奠南山田喜之助遺稿』(編集兼発行者:小林俊三(1888～1982、山田喜之助(1859～1913)女婿、元最高裁判事)、発行所:小林俊三法律事務所、昭和35(1960)年10月10日刊)参照。

『津城詩稿』復元案(宮崎道三郎博士漢詩文一覧)

〔目次〕

ア 明治??(18??)年～明治15(1882)年5月(初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの ⇒ 井上哲次郎編『同窓集』第壹編(明治15(1882)年5月7日刊)に所収のもの) ……65	
イ 明治15(1882)年5月(井上哲次郎編『同窓集』第壹編(明治15年5月7日刊)所収のもの) ……65	
ウ 明治15(1882)年5月～明治17(1884)年5月(『同窓集』第壹編(明治15年5月7日刊)刊行後公表のもの) ……66	
エ 明治??(18??)年～明治17(1884)年5月(『同窓集』第壹編(明治15年5月7日刊)刊行前又は刊行後の初出雑誌不明又は初出雑誌なきもので宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(明治17(1884)年5月刊)に収録のもの) ……66	
オ 明治17(1884)年5月(宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(明治17(1884)年5月刊)所収のもの) ……67	
カ 明治27(1894)年1月(法学新報34号(明治27(1894)年1月28日刊)に寄稿のもの) ……68	
キ 明治??(18??)年～昭和3(1928)年4月18日(逝去)(『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4(1929)年6月20日刊)所収なるも初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの) ……69	
ク 大正6(1917)年～昭和3(1928)年4月18日(逝去)(『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4(1929)年6月20日刊)所収なるも初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの) ……69	

ケ 昭和 4 (1929) 年 6 月 20 日 (中田薫編『宮崎先生法制史論集』岩波書店、昭和 4 (1929) 年 6 月 20 日刊) に「津城詩稿」よりとして所収のもの) ……………69

ア 明治?? (18??) 年～明治 15 (1882) 年 5 月 (初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの ⇒ 井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) に所収のもの)

- ・「梅花次巽軒詞兄韻」 ⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (三丁表) 収録
- ・「桶峽作」 ⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (三丁表) 収録
- ・「墨陀観花」 ⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (三丁裏) 収録
- ・「雨後過山寺有感」 ⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (四丁裏、五丁表) 収録
- ・「偶成寄伯兄」 ⇒井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (六丁表裏) 収録 (裏: 但しここは信夫怨軒 (1835～1910) の評語部分) + 『批評法律名家纂論 附 明法家列伝』(法学士渋谷慥爾校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治 20 年 6 月 (日付なし) 刊) に再録 (266—269 頁)
- ・「巽軒居士函嶺雜咏序」井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (七丁表裏、八丁表) 収録
- ・「寄英国留学生和田垣子謙」(和田垣子謙: 謙三?、1860～1919) 井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (八丁表) 収録
- ・「題画」井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (八丁表裏) 収録
- ・「夜過古戰場」井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (八丁裏) 収録
- ・「偶成」井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 (1882) 年 5 月 7 日刊) (八丁裏) 収録

イ 明治 15 (1882) 年 5 月 (井上哲次郎編『同窓集』第壹編 (明治 15 年 5 月 7 日刊) 所収のもの)

- ・井上哲次郎 (巽軒、1856～1938) 編『同窓集』第壹編 (和装、出版地不明、出版社不明、明治 15 年 5 月 7 日刊) <<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308>>
(東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター (明治新聞雑誌文庫) 所蔵。「寄贈者 瀬木博尚殿 (一篇一冊)」 ⇒瀬木博尚: 1852～1939、博報堂創業者)
<<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%AC%E6%9C%A8%E5%8D%9A%E5%B0%9A>>
(下記は、同書収録の「宮崎津城」名義漢詩文。括弧内丁数は同書収録丁数を指す。)

- ・「梅花次巽軒詞兄韻」(三丁表)(初出不明)
- ・「桶峽作」(三丁表)(初出不明)
- ・「墨陀觀花」(三丁裏)(初出不明)
- ・「雨後過山寺有感」(四丁裏、五丁表)(初出不明)
- ・「偶成寄伯兄」(六丁表裏)(裏:但しここは信夫怨軒(1835~1910)の評語部分)(初出不明)+批評法律名家纂論 附 明法家列伝(法学士渋谷慥爾校閱・前川普左二郎編述、九春堂、明治20年6月(日付なし)刊)266—269頁
- ・「巽軒居士函嶺雜咏序」(七丁表裏、八丁表)(初出不明)
- ・「寄英国留学生和田垣子謙」(和田垣子謙:謙三?、1860~1919)(八丁表)(初出不明)
- ・「題画」(八丁表裏)(初出不明)
- ・「夜過古戰場」(八丁裏)(初出不明)
- ・「偶成」(八丁裏)(初出不明)
- ・(参考)元田石窓(肇、1858~1938)「題山居図」に宮崎津城の「評語」あり。(一丁裏)

ウ 明治15(1882)年5月~明治17(1884)年5月(『同窓集』第壹編(明治15年5月7日刊)刊行後公表のもの)

- ・寄敬宇先生詩(初出:同人社文学雑誌78号15—16頁[1882/06/10]。敬宇:中村敬宇(1832~1891))
- ・「同窓集第二編序」(初出:同人社文学雑誌83号8—9頁[1882/09/20])
- ・夜座偶成(初出:東洋学芸雑誌14号363—364頁[1882/11/25])
- ・宿山寺題画壁(初出:東洋学芸雑誌14号364頁[1882/11/25])
- ・巽軒詩鈔序 東洋学芸雑誌28号265—266頁[1884/01/25](巽軒:井上哲次郎:1856~1944)

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/show.php?title=toyogakuge&issue=28&num=30&size=50&page=29>〉

- ・巽軒詩鈔序 『巽軒詩鈔』(阪上半七、明治17(1884)年2月8日出版届、上・下)
 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991935>〉
 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991936>〉

エ 明治??(18??)年~明治17(1884)年5月(『同窓集』第壹編(明治15年5月7日刊)刊行前又は刊行後の初出雑誌不明又は初出雑誌なきもので宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(明治17(1884)年5月刊)に収録のもの)

- ・「懷古」宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(和装、出版地不明、出版社不明、明治17(1884)年5月刊)(二丁表)に収録
- ・「夜游山寺」宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(和装、出版地不明、出版社不明、明治17(1884)年5月刊)(二丁表)に収録+『批評法律名家纂論 附 明法家列伝』(法学士渋谷慥爾校閱・前川普左二郎編述、九春堂、明治20年6月(日付なし)刊)266—269頁に再

録

・「冬夜読書。寄井上巽軒」宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治17（1884）年5月刊）（二丁表裏）に収録 ⇒ 柏村哲博（1949～）「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号（平成7年12月22日刊）16～18頁に掲載のもの（宮崎博士が井上巽軒博士に送ったものとの由。但し、同稿では、作成年月日、出所等不明、書下し文は同稿に記載されているもの。）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4428443>〉

⇒『日本大学百年史』第1巻（日本大学、平成9年3月31日刊）65～66頁に掲載（令和2年3月12日追加）

⇒その後、長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第10号（平成19年10月刊）1～31頁（同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成21年10月刊）附録1255頁以下に言及あり。）

オ 明治17（1884）年5月（宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（明治17（1884）年5月刊）所収のもの）

・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治17（1884）年5月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）

〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/search> ~
S12*jpn?/a{u5BAE}{u5D0E}{u3000}{u9053}{u4E09}{u90CE}/a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}/1%2C1%2C11%2CB/frameset&FF=a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}+1855+1928&1%2C%2C11〉

（下記は、同書収録の「宮崎津城」名義漢詩文。括弧内丁数は同書収録丁数を指す。）

・「同窓集第二編序」（序一丁表）（初出：同人社文学雑誌83号8—9頁 [1882/09/20]）
・「懐古」（二丁表）（初出不明）
・「夜游山寺」（二丁表）（初出不明） + 『批評法律名家纂論 附 明法家列伝』（法学士渋谷慥爾校閲・前川普左二郎編述、九春堂、明治20年6月（日付なし）刊）266—269頁に再録

・「冬夜読書。寄井上巽軒」（二丁表裏）（初出不明）
⇒ 柏村哲博（1949～）「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号（平成7年12月22日刊）16～18頁に掲載のもの（宮崎博士が井上巽軒博士に送ったものとの由。但し、同稿では、作成年月日、出所等不明、書下し文は同稿に記載されているもの。）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4428443>〉

⇒『日本大学百年史』第1巻（日本大学、平成9年3月31日刊）65～66頁に掲載（令和2年3月12日追加）

⇒その後、長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第10号（平成19年10月刊）1～31頁（同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成21年10月刊）附録1255頁以下に言及あり。）

・寄敬字先生詩（四丁表）（初出：同人社文学雑誌78号15—16頁 [1882/06/10]。敬字：中

村敬字 (1832~1891))

- ・夜座偶成 (四丁裏) (初出: 東洋学芸雑誌 14 号 363—364 頁 [1882/11/25])
- ・宿山寺題画壁 (五丁表) (初出: 東洋学芸雑誌 14 号 364 頁 [1882/11/25])

(参考) 近代書誌・近代画像データベース <<http://base1.nijl.ac.jp/~kindai/>>

『同窓集 第弐編』(令和 2 年 6 月 24 日追加)

<https://dbrec.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi?DEF_XSL=default&SUM_KIND=CsvSummary&SUM_NUMBER=20&META_KIND=NOFRAME&IS_DB=G0000203KDS&IS_KIND=CsvDetail&IS_SCH=CSV&IS_STYLE=default&IS_TYPE=csv&DB_ID=G0000203KDS&GRP_ID=G0000203&IS_START=1&IS_EXTSCH=&SUM_TYPE=normal&IS_REG_S1=none&IS_TAG_S1=Identifier&IS_KEY_S1=G0000203KDS:WASD-01074&IS_LGC_S2=AND&IS_CND_S1=ALL&IS_NUMBER=1&XPARA=&IS_DETALLTYPE=&IMAGE_XML_TYPE=&IMAGE_VIEW_DIRECTION=>

カ 明治27 (1894) 年1月 (法学新報34号 (明治27 (1894) 年1月28日刊) に寄稿のもの)

- ・詩二首 (津城 宮崎道三郎、奠南 山田喜之助連名 (宮崎博士: 「寄奠南山田君 津城 宮崎道三郎」、山田氏「次前韻却呈津城兄 奠南 山田喜之助」、宮崎博士「寄奠南山田君 津城」、山田氏「次前韻却呈宮崎兄 奠南」)) 法学新報 34 号 64—66 頁 [1894/1/28]

中田博士によれば宮崎博士は奠南山田喜之助氏とも「酬和する所あり。」とのことであるが、これもその一つか。宮崎博士が山田氏に二回にわたり「寄奠南山田君 津城 宮崎道三郎」として漢詩を寄せ、それに山田氏が「同じ韻字を用いた漢詩」で「次前韻却呈津城兄 奠南 山田喜之助」(「前韻に次 (じ) し却 (しりぞ) いて津城兄に呈す 奠南 山田喜之助」とする) として答えているものである。山田氏の関係していた東京法学院 (中央大学の前身) 関係の『法学新報』第 34 号 (明治 27 年 1 月刊)「漫録」に掲載されたものであるが、各詩及び全体につき同校出身の高名な弁護士稚翠花井卓蔵博士 (山田氏高弟、1868~1931) の評語が付されている。(⇒書下し文末作成)

(山田喜之助: 奠南 (てんなん)、1859~1913、東京法学院創設に尽瘁。法学新報は明治 24 (1891) 年 4 月 25 日創刊。山田喜之助については、

- ・七戸克彦 (1959~)「山田喜之助・正三・作之助・弘之助—神戸学院大学・山田作之助関係資料に寄せて—」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号 (平成 28 (2016) 年 10 月刊) 87~185 頁

- ・辻村亮彦「弁護士・最高裁判事 山田作之助——その生涯」『神戸学院法学』第 46 巻第 2 号 (平成 28 (2016) 年 10 月刊) 27~89 頁

等参照。) (平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 5 月 25 日、5 月 31 日、同 2 年 2 月 16 日、同 5 年 2 月 26 日、4 月 2 日各一部修正)

<<http://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-03.pdf>>

<<https://www.law-kobegakuin.jp/wp/wp-content/uploads/2018/03/46-2-02.pdf>>

- ・『奠南詩文集 奠南山田喜之助遺稿』(編集兼発行者: 小林俊三 (1888~1982、山田喜之

助女婿、元最高裁判事)、発行所: 小林俊三法律事務所、昭和 35 (1960) 年 10 月 10 日刊
(ヤフオク令和 5 (2023) 年 3 月 29 日購入) には、宮崎道三郎博士関連として、下記が収録されている。

(17~20 頁所載) 「14 次宮崎律城 (〈ママ〉、津城) 所贈詩韻 却呈二首」(宮崎律城 (〈ママ〉、津城) 贈る所の詩の韻に次 (じ) し却 (しりぞ) いて二首を呈す) (上記法学新報 34 号 64—66 頁 [1894/1/28] 所載のもの) の再録、ただし、花井卓蔵博士の評語は未掲載)

(29~31 頁所載) 「20 寄宮崎律城 (〈ママ〉、津城) 在于朝鮮」(宮崎律城 (〈ママ〉、津城) 朝鮮に在るに寄す) (初出不明)

本件については、高橋均先生に改めて御示教を賜った。厚く御礼申し上げます。

(令和 5 (2023) 年 4 月 2 日追加)

・小林俊三 (1888~1982) 『私の会った明治の名法曹物語』(日本評論社、昭和 48 (1973) 年 10 月 31 日刊。40~60 頁に「山田喜之助 (奠南)」あり。)

(令和 5 (2023) 年 4 月 20 日追加)

キ 明治?? (18??) 年~昭和3 (1928) 年4月18日 (逝去) (『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) 所収なるも初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの)

・「暮江」(中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) に収録)

・「還家有感」(中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) に収録)

ク 大正6 (1917) 年~昭和3 (1928) 年4月18日 (逝去) (『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) 所収なるも初出雑誌不明又は初出雑誌なきもの)

・「大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山荘。五言律二十首 録三」(中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) に収録)

・「末松子爵受帝国学士院囑。・・・于時大正六年七月也。」(中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) に収録)

ケ 昭和4 (1929) 年6月20日 (中田薫編『宮崎先生法制史論集』岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) に「津城詩稿」よりとして所収のもの)

・中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和4 (1929) 年6月20日刊) 巻頭その他に、「津城詩稿」よりとして下記六稿(津城詩稿①~⑥)が収録掲載されている

・津城詩稿①「寄敬宇先生詩」(初出: 同人社文学雑誌 78 号 15—16 頁 [1882/06/10]。敬宇: 中村敬宇 (1832~1891) ⇒宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(和装、出版地不明、出版社不明、明治 17 (1884) 年 5 月刊) に再録)

・津城詩稿②(「夜坐偶成」)(初出: 東洋学芸雑誌 14 号 363—364 頁 [1882/11/25] ⇒宮崎道三郎編『同窓集』第貳編(和装、出版地不明、出版社不明、明治 17 (1884) 年 5 月

刊) に再録)

- ・津城詩稿③ (「大正七年冬。再遊末松貴爵壽福山莊。五言律二十首 録三」) (初出不明)
- ・津城詩稿④ (「末松子爵受帝国学士院囑。・ ・ ・ 于時大正六年七月也。」) (初出不明)
- ・津城詩稿⑤ (「暮江」) (初出不明)
- ・津城詩稿⑥ (「還家有感」) (初出不明)

3 試験問題（調査中）（平成 31（2019）年 4 月 21 日新設）

（帝国大学法科大学、東京帝国大学法科大学及び同法学部）

（凡 例）

- ・『国家学会雑誌』掲載分をベースにして作成した。『法学協会雑誌』にも一部掲載されていると仄聞するが、調査中である。
- ・『国家学会雑誌』第 1 号（明治 20（1887）年 3 月 15 日刊）～第 19 巻第 7 号（通号第 221 号、明治 38 年 7 月 1 日刊）には、試験問題の掲載なし。

（参 考）

- ・『国家学会雑誌』：最初は通号表示、明治 36 年 1 月 1 日刊の通号第 191 号より巻数（第 17 巻）表示を開始するが、号数は第 18 巻通号第 214 号（明治 37 年 12 月 1 日刊）までは通号表示、第 19 巻第 1 号（通号第 215 号、明治 38 年 1 月 1 日刊）より巻号数表示。
- ・『国家学会雑誌』第 33 号（明治 22 年 11 月 15 日刊）附録に「国家学会名誉職員及会員一覧表」あり。当時の宮崎博士住居は「四ツ谷区北伊賀町十三番地」（11 頁上段）とある。
- ・『国家学会雑誌』第 17 巻第 200 号（明治 36 年 10 月 20 日刊）に「二百号記念」として、「国家学会沿革ノ概要」（1）～（6）頁、「国家学会雑誌自第一号至第百九十九号索引総目録」（1）～（31）頁あり。
- ・『東西大学 法律 政治 経済科目試験問題』（進化堂書店、明治 43 年 9 月 5 日刊）（以下「A」と略称。）、『東西大学 法律 政治 経済科目試験問題』（文進社、大正 5 年 12 月 20 日改訂四版刊）（以下「B」と略称。）、『東西大学 法律 政治 経済科目試験問題』（文進社、大正 6 年 9 月 30 日改訂五版刊）（以下「C」と略称。）及び『高等文官、外交官、判検事、弁護士、各官私立大学試験問題集』（三書楼（巖松堂書店の別会社か?）、明治 42 年 8 月 25 日刊）（以下「D」と略称。）及び『四十二年度試験問題集』（三書楼（巖松堂書店の別会社か?）、明治 43 年 3 月 20 日刊）（以下「E」と略称。）を適宜参照した。但し、法制史関係は明治 38～45（1905～1912）年分しか掲載されていない。

「A」〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/814340>〉

「B」〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/955547>〉

「C」〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/955548>〉

「D」〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/786382>〉

「E」〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/786391>〉

- ・試験問題は法律学科と政治学科のものがあるが、宮崎博士「法制史」は両者同一問題である。「回」は学年試験の回数を指し、法制史は毎年度「第二回」試験である。

（参考）穂積重遠（1883～1951）『大学生生活四十年』（国民講座第 494 輯抜刷。（財）社会教育協会、昭和 18 年 11 月刊）4 頁：「僕が法科大学（大正八年から法学部になる）に在学したのは、明治三十七 [1904] 年九月から四十一 [1908] 年七月までであつた。当時は

四年制度で試験が四回あるので「第何回受験生」といひ、最後に重要科目について口述の卒業試験があつた。」(令和元年5月10日「(参考)」部分追加)

・宮崎博士は大正11(1922)年3月に東京帝国大学教授を退官しているが、石井良助(1907～1993)「日本法制史研究の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』(東京帝国大学、昭和17年4月13日刊)284～285頁、同氏校訂『中田薫述 日本法制史講義』(創文社、昭和58年10月15日刊)「あとがき」421頁その他によれば、同博士の東大における日本法制史の最終講義は大正9(1920)年度とのこと(大正10年度は中田薫博士が担当)である。(平成31年4月29日追加、令和元年5月20日一部訂正)

・伊能秀明氏(1953～)前掲『法制史料研究 3』(巖南堂書店、平成14(2002)年8月25日刊)中「第一章「日本法制史」概説書 細目次総覧—クロニクル日本法制史学 明治～大正期—」16、44～45頁掲載の「7 宮崎道三郎述『日本法制史』(大正三・一九一四年九月、文信社、非売品)」目次中には「(附録)法制史試験問題概略」(45頁)とあるが、佐藤雄基准教授「立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫とその内覧会—歴史家の蔵書から見る史学史」『立教大学日本学研究所年報』第17号(平成30(2018)年7月刊)62頁によれば、「本文にみえず」とのことである。(令和元年9月10日追加)

*明治38(1905)年

・『国家学会雑誌』第19巻第8号(通号第222号、明治38年8月1日刊)148～154頁「法科大学学年試験問題」(美濃部[達吉]報)(同年5月及び6月に実施)
(149～150頁)

第二回試験

法制史(宮崎教授)法律科、政治科(選択)

- 1、古代ニ於ケル族制ト兵制トノ關係如何
- 2、出挙ノ制度如何
- 3、令ノ規定セル土地制度如何(A「法制史」1頁では「令ニ規定セル土地ノ制度如何」とある。)

・『国家学会雑誌』第19巻第10号(通号第224号、明治38年10月1日刊)126～130頁「法科大学追試験問題」(同年9月に実施)
(127頁)

第二回試験

法制史(宮崎教授)

- 1、孝徳帝時代ニ於ケル税制如何
- 2、令ニ規定セル階級制度如何
- 3、律令格式ノ區別如何

*明治39(1906)年

・『国家学会雑誌』第20巻第7号(通号第233号、明治39年7月1日刊)133頁「法科大学学年試験問題」
(134頁)

第二回試験

法制史（宮崎教授）

1 天津罪国津罪トハ何ソ

2 格ノ性質如何

3 離婚ニ関スル令ノ規定如何

・『国家学会雑誌』第 20 卷第 10 号（明治 39 年 10 月 1 日刊）「法科大学追試験問題」（同年 9 月に実施）

掲載なし。

（A「法制史」1～2 頁では次のとおり。）

●法制史 ○39 年（法律科政治科）

1 天津罪、国津罪トハ何ソ（二回、法、政）

2 格ノ性質如何（同上）

3 離婚ニ関スル令ノ規定如何（同上）

[4～7 は追試験問題か?]

4 「カバネ」（姓）ノ名義ニ関スル諸説如何（同上）

5 天ッ罪国ッ罪トハ何ソヤ（同上）

6 売買ニ関スル令ノ規定如何（同上）

7 賤民ニ関スル令ノ規定如何（同上）

*明治 40（1907）年

・『国家学会雑誌』第 21 卷第 7 号（明治 40 年 7 月 1 日刊）104 頁「法科大学試験問題」（124 頁）

第二回試験

1 律令格式ノ差別如何

2 令ノ実施ノ困難ナリシ事情如何

3 「ミコトノリ」トイフ言葉ノ本義如何

（A「法制史」2 頁では次のとおり。）

●法制史 ○40 年度（法律科政治科）

1 律令格式差別如何（二回、法、政）

2 令ノ実施ノ困難ナリシ事情如何（同上）

3 「ミコトノリ」トイフ言葉ノ本義如何（同上）

*明治 41（1908）年

・『国家学会雑誌』第 22 卷第 7 号（通号第 257 号、明治 41 年 7 月 1 日刊）122 頁「東京法科大学学年試験問題」

（122 頁）

第二回試験

1 アガタ（縣）トイフ名称ノ意義ニ関スル諸説如何

2 賤民ニ関スル令ノ制度如何（同上）

3 訴訟手続ニ関スル令ノ規定如何 (同上)

・『国家学会雑誌』第 22 卷第 10 号 (明治 41 年 10 月 1 日刊) 「法科大学追試験問題」 (明治 41 年 9 月施行)

(274 頁)

1 「くがたち」トハ何ソヤ

5 「いらし」トハ何ソヤ

6 令ニ規定セル土地ノ制度如何

7 国造ト稲置トノ関係如何

(A「法制史」2 頁では次のとおり。)

●法制史 ○41 年 (法律科政治科)

1 アガタ (縣) トイフ名称ノ意義ニ関スル諸説如何 (二回、法、政)

2 賤民ニ関スル令ノ制度如何 (同上)

3 訴訟手続ニ関スル令ノ規定如何 (同上)

4 「クガタチ」トハ何ソヤ (同上)

5 「イラシ」トハ何ソヤ (同上)

6 令ニ規定セル土地ノ制度如何 (同上)

7 国造ト稲置トノ関係如何 (同上)

*明治 42 (1909) 年

・『国家学会雑誌』第 23 卷第 7 号 (明治 42 年 7 月 1 日刊) 「学年試験問題」

(130 頁)

第二回試験

1 カバネ (姓) トハ何ソヤ

2 出挙ノ制度如何

3 養子ニ関スル令ノ規定如何

・『国家学会雑誌』第 23 卷第 10 号 (明治 42 年 10 月 1 日刊) 「学年追試験問題」

(133 頁)

1 出挙ノ制度如何

2 格ト律令トノ関係如何

3 離婚ニ関スル令ノ規定如何

(A「法制史」3 頁では次のとおり。なお、E「法制史」12、29 頁では 42 年 6 月実施、「追」とは 42 年 9 月実施の追試験問題とのこと。)

●法制史 ○42 年度 (法律科政治科)

1 カバネ (姓) トハ何ソヤ (二回、法、政) [回: 学年試験の回数]

2 出挙ノ制度如何 (同上)

3 養子ニ関スル令ノ規定如何 (同上)

4 出挙ノ制度如何 (追、同上)

5 格ト律令トノ関係如何 (同上)

6 離婚ニ関スル令ノ規定如何 (同上)

***明治 43 (1910) 年**

・『国家学会雑誌』第 24 卷第 10 号 (明治 42 年 10 月 1 日刊) 154 頁「学年試験及追試験問題」

(154 頁)

六月施行学年試験

- 1 律令格式トハ何ゾ
- 2 出挙トハ何ゾヤ
- 3 奇曲〈ママ〉トハ何ゾヤ

(161 頁)

九月施行追試験

- 1 氏ト姓トノ差別如何
- 2 令ニ於ケル土地ノ制度如何
- 3 売買ニ関スル令ノ規定如何

(A「法制史」4 頁では次のとおり。)

- 法制史 ○43 年度 (法律科政治科)

 - 1 律令格式トハ何ソ (法、政)
 - 2 出挙トハ何ソ (同上)
 - 3 奇曲〈ママ〉トハ何ソ (同上)

***明治 44 (1911) 年**

・『国家学会雑誌』第 25 卷第 8 号 (明治 44 年 8 月 1 日刊) 「法科大学試験問題」 (132 頁)

二回試験

- 1 くがたち (盟神探湯) トハ何ゾヤ
- 2 令ニ於ケル土地ノ制度如何
- 3 検非違使ノ制度上ニ及シタル影響如何

・「追試験問題」は未掲載。

(B78 頁では次のとおり。)

- 法制史 ○44 年度 (法律科政治科)

 - 1 くがたち (盟神探湯) トハ何ソヤ (二回、法、政)
 - 2 令ニ於ケル土地ノ制度如何 (同上)
 - 3 検非違使ノ制度上ニ及シタル影響如何 (同上)

***明治 45/大正元 (1912) 年** (大正元年: 7 月 30 日～12 月 31 日)

・『国家学会雑誌』第 26 卷には未掲載。

(B78 頁では次のとおり。)

- 法制史 ○45 年 (法律科政治科)

 - 1 屯倉トハ如何ナルモノヲ云フカ (二回、法、政)

2 「ツミ」トイフ言葉ノ原義ニ関スル本居氏ノ説如何（同上）

3 家人トハ如何ナルモノヲ云フカ（同上）

***大正 2 (1913) 年～大正 9 (1920) 年**

・『国家学会雑誌』には未掲載。

（参考）大正元（1912）年：『国家学会雑誌』第 26 卷、大正 2（1913）年：同 27 卷、大正 3（1914）年：同第 28 卷、大正 4（1915）年：同第 29 卷、大正 5（1916）年：同第 30 卷、大正 6（1917）年：同第 31 卷、大正 7（1918）年：同第 32 卷、大正 8（1919）年：同第 33 卷、大正 9（1920）年：同第 34 卷、大正 10（1921）年：同第 35 卷、大正 11（1922）年：同第 36 卷。その後「A」～「E」の類のものが刊行されたていたのかは不明。

4 その他

(1) 井上哲次郎（巽軒）博士との関係（令和元年5月2日新設）

*宮崎道三郎博士と井上哲次郎博士（巽軒、1856～1944）との関係は極めて興味深い。以下はその関係文献の一端である。（要検討）

〈 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%95%E4%B8%8A%E5%93%B2%E6%AC%A1%E9%83%8E>〉（井上哲次郎）

① 漢詩文関連

・中田薫（1877～1967）「宮崎道三郎先生小伝」中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和4年6月20日刊）3頁（「先生壮年より漢詩を善くし、往時山田奠南（喜之助）井上巽軒（哲次郎）元田石窓（肇）の諸氏と酬和する所あり。詩稿一卷其家に蔵す。」

（山田奠南（喜之助）：1859～1913、井上巽軒（哲次郎）：1856～1944、元田石窓（肇）：1858～1938）

⇒例えば、井上哲次郎編『同窓集』第壹編（和装、出版地不明、出版社不明明治15年5月7日刊）及び宮崎道三郎編『同窓集』第二編（和装、出版地不明、出版社不明、明治17（1884）年5月刊）所収漢詩文のことを指すのか。（令和元年7月9日追加）

・『同窓集』第一編、第貳編の件（令和元年6月28日追加）

・井上哲次郎編『同窓集』第一編（明治15（1882）年5月刊）ありとの由。⇒当然「宮崎津城」名義の漢詩文が収載されている可能性がある。要検討。

（東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）所蔵）〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308>〉（令和元年6月28日追加）

⇒（下記：令和元年7月9日追加）

・その後、井上哲次郎（巽軒、1856～1938）編『同窓集』第壹編（和装、出版地不明、出版社不明、明治15年5月7日刊）〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308>〉（東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）所蔵。「寄贈者瀬木博尚殿（一篇一冊）」⇒瀬木博尚：1852～1939、博報堂創業者）

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%AC%E6%9C%A8%E5%8D%9A%E5%B0%9A>〉に、「宮崎津城」名義の下記漢詩文が存在することを確認す。このうち、特に「巽軒居士函嶺雜咏序」（七丁表裏、八丁表）は、宮崎博士と井上博士の若き日の交際状況を認めたものであり貴重か。（括弧内丁数は同書収録丁数を指す。）。

・「梅花次巽軒詞兄韻」（三丁表）

・「桶峽作」（三丁表）

・「墨陀觀花」（三丁裏）

・「雨後過山寺有感」（四丁裏、五丁表）

・「偶成寄伯兄」（六丁表裏）（裏：但しここは信夫恕軒〈1835～1910〉の評語部分）

・「巽軒居士函嶺雜咏序」（七丁表裏、八丁表）

- ・「寄英国留学生和田垣子謙」（和田垣子謙：謙三？、1860～1919）（八丁表）
- ・「題画」（八丁表裏）
- ・「夜過古戰場」（八丁裏）
- ・「偶成」（八丁裏）
- ・（参考）元田石窓（肇、1858～1938）「題山居図」に宮崎津城の「評語」あり。（一丁裏）
 - ・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）（令和元年 6 月 28 日一部修正）

〈 <http://wine.wul.waseda.ac.jp/search> ～
S12*jpn?/a{u5BAE}{u5D0E}{u3000}{u9053}{u4E09}{u90CE}/a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}/1%2C1%2C11%2CB/frameset&FF=a{7F5BAE}{213c21}+{215c36}{213024}{215c67}+1855+1928&1%2C%2C11〉

・（同書序一丁表）宮崎道三郎「同窓集第二編序」（初出：同人社文学雑誌 83 号 8—9 頁 [1882/09/20]）（平成 31 年 4 月 30 日追加、令和元年 6 月 28 日一部修正）

・（同書二丁表裏）「冬夜読書。寄井上巽軒」

宮崎道三郎「冬夜読書」を初めて知ったのは、斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」鳥海安治編『東西両京之大学』（明治 37 年 1 月 7 日刊）179～180 頁（斬馬劍禪「宮崎、土方対千賀」『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』（講談社学術文庫、昭和 63 年 11 月 10 日刊）202～203 頁再掲）で、宮崎博士が井上巽軒博士に送ったものとの由であった。本稿「3（5）漢詩文」に収録。但し、作成年月日、出所等不明、書下し文は柏村哲博「設立者総代 宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号（平成 7 年 12 月 22 日刊）16～18 頁に記載されている。（令和 2 年 4 月 18 日一部修正）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/4428443>〉

⇒『日本大学百年史』第 1 卷（日本大学、平成 9 年 3 月 31 日刊）65～66 頁にも掲載（ここにも「冬夜読書」の書下し文あり。）。（令和 2 年 4 月 18 日追加）

⇒その後、長尾龍一（1938～）「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第 10 号（平成 19 年 10 月刊）1～31 頁（同『法学に遊ぶ 新版』（慈学社、平成 21 年 10 月刊）附録 1 255 頁以下に再録。）末尾（（註 88）部分）に「冬夜読書」『同窓集』第貳編（1884 年）を引用していることの教示を受く。

〈<http://ouranos2.web.fc2.com/miyazakimitisaburou.html>〉

（令和元年 7 月 9 日追加）

⇒当該「冬夜読書」は宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（和装、出版地不明、出版社不明、明治 17（1884）年 5 月刊）〈<http://wine.wul.waseda.ac.jp/>〉（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫。）中に「冬夜読書。寄井上巽軒」（二丁表裏）として収録されているものと確認する。但し、更にその初出があるかは現時点では不明。（この分：令和元年 6 月 28 日追加、同 7 月 9 日一部修正）

・宮崎道三郎「巽軒詩鈔序」『巽軒詩鈔』（阪上半七、明治 17（1884）年 2 月 8 日出版届、上・下）⇒東洋学芸雑誌 28 号 265—266 頁 [1884/01/25]（井上哲次郎：1856～1944）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991935>〉、〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/991936>〉

〈<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjalddl/show.php?title=toyogakuge&issue=28&num=30&size=50&page=29>〉

⇒本『巽軒詩鈔』には井上が「偶成次宮崎津城之韻」と題してつくった漢詩が掲載されている（前掲『日本大学百年史』第1巻65頁参照。）。（令和2年4月18日追加）

② 井上哲次郎（巽軒）博士回想録、ドイツ留学時代関連

・井上哲次郎『懐旧録』（春秋社、松柏館、昭和18年8月20日刊。シリーズ日本の宗教学②『井上哲次郎集』第8巻（懐旧録、井上哲次郎自伝）（クレス出版、平成15年3月25日刊）に再録。）

（参考）：明治15（1882）年設置の東京大学編輯所につき163～165頁、下記『井上哲次郎自伝』9～11頁、石井良助前掲「日本法制史研究の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』（東京帝国大学、昭和17年4月13日刊）281頁、290頁（註（7））、三宅雪嶺（1860～1945）『大学今昔譚』（我観社、昭和21年11月10日刊。復刻本：『日本教育史学基本文献・史料叢書8 大学今昔譚』（大空社、平成3年4月23日刊。解説：中野実（1951～2002））131～137頁等参照。）（令和元年5月25日、同6月24日一部補正）

・174頁 「元田〔肇〕と同級生であつた宮崎道三郎といふ人は既に故人になつたけれども、あの人も自分などの親しい友人であつた。」

・301頁「それからはこのハイデルベルヒに滞在中に留学に見えた人には法学士宮崎道三郎氏などがあつた。」

・井上哲次郎『井上哲次郎自伝』（富山房、昭和48年12月2日刊。シリーズ日本の宗教学②『井上哲次郎集』第8巻（懐旧録、井上哲次郎自伝）（クレス出版、平成15年3月25日刊）に再録。）

・15頁「・・・ハイデルベルヒに赴き、ミルレルと言ふ人の家に滞在することになった。ミルレルは、ギムナージウムの先生で、そして外国人を止宿せしめて世話をしてみた。何んでも郷誠之助氏〔1865～1942〕もここに来たやうに思ふ。少し遅れて法学博士宮崎道三郎氏もここに同居した。」

・福井純子「資料 井上哲次郎日記一 一八八四・九〇 『懐中雑記』第一冊『東京大学史紀要』第11号（平成5年3月刊）25～63頁（宮崎博士関係：なし）（1884年：明治17年、1890年：明治23年）〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005411.pdf>〉

・福井純子「資料 井上哲次郎日記一 一八八四・九〇 『懐中雑記』第二冊『東京大学史紀要』第12号（平成6年3月刊）1～35頁（宮崎博士関係：なし）（解題：「『懐中雑記』一 井上哲次郎の留学一」（13～35頁）。宮崎博士関係：20、21頁）

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005416.pdf>〉

・宮崎誠・柏村哲博「宮崎道三郎のドイツ留学について」『日本大学史紀要』第5号（平成10年12月刊）151～172頁中154頁に両氏喧嘩の件が出ているが、『男爵郷誠之助君伝』（郷男爵記念会、昭和18年11月30日刊。郷誠之助：1865～1942）に拠るとの由なので、当該箇所を以下に引用しておく。）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1043410/60?tocOpened=1>〉

「(175～177 頁 (114～115 コマ)) (二) ハイデルベルヒとハルレ . . . 余り人を褒めない井上も最初宮崎を褒めてみたが、どういふ事情からか或日、井上と宮崎とが喧嘩し、それ以来二人は口もきかぬやうになつた。二人はその後間もなく相前後してハイデルベルヒからライプチッヒに移つて行つた。」

「(178 頁 (116 コマ)) こうしてハルレにゐる中に、ライプチッヒが近いので日曜日には屢々遊びに行つた。ライプチッヒには井上もみだし、宮崎もみだし、斯波 [淳六郎: 1861～1931] もみだ。井上と宮崎とはハイデルベルヒで喧嘩をして以来、未だ口をきかぬといふことであつたから、年こそ彼らより七つも九つも下であつたが、なんとかこの二人を和解させてやろうと色々骨を折つた事もあつた。森鷗外の日記に出てゐるのはこの頃の事であつたと思ふ。」

(参考 1) 上記『男爵郷誠之助君伝』196～202 頁 (125～128 コマ)「第三編 第三章 (三) 井上哲次郎博士語る」、202～205 頁 (128～129 コマ)「(註一) ドイツに於ける交友列伝」(宮崎博士分: 204 頁 (129 コマ)) 参照。(令和元年 5 月 18 日追加)

(参考 2) 後藤罔彦 (1891～1945) 校閲・野田礼史『人間・郷誠之助』(今日の問題社、昭和 14 年 5 月 18 日刊) 52、58 頁 (令和元年 6 月 9 日追加)

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1257181>〉

〈<https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/information/pdf/jitsugyouka/007gou.pdf#search=%27%E9%87%8E%E7%94%B0%E7%A4%BC%E5%8F%B2%27>〉

(参考 3) 小島直記 (1919～2008)『極道』(毎日新聞社、昭和 46 年 11 月刊) ⇒ (中公文庫版、昭和 57 年 3 月刊) ⇒『極道 小説・郷誠之助』上・下 (日経ビジネス文庫版、平成 24 年 5 月 1 日刊) (宮崎博士関係: 上 381、414 頁、下 66～70 頁) (令和元年 5 月 10 日追加)

(参考 4) 真田治子「井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言語表記」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』第 7 号 (平成 19 年 12 月 1 日刊) 1～13 頁 (7 頁、11 頁 (注 (7))、12 頁 (参考文献)) (令和元年 7 月 31 日追加)

〈https://saigaku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=849&item_no=1&page_id=13&block_id=21〉

(参考 5)『鷗外全集』第 35 卷 (岩波書店、昭和 50 年 1 月 22 日刊)「獨逸日記」90 頁 (明治 17 (1884) 年 11 月 12 日条、宮崎道三郎、井上哲次郎関係) (『獨逸日記 小倉日記』(森鷗外全集 13、ちくま文庫、平成 8 (1996) 年 7 月 24 日刊) 14、15 頁参照。) (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加)

③ 『巽軒日記』関連

・大間敏行「『巽軒日記』の一部翻刻・刊行に寄せて」『東京大学史史料室ニュース』第 48 号 (平成 24 (2012) 年 3 月 31 日刊) 4～5 頁 (令和元年 5 月 18 日追加)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005679.pdf>〉

・東京大学史史料室編『巽軒日記—自明治三三年至明治三九年』(東京大学史史料室、平成

24 (2012) 年 3 月刊) (同書は公刊物で、ネットでは読めず。) (宮崎博士関係: なし)

〈https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/03_14_j.html〉

〈<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I023556507-00>〉

・村上こずえ・谷本宗生「井上哲次郎『巽軒日記-明治二六～二九、四〇、四一年-』『東京大学史紀要』第 31 号 (平成 25 (2013) 年 3 月刊) 67～162 頁 (宮崎博士関係: なし)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005663.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料 井上哲次郎『巽軒日記-明治四二年-』『東京大学史紀要』第 32 号 (平成 26 (2014) 年 3 月刊) 63～88 頁 (宮崎博士関係: 53 頁)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400005668.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料 井上哲次郎『巽軒日記-明治四三年-』『東京大学史紀要』第 33 号 (平成 27 (2015) 年 3 月刊) 61～114 頁 (宮崎博士関係: なし)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400029557.pdf>〉

・村上こずえ・谷本宗生「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-明治四四年-』『東京大学史紀要』第 34 号 (平成 28 (2016) 年 3 月刊) 1 (88) ～25 (64) 頁 (宮崎博士関係: なし)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400040674.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-明治四五年・大正元年-』『東京大学史紀要』第 35 号 (平成 29 (2017) 年 3 月刊) 1 (110) ～55 (56) 頁 (宮崎博士関係: 7 (104)、39 (72) ×2、49 (62) 頁)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400061600.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正二年 上半期-』『東京大学史紀要』第 37 号 (平成 31 (2019) 年 3 月刊) 1 (108) ～27 (82) 頁 (宮崎博士関係: なし)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400113087.pdf>〉

・『東京大学史紀要』第 38 号 (令和 2 (2020) 年 3 月刊) には「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記』」は未掲載。(令和 5 (2023) 年 4 月 2 日追加)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400137317.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正二年 下半期-』『東京大学史紀要』第 39 号 (令和 3 (2021) 年 3 月刊) 1 (112) ～30 (83) 頁 (宮崎博士関係: なし) (令和 5 (2023) 年 4 月 2 日追加)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400157794.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正三年-』『東京大学史紀要』第 40 号 (令和 4 (2022) 年 3 月刊) 1 (108) ～55 (60) 頁 (宮崎博士関係: 下記 4 か所記載あり。ただし「宮崎道三郎」で検索のこと。) (令和 5 (2023) 年 4 月 2 日追加)

・大正 3 (1914) 年 4 月 24 日 宮崎道三郎来状 (18 (97) 頁上段)

・同年 4 月 25 日 宮崎道三郎妻訃報来+書状と菓物奩籠送付 (18 (97) 頁下段)

・同年 5 月 26 日 宮崎道三郎来状 (22 (93) 頁上段)

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400185096.pdf>〉

・村上こずえ・森本祥子「資料紹介 井上哲次郎『巽軒日記-大正四年 上半期-』『東京大学史紀要』第41号（令和5（2023）年3月刊）1（118）～38（81）頁（宮崎博士関係：下記1か所記載あり。ただし「宮崎道三郎」で検索のこと。）（令和5（2023）年7月18日追加）

・大正4（1915）年2月12日 宮崎道三郎来状（8（113）頁下段）

〈<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400211712.pdf>〉

（2）末松謙澄博士との関係（令和5（2023）年12月12日追加）

宮崎道三郎博士（1855～1928）と末松謙澄博士（1855～1920）との関係も、注目すべきものがある。上述のように、中田薫編『宮崎先生法制史論集』（岩波書店、昭和4（1929）年6月20日刊）〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/1>〉巻頭他に、「津城詩稿」として下記六稿（①～⑥）が掲載されている。このうち、末松謙澄博士関係の詩文二題③、④を以下に再掲する。書下し文については高橋均先生の御示教に拠る。厚く御礼申し上げます。

〔津城詩稿①「寄敬宇先生詩」（掲載箇所：「宮崎道三郎先生小伝」3頁裏）、津城詩稿②「夜坐偶成」（掲載箇所：「序言」5頁裏）、津城詩稿③「大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山荘。五言律二十首 録三」（掲載箇所：「凡例」1頁裏）、津城詩稿④「末松子爵受帝国学士院嘱。・・・」（掲載箇所：「目次」3頁裏）、津城詩稿⑤「暮江」（掲載箇所：「附録」700頁裏）、津城詩稿⑥「還家有感」（掲載箇所：最終753頁裏）〕

④ 末松子爵受帝国学士院嘱。・・・于時大正六年七月也。

末松子爵受帝国学士院嘱。訳解需帝欽定
羅馬法学提要。及禹氏法範駕氏羅馬法解
説三書。大正二年春起筆。前後実互五年
之久。洵可謂勉矣。余亦受同院嘱。得俱
尽微力。卒業之日賦此。于時大正六年七
月也。

潜心日夜独研磨。烏兔忽忽容易過。莫向鏡中窺
鬢髮。今朝霜雪更添多。

春日偶成

門外不来長者車。疎慵厭掃路三叉。貧居占得蕭
閒景。滿地青苔滿地花。

津城詩稿

末松子爵帝国学士院ノ嘱ヲ受ケ。需帝欽定羅馬法学提要。及ビ禹氏法範駕氏羅馬法解
説ノ三書ヲ訳解ス。大正二年春起筆シ。前後実ニ五年ノ久シキニワタル。

洵（マコト）ニ勉ムルト謂ベシ。余マタ同院ノ嘱ヲ受ケ。俱ニ微力ヲ尽クスヲエタリ。
業ヲ卒（オ）ウルノ日此ヲ賦ス。時ニ大正六年七月也。

潜心（センシン）日夜独り研磨。烏兔（ウト・日と月、歳月）忽忽容易ニ過グ。
鏡中ニ向カイ鬢髪ヲ窺ウナカレ。今朝霜雪更ニ多キヲ添ウ。

春日偶成（シュンジツグウセイ）

門外来ラズ長者ノ車。疎慵（ソヨウ・ものぐさな様子）掃クヲ厭ウ路三叉。
貧居占得ス蕭閒ノ景。満地ノ青苔 満地ノ花。

津城詩稿

（参考：「需帝欽定羅馬法学提要。及ビ禹氏法範駕氏羅馬法解説ノ三書」）

・需帝欽定羅馬法学提要：ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946829?contentNo=2>〉

・駕氏羅馬法解説：ガーイウス羅馬法解説

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946856>〉

・禹氏法範：ウルピアーヌス羅馬法範

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946854>〉

.....

③大正七年冬。再遊末松貴爵寿福山莊。五言律二十首 録三

〔末松貴爵 ⇒子爵末松謙澄。寿福山莊⇒鎌倉扇ガ谷に在った末松博士の別莊。二十首中残り十七首については不明。〕

暮投高館宿。松樹入雲堆。月仄寒雲動。風鳴急
霰来。論詩俱啜茗。評画且傾盃。清興何時尽。
曉鐘鄰寺催。

風流非我事。養氣試幽尋。日脚垂前浦。波光映
遠林。鳥啼如有意。雲宿豈無心。対坐清窓下。
茶烟傍竹深。

興来尋勝地。飄有似孤雲。笑語忘為客。朝昏喜
遇君。前山弦月上。遠浦夜潮聞。明日帰家去。
奈何塵事紛。

津城詩稿

大正七年冬。再（フタタ）ビ末松貴爵ノ寿福山莊ニ遊ブ。五言律二十首 録三

暮ニ投ズ高館ノ宿。松樹雲堆ニ入ル。

月仄（ホノカ）ニ寒雲（カンウン）動キ。風鳴リテ急霰（キュウサン）来タル。

詩ヲ論ジ俱ニ茗（メイ）ヲ啜（ス）リ。画ヲ評シ且（カツ）盃ヲ傾ク。

清興（セイキョウ）何レノ時カ尽キン。曉鐘（ギョウショウ）鄰寺ヨリ催サル。

風流ハ我事ニ非ズ。氣ヲ養ナイ幽尋（ユウジン・静かにあたりを尋ねる）ヲ試ミン。

日脚前浦ニ垂レ。波光遠林ニ映ル。

鳥啼キ意有ルガ如ク。雲宿リアニ無心ナラン。

対坐ス清窓ノ下。茶烟傍竹ニ深シ。

興来り勝地（シヨウチ）ヲ尋ネ。飄（ヒョウ）有リ孤雲ニ似タリ。
笑話ニ客タルヲ忘レ。朝昏（チヨウコン）君ニ遇ウヲ喜ブ。
前山ニ弦月上リ。遠浦（エンポ）ニ夜潮聞ユ。
明日家ニ帰り去ル。奈何（イカン）ゾ塵事ニ紛レン。

津城詩稿

上記「需帝欽定羅馬法学提要。及ビ禹氏法範駕氏羅馬法解説ノ三書」、すなわち、需帝欽定羅馬法学提要：ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要、駕氏羅馬法解説：ガーイウス羅馬法解説及び禹氏法範：ウルピアーヌス羅馬法範は、宮崎道三郎博士の校閲によるものであり、下記各書所載穂積陳重博士（1855～1926）「序」、末松博士各「緒言」はその助力に言及している。これら訳書の位置付けについて原田慶吉（1903～1950）「我が国に於ける外国法史学の発達」『東京帝国大学学術大鑑 法学部 経済学部』（東京帝国大学、昭和17（1942）年4月13日刊）294～307頁〈<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1141764>〉、「原田慶吉電子文庫」（和田徹氏「私立玉川用賀村中央図書館（新館）」所蔵）各参照。

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/harada.htm>〉

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/data/HARADA007.html>〉

なお、前掲「2（3）翻訳校訂」併照。

※『ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要』

・末松謙澄訳並註解『ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要』（穂積陳重「序」、「緒言」あり。帝国学士院、大正2（1913）年12月10日刊）

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562582-00>〉

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『訂正増補 ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要四版』（穂積陳重（1855～1926）「序」、「初版緒言の要領」、「第三版〈ママ〉緒言」、「第四版〈ママ〉緒言」あり。帝国学士院、大正13（1924）年7月17日刊）

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562583-00>〉

※『ガーイウス羅馬法解説』

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『ガーイウス羅馬法解説』（穂積陳重「序」、「緒言」あり。帝国学士院、大正4（1915）年2月12日刊）

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562602-00>〉

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『訂正増補 ガーイウス羅馬法解説 再版』（穂積陳重「序」、「初版緒言の要領」、「再版緒言」あり。帝国学士院、大正6（1917）年8月13日

訂正増補再版刊)

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000881329-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000881329-00)

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『訂正増補 ガーイウス羅馬法解説 参版』(穂積陳重「序」、「初版緒言の要領」、「再版緒言」あり。帝国学士院、大正 13 (1924) 年 7 月 15 日訂正増補三版〈ママ〉刊

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562603-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562603-00)

※『ウルピアーヌス羅馬法範』

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『ウルピアーヌス羅馬法範 竝十二表法全文其他附録』(穂積陳重「序」、同「後序」、「緒言」あり。帝国学士院、大正 4 (1915) 年 2 月 12 日刊)

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562600-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562600-00)

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『訂正増補 ウルピアーヌス羅馬法範 竝羅馬法総評、十二表法全文、新勅法二篇 再版』(穂積陳重「序」、同「後序」、「初版緒言要領」、「再版緒言」あり。帝国学士院、大正 6 (1917) 年 6 月 25 日訂正増補再版刊)

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000881121-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000881121-00)

・末松謙澄訳並註解、宮崎道三郎校閲『ウルピアーヌス羅馬法範 羅馬法総評、十二表其他附録 参版』(穂積陳重「序」、同「後序」、「初版緒言要領」、「再版緒言」あり。帝国学士院、大正 13 (1924) 年 7 月 17 日訂正増補参版刊)

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562601-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562601-00)

(参考)

(参考 1)

・末松謙澄『羅馬法難問十四題 羅馬法難問続稿十題』(奥付なし。大正 6 (1915) 年 9 月 7 日著者より寄贈の帝国図書館印あり。「羅馬法難問続稿十題」分に「大正 6 年 6 月」付の「緒言」あり。「羅馬法難問十四題」(1~126 頁)、「羅馬法難問続稿十題」(1~85 頁)書

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562604-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000562604-00)

(参考 2)

・穂積重遠(著者相続人、1883~1951)『穂積陳重遺文集』第三冊(岩波書店、昭和 9 (1934) 年 1 月 28 日刊)

穂積陳重(1855~1926)「末松謙澄子爵訳並註解ユスチニアース帝欽定羅馬法学提要序」(676~679 頁、353~354 齣)

[〈https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000780878-00〉](https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000780878-00)

・穂積重遠(著者相続人、1883~1951)『穂積陳重遺文集』第四冊(岩波書店、昭和 9 (1934)

年 9 月 25 日刊)

穂積陳重 (1855～1926) 「末松謙澄子爵訳並註解ガーイウス羅馬法解説序 末松謙澄子爵訳並註解ウルピアース羅馬法範序 末松謙澄子爵訳並註解ウルピアース羅馬法範後序」 (3～17 頁、21～27 齣)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000780879-00>〉

(参考 3)

- ・『日本学士院八十年史』(第 1、日本学士院、昭和 37 (1962) 年 3 月 21 日刊)
第二編 第二章 第四節 第六 藤田平太郎奨学費 (447～449 頁、246～247 齣)
第二編 第二章 第四節 第七 末松生子羅馬法研究奨励資金 (449～450 頁、247～248 齣)

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/3000064/1/1>〉

- ・『学問の山なみ一物故会員追悼集一第二』(日本学士院、昭和 55 (1980) 年 3 月 15 日刊)
萩野由之「末松謙澄会員」(81～82 頁、46～47 齣)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000002007166-00>〉

- ・菅原憲二 (1947～)・飯塚一幸 (1958～)・西山伸 (1963～)『田中秀央 近代西洋学の黎明一『憶い出の記』を中心に』(京都大学学術出版会、平成 17 (2005) 年 3 月 25 日刊。
田中秀央 (ひでなか) : 1886～1974) 中「末松謙澄」関係箇所 (前掲「2 (3) 翻訳校訂」参照。)

〈<https://www.kyoto-up.or.jp/books/9784876986507.html>〉

(3) 宮崎道三郎博士大学生時代明治 13 (1880) 年答案の件 (令和元 (2019) 年 5 月 31 日追加)

- ・瀧川政次郎 (1897～1992) 「明治以後に於ける法制史学の発達」『日本法制史研究』(有斐閣、昭和 16 年 3 月 5 日刊) (令和元年 5 月 31 日追加)

- ・宮崎博士関係: 628～630 頁 (338～339 コマ)

- ・宮崎博士大学生時代答案関係: 623～624 頁 (335～336 コマ)

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1269827/1/1>〉

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1269827/1/327>〉

- ・武藤和夫 (1911～1976) 「法制史学の開拓者 宮崎道三郎先生」『法経』第 3 号 (三重大学法経学会、昭和 29 年 12 月 1 日刊) 2～8 頁中 4～5 頁 (但し瀧川博士前掲書からの引用)

- ・瀧川政次郎

〈 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%A7%E5%B7%9D%E6%94%BF%E6%AC%A1%E9%83%8E> 〉

5 関係文献

(参考)

- ・国立国会図書館（「宮崎道三郎」等で検索）
〈<https://www.ndl.go.jp/>〉
〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/search?searchCode=SIMPLE&lang=jp&keyword=%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E>〉
- ・国立国会図書館次世代デジタルライブラリー 〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉
- ・CiNii Articles（「宮崎道三郎」等で検索）
〈<https://ci.nii.ac.jp/>〉 ⇒ 〈<https://cir.nii.ac.jp/>〉（令和4（2022）年6月1日一部修正）
〈<https://ci.nii.ac.jp/author/DA05942814>〉

(1) 戦前期

明治15（1882）年

- ・井上哲次郎（巽軒、1856～1938）編『同窓集』第壹編（明治15（1882）年5月7日刊）
（令和元年7月9日追加）
〈<https://ci.nii.ac.jp/ncid/AA11291308?l=ja>〉

明治17（1884）年

- ・宮崎道三郎編『同窓集』第貳編（明治17（1884）年5月刊）（早稲田大学図書館所蔵。柳田泉文庫）（令和元年7月11日追加）
〈https://waseda.primo.exlibrisgroup.com/discovery/search?vid=81SOKEI_WUNI:WINE〉

明治20（1887）年

- ・「宮崎道三郎先生伝」法学士渋谷慥爾（1854～1895）校閲・前川普左二郎編述『批評法律名家纂論 附 明法家列伝』（九春堂、明治20年6月刊）259頁（国会図書館デジタルコレクション、137コマ）
〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I000000439460-00>〉

明治23（1890）年

- ・『臨時科外講義録』第7号（日本法律学校、明治23年10月4日刊）附録1頁以下（開校式記事及び演説。1頁：「日本法律学校開校式（明治23年9月21日）」、2～10頁：「創立者総代宮崎道三郎君の陳述」、その他）（『日本大学百年史』第1巻（日本大学、平成9（1997）年3月31日刊）184～187頁に再録。）（令和2年3月12日追加）

明治25（1892）年

- ・「法学博士宮崎道三郎君」花房吉太郎・山本源太編輯『日本博士全伝』（博文館、明治25

年 8 月 20 日刊) 70～72 頁 (国会図書館デジタルコレクション、47～48 コマ) (令和元年 7 月 31 日一部修正) <<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992465/105>>
(復刻『日本人物誌叢書 3 日本博士全伝』(日本図書センター、平成 2 年 9 月 25 日刊))
(令和元年 7 月 31 日追加)

明治 33 (1900) 年

・怪庵『文士政客風聞録』(大学館、明治 33 (1900) 年 1 月 9 日刊) ((令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加)

<<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/889253/1/1>> (該当頁調査中)

・小川一真 (1860～1929) 編『東京帝国大学』(小川写真製版所、明治 33 (1900) 年 4 月 15 日刊) (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加)

(肖像) <<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/813161/1/12>> (12 齣)

・三浦菊太郎 (旧制浪速高校初代校長、1871～1944) 『日本法制史』(帝国百科全書第 51 編、博文館、明治 33 年 5 月 30 日刊。復刻: 信山社出版、平成 29 年 4 月刊) (同書につき例えば瀧川政次郎 (1897～1992) 『日本法制史 (上)』(講談社学術文庫、昭和 60 年 6 月 10 日刊) 中「学術文庫『日本法制史』序」7 頁参照。) (令和元年 6 月 24 日追加)

<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994009>>

・渡辺修二郎 (1855～?) 『青年と立身処世』(大学館、明治 33 年 9 月 23 日刊) (「旧大学生特癖三対表」152 頁 (78 コマ)、160 頁 (82 コマ)) (唐澤富太郎 (1911～2004) 『貢進生 幕末維新期のエリート』(ぎょうせい、昭和 49 年 12 月刊) にも再録) (令和元年 7 月 22 日追加)

<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/757536/86>>

明治 36 (1903) 年

・小谷保太郎 (1868～1940) 編『三幅対』(「旧東京大学三幅対」) (吉川弘文館、明治 36 (1903) 年 6 月 15 日刊) 18、24、36、37、113、146 頁 (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加)

<<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/777966?keyword=&keyword=%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E&keyword=>> (14、17、23、61、78 齣)

明治 36 (1903) 年～大正 7 (1918) 年 (令和元年 8 月 20 日追加)

・『有造会報』第 1 号 (表紙に「明治 36 年 5 月」の記載、明治 36 年 5 月 30 日刊) ～第 15 号 (表紙に「大正 7 年 12 月」の記載、大正 8 年 5 月 28 日刊) まで確認。その後のことは不明。第 1 号～第 14 号 (表紙に「大正 6 年 12 月」の記載、大正 7 年 5 月 13 日刊) の発行兼編輯人は「寺村鋭」(藤堂家々職)、第 15 号のみ発行は「有造会 右代表 寺村鋭」とある。

<https://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&lang=0&amod=e=12&bibid=3000045028&opkey=B156612848120339&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=02003000&list_disp=20&list_sort=6&cmode=0&chk_st=0&check=0>

・「旧津藩士親睦会」、「藤蔭会」（在京旧藩士子弟等の親睦会）関係記載もあり。各号掲載の「旧津藩士親睦会 在京地方 会員名簿」中には「文学士 中村徳五郎」がいる。

〈http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/N/nakamura_tk.html〉

第3号（明治39年12月10日刊）掲載「藤蔭会本部現在員人名」（34～36頁）中に「宮崎道雄 東京外国語学校」の記載あり（36頁）。同氏は明治16（1883）年1月生、大正6（1917）年8月15日没

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1749208/125>〉

なお、『東京外国語学校一覧』各年度版（「卒業生氏名」等）は未見（⇒下記参照。）。

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/search?searchCode=SIMPLE&lang=jp&keyword=%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E5%A4%96%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E4%B8%80%E8%A6%A7>〉

（以下、令和4（2022）年11月20日追記）

宮崎道雄氏は、東京外国語学校朝鮮語学科（旧称韓語学科 明治44（1911）年1月改称）明治41（1908）年3月第4回専修科修了生である（出処一例：『東京外国語学校一覧 昭和三年度』（東京外国語学校、昭和3年12月21日刊）321頁、175齣）

〈<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/1448335?keyword=%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E9%9B%84&page=175>〉

・「旧津藩士親睦会 在京地方 会員名簿」に見る宮崎博士住所の変遷

第1号（明治36年5月30日刊） 本郷区曙町13、第6号（明治42年12月30日刊）

本郷区曙町15、第11号（大正4年3月2日刊） 牛込区市ヶ谷田町2-39、第12号（大正5年2月12日刊） 府下千駄ヶ谷大字千駄ヶ谷 563

明治37（1904）年

・斬馬劍禅「宮崎、土方対千賀」鳥海安治編『東西両京之大学』（明治37（1904）年1月7日刊）169～181頁（国会図書館デジタルコレクション、88～94コマ）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809035>〉 ⇒斬馬劍禅「宮崎、土方対千賀」『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』（講談社学術文庫、昭和63年11月10日刊）192～205頁に再録。

・浅井虎夫（1877～1928）『支那法制史』（博文館、明治37年4月3日刊）凡例2頁（4コマ）（令和元年10月31日追加） 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/786923>〉

明治39（1906）年

・「(肖像) 法学博士 宮崎道三郎君」『法学協会雑誌』第4巻第2号（明治39年2月1日刊）巻頭（令和元年5月31日追加）

明治41（1908）年

・黒頭巾「現代人物競べ（104）（21）大団円（8）」『読売新聞』明治41年2月7日（金）5頁（黒頭巾＝横山健堂：1872～1943）（令和元年11月18日追加）

明治 43 (1910) 年

・橋南漁郎『大学々生淵源』（日報社、明治 43 年 5 月 15 日刊。復刻本：『日本教育史学基本文献・史料叢書 11 大学々生淵源 全』（大空社、平成 4 年 2 月 20 日刊。解説：中野実（1951～2002））、解説 5～8 頁によれば「著者 橋南漁郎」は「前田幸太郎（1883～1965）」との由（宮崎博士：24 頁）（令和元年 6 月 24 日追加）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813498>〉（上巻）

・金澤庄三郎（1872～1967）『国語の研究』（同文館、明治 43（1910）年 12 月 5 日刊）（該当頁調査中）（令和 5（2023）年 5 月 19 日追加）

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/993655/1/138>〉（該当齣調査中）

明治 44 (1911) 年

・三上参次（1865～1939）（著・発行）『外山正一先生小伝』（明治 44（1911）年 7 月 20 日刊。外山正一：1848～1900）47 頁（令和 5（2023）年 5 月 19 日追加）

〈<https://lab.ndl.go.jp/dl/book/781779?keyword=%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E>〉（31 齣）

大正 2 (1913) 年

・南北社編輯『赤門生活』（南北社、大正 2 年 5 月 28 日刊。復刻本：『日本教育史学基本文献・史料叢書 34 赤門生活』（大空社、平成 8 年 3 月 28 日刊。解説：中野実（1951～2002））（宮崎博士：13 頁）（令和元年 6 月 24 日追加）

〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/936797>〉

・末松謙澄訳並註解『ユスチーニアーヌス帝欽定羅馬法学提要』（穂積陳重「序」、「緒言」あり。帝国学士院、大正 2（1913）年 12 月 10 日刊）（以下末松謙澄博士関係書については、前掲「4（2）末松謙澄博士との関係」参照。）（令和 5（2023）年 12 月 12 日追加）

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-I000000562582-00>〉

大正 3 (1914) 年

・中田薫（1877～1967）編『宮崎教授在職廿五年記念論文集』（有斐閣、大正 3 年 5 月 20 日刊）（後藤朝太郎（1881～1945）の題篆あり。〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/952372/1/1>〉ちなみに、後藤は当時『国家学会雑誌』に「支那古代に於ける法制経済関係文字の解剖（1）～（10）」同誌第 27 巻第 6 号（大正 2 年 6 月刊）～第 28 巻第 9 号（大正 3 年 9 月刊）を掲載している。）（平成 31 年 4 月 29 日一部修正）

大正 8 (1919) 年

・三浦周行（1871～1931）『法制史の研究』（岩波書店、大正 8 年 2 月 15 日刊）「校訂令集解の刊行に就きて」1152 頁〈<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/960522>〉（599 コマ）（初出は『校訂令集解 第 1』（国書刊行会、大正元年 8 月刊）序文か）（令和 3 年 2 月 14 日追加）

大正 10 (1921) 年

- ・『大日本博士録 (1888-1920) 第 1 卷 (全六卷之内) 法学博士及薬学博士之部』(発展社、大正 10 年 1 月 11 日刊) ⇒ 「12 宮崎道三郎」(法学博士之部 15～16 頁)(国立国会図書館デジタルコレクション: 111～112 コマ) <<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/946116>> (令和 3 年 9 月 8 日一部修正)
- ・杉浦重剛 (1855～1924) 述・猪狩史山 (又蔵、1873～1938) 編『亡友追遠録』(明治図書、大正 10 (1921) 年 6 月 20 日刊) 128 頁 (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加) <<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/964320/1/77>> (77 齣)
- ・萩野由之 (1860～1924) 編・萩野懐之 (1877～1910) 『萩野懐之遺稿』(やすゆき、文章院、大正 10 年 8 月 13 日刊) 3 頁 (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加) <<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1921093/1/34>> (14 齣)

昭和 3 (1928) 年

- ・4 月 18 日 逝去 (於市外千駄谷 563 自邸)

昭和 4 (1929) 年

- ・中田薫 (1877～1967) 「序言」、「宮崎道三郎先生小伝」中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和 4 年 6 月 20 日刊) <<https://dl.ndl.go.jp/pid/1050761/1/3>>
- ・高柳眞三 (1902～1990) (紹介及批評)「中田薫博士編『宮崎先生法制史論集』」『国家学会雑誌』第 43 卷第 6 号 (昭和 4 年 6 月 1 日刊) 171～180 頁 (令和 3 年 2 月 4 日追加)
- ・福田徳三 (1874～1930) 「穂積・宮崎両博士遺著の新刊」『改造』昭和 4 年 8、10 月号 ⇒ 同『厚生経済研究』下巻 (刀江書院、昭和 5 年 3 月 5 日刊) 647～685 頁に再録。(令和 6 年 1 月 1 日追加) <<https://dl.ndl.go.jp/pid/1442725/1/1>> (180～200 齣)
< <https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/re/15413/060FT00816.pdf> > ン
<<https://www.lib.hit-u.ac.jp/images/2019/12/fukudatokuzopapers.pdf>> (福田徳三関係資料目録)
⇒ (復刊)『【福田徳三著作集 第 19 卷】厚生経済研究』(信山社、平成 29 年 7 月 31 日刊) <<https://www.shinzansha.co.jp/book/b308906.html>>

昭和 7 (1932) 年

- ・『学位大系博士氏名録 昭和七年版』(発展社出版部、昭和 6 年 10 月 25 日刊)「法学博士」1 頁 <<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1447306>> (120 コマ) (平成 31 (2019) 年 4 月 17 日追加)
- ・『東京帝国大学五十年史 上・下冊』(昭和 7 年 11 月 20 日刊) <<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1453584>>
<<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1453613>>

昭和 8 (1933) 年

・金澤庄三郎(1872～1967)編『濯足庵蔵書六十一種』(金沢博士還暦祝賀会、昭和8(1933)年3月10日刊)2丁裏(「第四 契沖自筆色葉和難集 十巻」)

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1126140/1/1>〉(9 齣)

⇒石川遼子(1945～)『金沢庄三郎一地と民と語は相分つべからず』(ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、平成26(2014)年7月10日刊。金沢庄三郎:1872～1967)113、114頁参照。(令和5(2023)年5月19日追加)

昭和 9 (1934) 年

・『穂積陳重遺文集』第三冊(岩波書店、昭和9年1月28日刊。穂積陳重:1855～1926)254頁(学術用語選定の件)、620頁(留学の件)、676～679頁(末松謙澄翻訳関係)(令和元年9月1日追加) 〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000003-I1879634-00>〉

・矢田一男(1904～1966)「明治時代のローマ法教育(1)、(2・完)」『法学新報』第44巻第3、4号(昭和9年3、4月刊)(1):83～102頁、(2・完):97～114頁(令和2年2月21日追加)

・『穂積陳重遺文集』第四冊(岩波書店、昭和9年9月20日刊)9頁(末松謙澄翻訳関係)、165頁(学術用語選定の件)(令和元年9月1日追加)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000003-I1879636-00>〉

・佐佐木信綱(1872～1963)『明治文学の片影』(中央公論社、昭和9年10月25日刊)(小中村清矩先生:5頁、末松謙澄子:173頁、穂積陳重男:230頁等)(令和元年6月11日追加)

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1880048/1/4>〉

昭和 13 (1938) 年

・高柳賢三(1887～1967)「法科大学時代の諸先生」『独裁政と法律思想—現代欧米の法律思潮—』(河出書房、昭和13年4月23日刊)319～328頁(宮崎博士分:326～327頁。初出:『緑会雑誌』第9号(昭和12年12月刊))(令和2年6月30日追加)

国立国会図書館デジタルコレクション 〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1875045/1/1>〉(170 齣)

・「宮崎道三郎」『新撰大人名辞典』第6巻(平凡社、昭和13年10月1日刊)133頁 ⇒ 『日本人名大事典』(覆刻版、平凡社、昭和54年7月10日刊)132頁

〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1874864/1/1>〉

・山根徳太郎(1899～1973)「解題」(三浦周行(1871～1931)『国史上の社会問題—日本文化名著選』(創元社、昭和13年12月25日刊)203頁(宮崎博士宅での令集解校合の件を記載))(令和2年4月30日刊)(令和2年5月9日追加)

〈<https://dl.ndl.go.jp/>〉、〈<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1218464>〉

昭和 16 (1941) 年

・瀧川政次郎(1897～1992)「明治以後に於ける法制史学の発達」『日本法制史研究』(有斐閣、昭和16年3月5日刊)(令和元年5月31日追加)

・宮崎博士関係:628～630頁(338～339 齣)

・宮崎博士大学生時代答案関係: 623～624 頁 (335～336 齣)

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1269827/1/1>〉

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1269827/1/327>〉

・瀧川政次郎:

〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%80%A7%E5%B7%9D%E6%94%BF%E6%AC%A1%E9%83%8E>〉

・伊藤至郎 (1899～1955) 『鷗外論稿』(光書房、昭和 16 (1941) 年 10 月 25 日刊) 252、254、267 頁 (令和 5 (2023) 年 5 月 19 日追加)

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1877616/1/199>〉 (131、132、138 齣)

昭和 17 (1942) 年

・石井良助 (1907～1993) 「日本法制史研究の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』(東京帝国大学、昭和 17 年 4 月 13 日刊) 277～293 頁、特に 280～282 頁 (国立国会図書館デジタルコレクション 〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879592/1/1>〉 : 151～159 齣)

・原田慶吉 (1903～1950) 「我が国に於ける外国法史学の発達」『東京帝国大学学術大観 法学部 経済学部』(東京帝国大学、昭和 17 年 4 月 13 日刊) 294～307 頁 (国立国会図書館デジタルコレクション 〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/1879592/1/1>〉 : 160～166 コマ) (平成 31 年 2 月 1 日追加、令和 3 年 3 月 20 日一部修正)

(参考) 和田徹「原田慶吉電子文庫」(令和 5 (2023) 年 12 月 31 日閉館)

〈<http://home.q02.itscom.net/tosyokan/data/HARADA007.html>〉

昭和 18 (1943) 年

・穂積重遠 (1883～1951) 『大学生活四十年』(国民講座第 494 輯抜刷。(財) 社会教育協会、昭和 18 年 11 月刊) (令和元年 5 月 10 日追加)

(参考) 穂積重遠 (1883～1951) 著/穂積重行 (1921～2014) 編『欧米留学日記 (1912～1916 年) 一大正一法学者の出発——』(岩波書店、平成 9 年 1 月 30 日刊) 「結びに代えて—鳩山英夫のこと—」中 359～360 頁 (令和元年 6 月 24 日追加)

(2) 戦後期

昭和 21 (1946) 年

・三宅雪嶺 (1860～1945) 『大学今昔譚』(我観社、昭和 21 (1946) 年 11 月 10 日刊。復刻本: 『日本教育史学基本文献・史料叢書 8 大学今昔譚』(大空社、平成 3 (1991) 年 4 月 23 日刊。解説: 中野実 (1951～2002)) (宮崎博士: 132 頁) (令和元年 6 月 24 日追加)

昭和 23 (1948) 年

・石井良助 (1907～1993) 『日本法制史概説』(弘文堂、昭和 23 (1948) 年 12 月 25 日刊。復刻本: 創文社、昭和 35 (1960) 年 6 月 25 日改版第一刷) 緒論 2～3 頁 (令和元年 6 月 28 日追加)

[〈https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1153263/1/1〉](https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/1153263/1/1)

昭和 26 (1951) 年

・『阪谷芳郎伝』(故人阪子爵記念事業会、昭和 26 (1951) 年 2 月 28 日刊) 74~76 頁(宮崎博士が欧州留学以前の明治 16 (1883) 年 7 月から同 17 年 6 月にかけて東大文学部政治学理財学科で「日本古今法制」を講じていたことがわかる。なお、西尾林太郎 (1950~) 『阪谷芳郎』(人物叢書、吉川弘文館、平成 31 年 3 月 20 日刊) 9~13 頁参照。) (令和元年 6 月 11 日追加)

[〈https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3008525/1/1〉](https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3008525/1/1) (57~58 齣)

昭和 27 (1952) 年

・石井良助 (1907~1993) 『日本法制史概要』(創文社、昭和 27 (1952) 年 4 月 29 日刊) (巻末「日本法制史文献」(1~19 頁) 参照) (令和元年 6 月 11 日追加)

[〈https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2999388/1/1〉](https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2999388/1/1)

昭和 28 (1953) 年

・松本蒸治 (1877~1954) 「大学生時代の諸先生の思い出」(1~5) 『書齋の窓』(1): 第 5 号(昭和 28 年 10 月 10 日刊) 6~7 頁、(2): 第 6 号(昭和 28 年 11 月 10 日刊) 6~7 頁、(3): 第 8 号(昭和 29 年 1 月 10 日刊) 6~7 頁、(4): 第 9 号(昭和 29 年 2 月 10 日刊) 6~7 頁、(5・完): 第 10 号(昭和 29 年 3 月 10 日刊) 6~7 頁「一宮崎道三郎、戸水寛人、松室致、勝本勘三郎、前田孝階、石渡敏一の六先生について一」⇒『書齋の窓』第 269 号(創業 100 周年記念号、昭和 52 年 11 月 1 日刊) 28~36 頁に一括して再録。

昭和 29 (1954) 年

・武藤和夫 (1911~1976) 「法制史学の開拓者 宮崎道三郎先生」『法経』第 3 号(三重大学法経学会、昭和 29 年 12 月 1 日刊) 2~8 頁(武藤和夫: 当時三重大学学芸学部教授) (本文献については、後掲「昭和 49 (1974) 年」・『日本人物文献目録』(平凡社、昭和 49 年 6 月 10 日刊) を参照。) (令和元年 5 月 30 日追加)

昭和 37 (1962) 年

・日本学士院『日本学士院八十年史』(本編、資料編二) (昭和 37 年 3 月 21 日、3 月 31 日刊) (平成 31 年 4 月 17 日追加)

[〈https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3000064/1/4〉](https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3000064/1/4) (本編)

[〈https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2988195/1/3〉](https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/2988195/1/3) (資料編二)

昭和 43 (1968) 年

・石井良助 (1907~1993) 「日本法制史学八十八年—東京大学における—」『国家学会雑誌』第 81 卷第 1・2 号(昭和 43 年 7 月 15 日刊) 109~137 頁、宮崎博士については特に 111~114 頁参照。⇒同『大化改新と鎌倉幕府の成立 増補版 法制史論集第一巻』(創文社、昭和 47 年 10 月 30 日刊) 327~359 頁に収録、特に 330~333 頁参照。

昭和 48 (1973) 年

・熊谷開作 (1920～1990) 「明治時代における法学教育と法制史教育」『法制史教育の現状と問題点』(法制史研究 22 号別冊・学会報告、法制史学会、昭和 48 年 6 月 20 日刊) 165～181 頁 (令和元年 5 月 10 日追加)

昭和 49 (1974) 年

・奥野彦六 (1895～1979) 「見聞した法律学者の話 (続)」(「四 日本法制史宮崎道三郎先生」)『創価法学』第 3 巻第 4 号 (昭和 49 年 3 月 31 日刊) 129～134 頁 ⇒奥野彦六『法律家として人間として』(三一書房、昭和 56 年 11 月 30 日刊) 21～31 頁に再録。

・『日本人物文献目録』(平凡社、昭和 49 年 6 月 10 日刊) 1041 頁

(同目録には、「宮崎道三郎」関連では、中田薫編『宮崎先生法制史論集』(岩波書店、昭和 4 年 6 月 20 日刊) 及び武藤和夫「法制史学の開拓者宮崎道三郎先生」(三重法経 3、昭和 30 年刊) の二著作が掲載されている。後者は三重大学芸学部教授武藤和夫氏 (1911～1976) が津市立三重短期大学の機関誌『三重法経』第 3 号に寄稿されたものかと思われたが、当該号には武藤教授の別の論稿(「法制に関する古典籍目録解題」(48～61 頁))が掲載されていて同稿は出ていない。また、『三重法経』第 1-27 号の「論説総目次」にも掲載がない。然らば果たしてこれは何か。要検討。) (平成 31 年 4 月 30 日追加)

⇒その後、さる識者の示教により下記のことが判明した。当初津市立三重短期大学の機関誌『三重法経』第 3 号とされていた当該誌は、当時の三重大学学芸学部にあった三重大学法経学会の機関誌『法経』第 3 号 (昭和 29 年 12 月 1 日刊) とのことであった。『日本人物文献目録』が何故「三重法経 3」と記載したのかは不明ではあるが、いずれにせよ本文献は宮崎博士検討上極めて貴重である。御懇篤な御指導に厚く御礼申し上げます。(令和元年 5 月 31 日追加)。なお、武藤教授論稿を除く上記『法経』そのものは未見であるが、三重大学附属図書館 OPAC によれば、『法経』の発行号は「1 号(昭 28.6.1)-5 号(昭 32.3)」とのことである。同大学芸学部の学芸課程については、『三重大学教育学部創立百年史』(三重大学教育学部同窓会百周年記念事業会、昭和 52 年 3 月 1 日刊) 710～711、943 頁に記載されているが、昭和 32 (1957) 年 3 月 31 日に学芸課程が廃止されたとあることから、同誌の休刊はあるいはこれと関連するものかも知れない。(令和元年 11 月 18 日追加)

昭和 50 (1975) 年

・『鷗外全集』第 35 巻 (岩波書店、昭和 50 年 1 月 22 日刊) 「航西日記」75、76 頁 (明治 17 (1884) 年 8 月 24、29 日条、船中同行者(「日東十客」)関係)、「獨逸日記」90 頁 (明治 17 (1884) 年 11 月 12 日条、宮崎道三郎、井上哲次郎関係) (『獨逸日記 小倉日記』(森鷗外全集 13、ちくま文庫、平成 8 (1996) 年 7 月 24 日刊) 14、15 頁参照。) (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加、令和 5 (2023) 年 5 月 19 日「航西日記」の件追加)

昭和 52 (1977) 年

・浅井虎夫 (1877～1928) 『支那ニ於ケル法典編纂ノ沿革』(汲古書院、昭和 52 年 4 月

刊（親本：京都法学会、明治 44（1911）年刊、〈<https://dl.ndl.go.jp/pid/786922/1/1>〉）
中、瀧川政次郎（1897～1992）「序並びに解題」3 頁、嵐義人（1944～）「浅井帙夫小伝」
399～400 頁）（令和元年 11 月 18 日追加）

・渡辺實（1911～1978）『近代日本海外留学生史 上下』（講談社、（上）：昭和 52 年 9 月
16 日刊、（下）：昭和 53 年 4 月 10 日刊）（宮崎博士：501 頁、戸水寛人博士：584 頁、千賀
鶴太郎博士：513 頁）（令和元年 7 月 22 日追加）

昭和 54（1979）年

・日本学士院編『学問の山なみ 物故会員追悼集 第 1』（日本学士院、昭和 54（1979）年
1 月 15 日刊）（令和元年 7 月 22 日追加）

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/12255812/1/1>〉

・『日本人名大事典』第 6 卷（執筆者：「大塚」「宮崎道三郎」）（平凡社、昭和 54 年 7 月
刊。『新撰大人名辞典』第 6 卷（昭和 13 年 10 月 1 日刊）覆刻版）（令和元年 7 月 22 日追
加）

昭和 55（1980）年

・日本学士院編『学問の山なみ 物故会員追悼集 第 2』（日本学士院、昭和 55（1980）年
3 月 15 日刊）（令和元年 7 月 22 日追加）

〈<https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/12256952/1/1>〉

・物集高量（もずめ、1879～1985）『続・百歳は折り返し点』（日本出版社、昭和 55（1980）
年 5 月 1 日刊）171 頁（参考：同『百歳は折り返し点』（日本出版社、昭和 54 年 4 月 17
日刊））（令和 4 年 3 月 9 日追加）

昭和 56（1981）年

・勝田勝年（三浦周行博士令甥、1904～1988）『三浦周行の歴史学』（柏書房、昭和 56（1981）
年 4 月 25 日刊）61、174、281 頁（令和 5 年 1 月 26 日追加）

昭和 58（1983）年

・石井良助（1907～1993）「あとがき」『中田薫述 日本法制史講義』（創文社、昭和 58（1983）
年 10 月 15 日刊）415～428 頁（平成 31 年 4 月 29 日追加）

昭和 60（1985）年

・中村勝利（1905～?）編『藤堂藩（津・久居）功臣年表一分限録一』（三重県郷土資料
叢書第 86 集。三重県郷土資料刊行会、昭和 60 年 2 月 20 日刊）107、116 頁

（参考）『津城下図（嘉永期写）』（津市教育委員会、平成 24 年 10 月刊）（附録資料と
して「津城下図〔嘉永期写・1850 年代〕記載内容（地名・施設名・藩士名等）の詳細」あ
り。）（令和 3 年 10 月 19 日追加）

昭和 61 (1986) 年

・『東京大学百年史 部局史 1』(東京大学、昭和 61 年 3 月 1 日刊)

(下記については、令和 2 (2020) 年 5 月 26 日追加)

〈https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/z1901_00030.html〉

〈https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=8329&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=28&block_id=31〉

昭和 62 (1987) 年

・岩野英夫 (1944～) 「わが国における法史学の歩み (1873～1945) : 法制史関連科目担任者の変遷」『同志社大学法学』第 39 巻第 1・2 号 (昭和 62 年 7 月 31 日刊) 225～312 頁

〈<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/11524/kj00000658370.pdf>〉

⇒・研究代表者岩野英夫『法学教育における法史学の存在価値—わが国における法史学の成立と展開との関連で—』平成 11 年度—平成 13 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告 (3 月刊) (註: これには、上記岩野英夫「わが国における法史学の歩み (1873—1945) —法制史関連科目担任者の変遷—」『同志社法学』第 39 巻第 1・2 号 (第 200 号記念論集 I、昭和 62 年 7 月 31 日刊) の修正版が収録されている。)

(参考: 〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000588862>〉) (令和元年 5 月 10 日追加)

昭和 63 (1988) 年

・穂積重行 (1921～2014) 『明治—法学者の出発』(岩波書店、昭和 63 年 10 月 19 日刊) (令和元年 6 月 26 日追加)

・『東西両京の大学—東京帝大と京都帝大—』(講談社学術文庫、昭和 63 年 11 月 10 日刊) (「宮崎、土方対千賀」192～205 頁) (親本: 鳥海安治編『東西両京之大学』(明治 37 年 1 月 7 日刊) 169～181 頁 〈<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/809035>〉 (88～94 コマ))

平成 3 (1991) 年

・三上参次 (1865～1939) 『明治時代の歴史学界 三上参次懐旧談』(吉川弘文館、平成 3 年 2 月 10 日刊) 151 頁 (ここには三上博士が明治 20 年代の一時期三ヶ年 (明治 26・27・28 年) にわたり法科大学で宮崎博士に代わって「法制史」の講義を担当したことが出ている。同博士が法科大学で法制史を講じたことは公的文献では何故か確認できないが、例えば有名な「二八会」の有力メンバーであった上山満之進 (かみやま、1869～1938) の追悼録である『上山満之進』上巻 (上山君記念事業会、昭和 16 年 12 月 20 日刊) 78～79 頁には、明治 28 年 7 月 10 日付けの東大法科卒業証書の内容が活字化されており、「各教授ノ証明ヲ認了シ授クルニ卒業証書ヲ以テシ本科ノ学業ニ堪能ナルヲ証す」とあって、「文科大学助教授 文学士 三上参次」の氏名も記載されている。) (令和元年 5 月 1 日追加、同年 11 月 18 日一部修正)

「二八会」: 〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%8C%E5%85%AB%E4%BC%9A>〉

なお、瀧川政次郎（1897～1992）前掲「明治以後に於ける法制史学の発達」『日本法制史研究』（有斐閣、昭和16年3月5日刊）630頁は、「三上博士の談」（607、628頁）によるとして「殊に三上博士は、明治二十八年より三十一年まで、法科大学に於いて、宮崎博士に代つて日本法制史を講ぜられた。」とするが、これは、上記のように明治26～28年のことかと思われる。（「なお」以下：令和元年6月11日追加）

平成4（1992）年

- ・『幕末 明治 海外渡航者総覧』第2巻 人物情報編（柏書房、平成4年3月21日刊）381頁 3670 宮崎道三郎（千賀鶴太郎：第1巻（同）205頁、戸水寛人：第1巻（同）501頁）（令和元年7月22日追加）
- ・植田信廣（1950～）「宮崎道三郎」『国史大辞典』第13巻（吉川弘文館、平成4年4月1日刊）494頁（平成31年2月11日追加）

平成7（1995）年

- ・西村重雄（1943～）「イェーリングの明治日本への助言および叙勲一新出資料に基づく再検討一」『法政研究』第61巻第3・4合併号（九州大学法学部創立七十周年記念論文集（上））（平成7年3月刊）（令和元年7月22日刊）
- ・中井義幸（1936～2011）「『日東十客』の写真」『鷗外』57（平成7年7月刊）132～153頁 ⇒中井義幸『鷗外留学始末』（岩波書店、平成11年7月26日刊）2～9頁参照。（平成31年2月11日追加）
- ・柏村哲博（1949～）「設立者総代宮崎道三郎の生涯」『日本大学史紀要』創刊号（平成7年12月22日刊）1～18頁
- ・久保正幡博士講演「中田薫先生の思い出と法制史学会の回顧」第170回法制史学会東京部会例会〈<https://www.jalha.org/history/tokyo/>〉（久保正幡：1911～2010）
 - (1) 日時 平成7（1995）年12月26日（火）午後3時～5時50分
 - (2) 会場 早稲田大学本部キャンパス 1号館3階308号室⇒警察政策学会警察史研究部会編『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—（第二輯）—武藤誠氏・加藤晶氏・福永英男氏・戸高公德氏追悼記念論集—【下冊】』（警察政策学会資料第115号、警察政策学会、令和3（2021）年5月8日発行）455～475頁に要旨掲載。（令和3（2021）年9月8日追加）
〈 <http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99115.pdf>〉

平成8（1996）年

- ・高瀬暢彦（1933～）「宮崎道三郎の法史学講義」『日本大学史紀要』第2号（平成8年12月刊）45～75頁

平成9（1997）年

- ・『日本大学百年史』第1巻（日本大学、平成9（1997）年3月31日刊）61～68頁、181

頁以下（令和 2 年 3 月 12 日追加）

・三ッ村健吉（1918～2008）『碑 碑が語る津の歴史』（いしづみ。私刊、平成 9（1997）年 12 月 20 日刊）42 頁（令孫櫻木幹雄氏が再建された「櫻木春山先生之寿碑」の件を載せる。）（令和 3 年 2 月 14 日追加）三ッ村氏にはその後遺著として『三重の碑（いしづみ）百選』（伊勢新聞社、平成 21（2009）年 12 月 16 日刊）があるが、同書には上記「櫻木春山先生之寿碑」は収載されていない。（令和 5 年 7 月 18 日追加）

平成 10（1998）年

・宮崎誠（? ～2008、81 歳）・柏村哲博「宮崎道三郎のドイツ留学について」『日本大学史紀要』第 5 号（平成 10 年 12 月刊）151～172 頁

平成 11（1999）年

・宮崎誠（? ～2008、81 歳）「宮崎道三郎のドイツ留学について（補遺）」『日本大学史紀要』第 6 号（平成 11 年 12 月刊）131～146 頁

平成 12（2000）年

・今村孝子「宮崎道三郎が住んだ町—ハイデルベルク」『鷗外』67（平成 12（2000）年 7 月刊）260～271 頁

平成 13（2001）年

・浅見倫太郎（1868～1943）『朝鮮法制史稿』（アジア学叢書 82、大空社、平成 13 年 5 月刊。大正 11（1922）年巖松堂書店発行の復刻、参考資料：宮崎道三郎「朝鮮語ト日本法制史」『国家学会雑誌』第 18 卷第 209 号（明治 37 年 7 月 国家学会発行）、付：参考資料目録）（令和元年 8 月 20 日追加）

・植田信廣（1950～）「宮崎道三郎」『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館、平成 13 年 7 月 20 日刊）1029 頁（令和元年 5 月 1 日追加）

平成 14（2002）年

・伊能秀明（1953～）『法制史料研究 3』（巖南堂書店、平成 14（2002）年 8 月 25 日刊）中「第一章「日本法制史」概説書 細目次総覧—クロニクル日本法制史学 明治～大正期～」15、16、44～45 頁（令和元年 9 月 8 日追加）

平成 17（2005）年

・菅原憲二（1947～）・飯塚一幸（1958～）・西山伸（1963～）『田中秀央 近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』（京都大学学術出版会、平成 17 年 3 月 25 日刊）122～124 頁（「11 末松子爵」）、126～127 頁（「13 長女悠紀子、次女英子」）、286～287 頁（末松謙澄書簡）、346～347 頁（解説）（令和元年 5 月 10 日追加）

平成 19（2007）年

・六本佳平（1939～）・吉田勇（1945～）編『末弘巖太郎と日本の法社会学』（東京大学出

版会、平成 19 年 3 月 30 日刊) 10 頁 (末弘巖太郎: 1888~1951) (平成 31 年 2 月 11 日追加)

・真田治子「井上哲次郎の欧州留学と『哲学字彙』第三版の多言」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』第 7 卷 (平成 19 年 12 月 1 日刊) 1~13 頁 (7 頁、11 頁 (注 (7))、12 頁 (参考文献)) (令和元年 7 月 31 日追加)

〈https://saigaku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=849&item_no=1&page_id=13&block_id=21〉

・長尾龍一 (1938~)「宮崎道三郎の法史学」『日本大学史紀要』第 10 号 (平成 19 年 10 月刊) 1~31 頁 ⇒同『法学に遊ぶ 新版』(慈学社、平成 21 年 10 月刊) 附録 1 255 頁以下に再録。(平成 31 年 4 月 7 日一部修正)

〈http://book.geocities.jp/ruichi_nagao/miyazakimitisaburou.html〉

⇒ (下記に移転との由)

〈<http://ouranos2.web.fc2.com/>〉

〈<http://ouranos2.web.fc2.com/miyazakimitisaburou.html>〉

平成 22 (2010) 年

・大沼宜規 (1971~)『小中村清矩日記』(汲古書院、平成 22 年 7 月 15 日刊) (宮崎博士関係個所については同書「主要人名索引」13 頁参照。) (平成 31 年 4 月 23 日追加)

平成 23 (2011) 年

・藤野奈津子「岡松参太郎とローマ法研究—『岡松参太郎文書』の手稿からみえてくるもの—」『千葉商大論叢』第 48 卷第 2 号 (平成 23 年 3 月刊) 57~84 頁 (平成 31 年 4 月 2 日追加) 〈<https://ci.nii.ac.jp/els/contents110008439074.pdf?id=ART0009680816>〉

平成 24 (2012) 年

・藤田大誠 (1974~)「近代国学と日本法制史」『國學院大學紀要』第 50 卷 (平成 24 年 2 月 14 日刊) 105~132 頁 (参考: 法制史学会第 415 回近畿部会 (2010 年 12 月 18 日) 於京都大学法経本館 3 階小会議室・藤田大誠氏報告「近代国学と日本法制史」〈<https://www.jalha.org/kinki/>〉) (平成 31 年 3 月 31 日一部追加)

・齋藤希史 (1963~) 編『近代日本の国学と漢学 東京大学古典講習科をめぐる』(UTCP booklet、24) (東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」、平成 24 年 3 月 27 日刊。齋藤希史:「序文」、品田悦一 (1959~)「国学と国文学 東京大学文学部附属古典講習科の歴史的な性格」、齋藤希史「漢学の岐路 古典講習科漢書科の位置」その他) (令和元年 5 月 2 日追加)

・和仁かや (口頭発表か)「宮崎道三郎の法史学」(石井紫郎先生喜寿シンポジウム「パイオニアの系譜」、平成 24 年 7 月) (令和元年 8 月 20 日追加)

〈<https://researchmap.jp/ka18/>〉

・『津城下図 (嘉永期写)』(津市教育委員会、平成 24 年 10 月刊) (附録資料として「津城下図 [嘉永期写・1850 年代] 記載内容 (地名・施設名・藩士名等) の詳細」あり。)

(参考) 中村勝利 (1905～?) 編『藤堂藩 (津・久居) 功臣年表一分限録一』 (三重県郷土資料叢書第 86 集。三重県郷土資料刊行会、昭和 60 年 2 月 20 日刊) 107、116 頁 (令和 3 年 10 月 19 日追加) <<https://dl.ndl.go.jp/pid/9571441/1/1>>

平成 25 (2013) 年

・和仁かや「宮崎道三郎と伴信友の「カササギ」 法制史学黎明期への一アプローチ」『神戸学院法学』第 42 巻第 3・4 号 (赤堀勝彦教授 富澤敏勝教授退職記念論文集) (平成 25 年 3 月刊) 705～723 頁 (平成 31 年 3 月 31 日 URL 追加)

< http://www.law-kobegakuin.jp/~jura/law/files/42-3_4-13.pdf#search=%27%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E%E3%81%A8%E4%BC%B4%E4%BF%A1%E5%8F%8B%E3%81%AE%E3%80%8C%E3%82%AB%E3%82%B5%E3%82%B5%E3%82%AE%27>

・林智良 (1962～)「W. E. Grigsby の学識と教育活動——日本最初の「ローマ法」講義担当者をめぐって」『阪大法学』第 63 巻第 3・4 号 (平成 25 年 11 月 30 日刊) 193～216 頁 (令和 2 年 2 月 21 日追加) <<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/67959/>>

平成 26 (2014) 年

・石川遼子 (1945～)『金沢庄三郎一地と民と語は相分つべからずー』 (ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、平成 26 (2014) 年 7 月 10 日刊。金沢庄三郎: 1872～1967) 113、114、134、137、182、315 頁 (令和 5 (2023) 年?月?日追加)

<<https://www.minervashobo.co.jp/book/b178377.html>>

平成 29 (2017) 年

・趙晶 ((当時) 中國政法大學法律古籍整理研究所副教授、1983～) 「論宮崎道三郎の東洋法制史研究」『法制史研究』 (台北・中国法制史学会主編) 第 32 期 (2017 年 12 月 1 日刊) 267～284 頁 (平成 31 年 3 月 31 日追加)

<<http://www.clegalhistory.org/index.php?action=legal-history-research>>

< http://flgj.cupl.edu.cn/local/D/FE/EE/CBE89F935A0598AD4261F6C8F31_A1283C8F_1027D3.pdf#search=%27%E5%AE%AE%E5%B4%8E%E9%81%93%E4%B8%89%E9%83%8E+%E6%9D%B1%E6%B4%8B%E6%B3%95%E5%88%B6%E5%8F%B2%27>

平成 30 (2018) 年

・趙晶 (1983～)「日本东、西两京东洋法制史学的“双子星座”」『文汇学人』第 332 期 (2018 年 3 月 2 日刊) (令和 3 (2021) 年 12 月 25 日追加)

<http://flgj.cupl.edu.cn/local/E/0A/37/00E71B1F056AEB51CA4B0B5A595_E2689D47_22A2D4.pdf>

・内田貴 (1954～)『法学の誕生 近代日本にとって「法」とは何であったか』 (筑摩書房、平成 30 (2018) 年 3 月 28 日刊) (令和 5 (2023) 年 7 月 18 日追加)

〈<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480867261/>〉

・吉原達也「穂積陳重のローマ法講義について」『日本法学』第 84 卷第 1 号(平成 30(2018)年 6 月 30 日刊) 1～51 頁(穂積陳重: 1855～1926)

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_1.pdf〉

・佐藤雄基(1981～)「立教大学図書館所蔵大久保利謙文庫とその内覧会—歴史家の蔵書から見る史学史」『立教大学日本学研究所年報』第 17 号(平成 30(2018)年 7 月刊) 70～61 頁(「Ⅱ 大久保利謙の蒐集文献—明治文化史の基本史料」中に宮崎博士日本法制史講義録 4 冊の紹介がある。(63～62 頁)) (令和元年 9 月 10 日追加)

〈<https://ci.nii.ac.jp/naid/40021680386>〉

〈https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=17098&item_no=1&page_id=13&block_id=49〉

・小野翠・七戸克彦(1959～)「内子町・重岡薫五郎関係資料」『法政研究』第 85 卷第 1 号(平成 30 年 7 月 13 日刊) 251～307 頁(東京大学法学部別課法学科における江木衷(1858～1925)担当「羅馬法講義」(明治 18(1885)年)関係記載がある。256、281 頁) (令和 3 年 1 月 17 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=frombib&lang=0&amode=MD100000&opkey=B156895559945133&bibid=1957719&start=1〉

・今野元(1973～)『吉野作造と上杉慎吉—日独戦争から大正デモクラシーへ』(名古屋大学出版会、平成 30 年 11 月 15 日刊) 102 頁(美濃部達吉の比較法制史専攻経緯に言及。吉野作造: 1878～1933、上杉慎吉: 1878～1929、美濃部達吉: 1873～1948) (平成 31 年 2 月 11 日追加、令和元年 11 月 18 日一部補正)

・吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 卷第 3 号(池村正道教授古稀記念号、平成 30 年 12 月 25 日刊) 423～451 頁

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

平成 31 (2019) 年 (～2019 年 4 月 30 日)

・和仁かや「学界展望(日本法制史)」『国家学会雑誌』第 132 卷第 1・2 号(平成 31 年 2 月刊) 117～120 頁(平成 31 年 4 月 29 日追加)

・吉原達也「東京大学草創期におけるローマ法講義—穂積陳重博士・宮崎道三郎博士・戸水寛人博士の場合—」東京大学大学院人文社会系研究科『2014—2018 年度他分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』(平成 31(2019)年 3 月刊) 219～262 頁(令和 2 年 2 月 21 日追加)

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I029775148-00>〉

・吉原達也編「(資料) 宮崎道三郎博士講述『比較法制史』緒言及び第一部 羅馬法制史」『日本法学』第 84 卷第 4 号(平成 31 年 3 月 25 日刊) 303～387 頁(平成 31 年 4 月 7 日追加)

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_4.pdf〉

・神野潔(1976～)(報告「明治期における日本法制史学の展開図」(法制史学会東京部会第 274 回例会「テーマ: 日本における法史研究の歴史」(下記法制史学会第 71 回総会

〔ミニ・シンポジウム〕準備会との由。平成 31 (2019) 年 4 月 13 日 (土) 午後、於東京大学東洋文化研究所大会議室) の一つとして) 〈<https://www.jalha.org/tokyo/>〉 (平成 31 年 4 月 5 日追加)

・藤野奈津子 (報告「明治前期における西洋法史学の成立過程—宮崎道三郎『羅馬法講義』ノートを中心に—」 (法制史学会東京部会第 274 回例会「テーマ: 日本における法史研究の歴史」 (下記法制史学会第 71 回総会〔ミニ・シンポジウム〕準備会との由。平成 31 年 (2019) 4 月 13 日午後 (土)、於東京大学東洋文化研究所大会議室) の一つとして) 〈<https://www.jalha.org/tokyo/>〉 (平成 31 年 3 月 31 日追加)

令和元 (2019) 年 (2019 年 5 月 1 日～)

・法制史学会第 71 回総会〔ミニシンポジウム〕「日本における法史研究の歴史」 (令和元 (2019) 年 6 月 8 日 (土) 午後、於神戸学院大学ポートアイランドキャンパス。田口正樹、神野潔、赤城美恵子、藤野奈津子、松沢裕作、大中有信各氏)

・神野潔 (1976～) (報告)「明治期における日本法制史学の展開図」

⇒『法制史研究 70 (2020)』 (令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 131～147 頁に収録 (令和 3 (2021) 年 9 月 9 日追加)

・藤野奈津子 (報告)「明治前期における西洋法史学の誕生」あり。

〈<https://www.jalha.org/soukai2/>〉

〈<https://www.jalha.org/wordpress/wp-content/uploads/2019/05/71soukai.pdf>〉

⇒『法制史研究 70 (2020)』 (令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 179～207 頁に収録 (令和 3 (2021) 年 9 月 9 日追加)

(令和元年 5 月 25 日追加、同年 6 月 11 日、同 6 月 24 日、令和 3 年 9 月 9 日一部修正)

・吉原達也編「(資料) 宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 巻第 1 号 (令和元年 6 月 28 日刊) 1～96 頁 (令和元年 7 月 11 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf〉

【書評】林智良 (1962～)『法制史研究 70 (2020)』 (令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 417～420 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 巻第 2 号 (日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元年 9 月 27 日刊) 1～30 頁 (令和元年 10 月 22 日追加) 〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf〉

【書評】林智良 (1962～)『法制史研究 70 (2020)』 (令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 417～420 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・『写真でみる日本大学の 130 年』 (編集: 日本大学企画広報部、発行: 学校法人日本大学、令和元年 10 月 4 日刊) (宮崎博士関係: 3、4、7、15、16、20 頁) (令和 2 年 2 月 16 日追加)

・西英昭 (1974～)「中華民国初期における中国法制史学展開過程の一断面—教科書の分析を中心に—」『法政研究』第 86 巻第 2 号 (令和元年 10 月 10 日刊) 215、249、251、255、256 頁 (令和元年 11 月 18 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/2534547/p266.pdf〉

令和 2 (2020) 年

・吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』総論及び第一編 羅馬法律史」『日本法学』第 85 卷第 3 号 (令和 2 年 1 月 31 日刊) 147～215 頁 (穂積陳重: 1855～1926) (令和 2 年 2 月 21 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_3/each/06.pdf〉

・吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 卷第 4 号 (南部篤教授退職記念号、令和 2 年 3 月 27 日刊) 223～266 頁 (令和 2 年 5 月 26 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉

・瀬賀正博 (1970～)「『校訂令集解』から『令集解釈義』まで—瀧川政次郎氏の講演によせて—『法史学研究会会報』第 23 号 (小林宏先生米寿記念号、令和 2 年 3 月 30 日刊) 213～216 頁 (宮崎道三郎博士の令集解講読・校訂作業にも言及あり。瀧川政次郎: 1897～1992) (令和 2 年 4 月 18 日追加)

・「宮崎道三郎博士漢詩文題目抄」『法史学研究会会報』第 23 号 (小林宏先生米寿記念号、令和 2 年 3 月 30 日刊) 213～216 頁 (令和 2 年 4 月 18 日追加)

・神野潔 (1976～)「東京時代の三浦周行—法学協会雑誌と新民法と—」『藝林』第 69 巻第 1 号 (令和 2 年 4 月 10 日刊) 184、191、199、204 (註 34)、205 頁 (註 48) (高塩博先生の御教示に拠る。) (令和 2 年 4 月 18 日追加)

・吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』第二編 羅馬法正編第 1 巻及び第 2 巻」『日本法学』第 86 巻第 1 号 (令和 2 年 6 月 26 日刊) 37～125 頁 (穂積陳重: 1855～1926) (令和 2 年 7 月 15 日追加)

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf〉

令和 3 (2021) 年

・神野潔 (1976～)「明治期における日本法制史学の展開図」『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 131～147 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・藤野奈津子「明治前期における西洋法史学の誕生」『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 179～207 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・林智良 (1962～)「(書評) 吉原達也編「宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」(『日本法学』85-1) 同著「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」(『日本法学』85-2)」

『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 417～420 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・「久保正幡博士述「中田薫先生の思い出と法制史学会の回顧」、中田薫博士関係資料抄—久保正幡先生御講演の参考として」警察政策学会警察史研究部会編『近代警察史の諸問題—川路大警視研究を中心に—(第二輯)—武藤誠氏・加藤晶氏・福永英男氏・戸高德氏追悼記念論集—【下冊】』(警察政策学会資料第 115 号、警察政策学会、令和 3 (2021) 年 5 月 8 日発行。久保正幡: 1911～2010) 455～475 (要旨)、477～488 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

〈<http://www.asss.jp/>〉 ⇒

〈 <http://asss.jp/report/%E8%AD%A6%E5%AF%9F%E6%94%BF%E7%AD%96%E5%AD%A6%E4%BC%9A%E8%B3%87%E6%96%99115.pdf>〉

(参考) 久保正幡先生講演「中田薫先生の思い出と法制史学会の回顧」

第 170 回法制史学会東京部会例会 〈<https://www.jalha.org/history/tokyo/>〉

(1) 日時 平成 7 (1995) 年 12 月 26 日 (火) 午後 3 時～5 時 50 分

(2) 会場 早稲田大学本部キャンパス 1 号館 3 階 308 号室

(令和 3 (2021) 年 9 月 9 日追加)

・趙晶 (中国政法大学法律古籍整理研究所教授、1983～) 「論中田薫的東洋法制史研究」『中外論壇』2021 年第 3 期 (2021 年 9 月刊) (令和 3 年 12 月 25 日追加、同 4 年 1 月 11 日一部修正)

〈 http://flgj.cupl.edu.cn/_local/9/77/58/A89DF123A874A4FD9662B472D24_F4B33C85_713863.pdf〉

令和 4 (2022) 年

・山口道弘 (1979～) 「牧健二と文科派法制史学の展開 (上)」『法政研究』第 88 巻第 4 号 (令和 4 年 3 月 14 日刊) (横書) 242～191 頁 (宮崎道三郎博士関連個所: 196～194 頁、牧健二: 1892～1989) (令和 4 (2022) 年 6 月 1 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4772779/8804_pa242.pdf〉

・山口道弘 (1979～) 「牧健二と文科派法制史学の展開 (下)」『法政研究』第 89 巻第 1 号 (令和 4 (2022) 年 7 月 29 日刊) (横書) 170～117 頁 (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4796016/8901_p117.pdf〉

・吉原丈司・吉原達也・阪本尚文・高橋均編『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十五輯) —』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) (令和 4 (2022) 年 6 月 1 日追加)

〈<https://www.jalha.org/publication/>〉

〈<https://cir.nii.ac.jp/crid/1130010676870877056>〉

・令和 4 (2022) 年 11 月 12 日 (土) 「岡松参太郎生誕 150 年記念国際シンポジウム 東アジアにおける植民地法制と学知」(主催: 早稲田大学東アジア法研究所、岡松参太郎: 1871～1921) (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加)

〈<https://waseda.app.box.com/s/3no51u8w10s8270vq7h1j3wsr8qkj31g>〉

〈 <https://www.jalha.org/research/%E6%9D%B1%E3%82%A2%E3%82%B8%E3%82%A2%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%A4%8D%E6%B0%91%E5%9C%B0%E6%B3%95%E5%88%B6%E3%81%A8%E5%AD%A6%E7%9F%A5/>〉

・和仁かや「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一巻 公法・基礎法編』(成文堂、令和 4 (2022) 年 12 月 28 日刊) 213～231 頁 (令和 5 (2023) 年 1 月 26 日追加)

〈<http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html>〉

令和 5 (2023) 年

・『法の思想と歴史』第3号(信山社、令和5(2023)年4月17日刊。石部雅亮(1933～2023.12、大阪公立大学名誉教授)責任編集)(※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺一和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載。)(令和5(2023)年4月20日追加。その後同年5月5日田口先生の御示教に与った。厚く御礼申し上げます。同年12月12日一部補正)

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉

(内容)

◆新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺一和漢書目録と雑考」

- I 宮崎道三郎の略歴など
- II 東京帝国大学法学部、法制史蔵書の再建過程
- III 宮崎道三郎旧蔵書群(和漢書)
- IV 三浦周行旧蔵書に関する若干のトピック

◆田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」

- I はじめに
- II 宮崎旧蔵洋書の探索
- III 蔵書の特徴
- IV 宮崎旧蔵洋書と宮崎の仕事
- V おわりに

・法制史学会第74回総会(令和5(2023)年6月10、11日)「ミニ・シンポジウム」(令和5(2023)年4月20日追加)

第1日 令和5(2023)年6月10日(土)

〈<https://www.jalha.org/>〉⇒

〈<https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/>〉

13:30～17:00 [ミニ・シンポジウム 1]

「法制史学資料の来し方と行く末—紙媒体資料・蔵書の継承に向けて—」

「趣旨説明」

和仁かや(早稲田大学)

青木睦(前国文学研究資料館)「アーカイブズ保存論の新展開—「脱・保管(post-custodial)」

時代の渦中で—」

山根泰志(九州大学附属図書館)「特殊文庫の死蔵と再生」

新田一郎(東京大学)・田口正樹(東京大学)「宮崎道三郎旧蔵書の紹介」

「コメント」

ディミトリ・ヴァンオーヴェルベーク(東京大学)

・北康宏(1968～)『中田薫』(人物叢書、吉川弘文館、令和5(2023)年8月1日刊)

〈<http://www.yoshikawa-k.co.jp/book/b626819.html>〉

(令和 5 (2023) 年 7 月 18 日追加)

・今野元 (1973～) 『上杉慎吉 国家は最高の道徳なり』(ミネルヴァ日本評伝選、ミネルヴァ書房、令和 5 (2023) 年 9 月 10 日刊。上杉慎吉: 1878～1929)

〈<https://www.minervashobo.co.jp/book/b628019.html>〉

(参考) 今野元「なぜいま、上杉慎吉論か—歴史的思考の柔軟化を目指して」(ミネルヴァ日本評伝選「自著を語る」)『究』令和 5 (2023) 年 11 月号(ミネルヴァ書房、令和 5 (2023) 年 11 月刊) 38～39 頁

(令和 5 (2023) 年 12 月 12 日追加)

・浦野都志子「小中村清矩「尾張国解文略説」について」『汲古』第 84 号(令和 5 (2023) 年 12 月刊) 20～25 頁(同誌 19 頁下段に続く)(令和 6 (2024) 年 1 月 1 日追加)

令和 6 (2024) 年

・『CD 版 上山安敏先生・柴田光蔵先生・西村稔先生・宮崎道三郎博士・池辺義象氏・小林宏先生・千賀鶴太郎博士・戸水寛人博士略年譜・著作目録 附録: 「日本ローマ法・法制史学者等略年譜・著作目録・追悼辞」掲載資料抄 (追補) 中田薫博士・瀧川政次郎博士・三浦周行博士・牧健二博士各関係資料抄 一ローマ法・法制史学者著作目録選 (第十六輯) 一』(CD 版、令和 6 (2024) 年 1 月 1 日刊)(「宮崎道三郎博士略年譜・著作目録 (四十九訂稿)」を収録したものである。)

〈<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R100000002-I033346841>〉

(令和 6 (2024) 年 1 月 1 日追加)

・浦野都志子「黒河春村『地頭名義考』について」『汲古』第 86 号(令和 6 (2024) 年 12 月刊) 12～18 頁(黒河春村: 1799～1866)(令和 7 (2025) 年 1 月 1 日追加)

(了)

【参考】

〔目 次〕

【参考 1】 東京大学法学部法制史資料室所蔵コレクション……………109
【参考 2】 穂積陳重博士・宮崎道三郎博士関係最近論稿・報告等一覧 ……109
【参考 3】 穂積陳重博士関係最近論稿等一覧……………113
【参考 4】 宮崎道三郎博士関係最近論稿等一覧……………114
【参考 5】 山口道弘教授講義その他 ……115
【参考 6】 第 74 回法制史学会総会（令和 5（2023）年 6 月 10、11 日）
「ミニ・シンポジウム」の件……………116
【参考 7】 国立国会図書館、CiNii 関係……………117

【参考 1】 東京大学法学部法制史資料室所蔵コレクション（令和 2 年 6 月 24 日新設）

〈<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/law/page/about>〉

（以下令和 5（2023）年 5 月 19 日追加）

・『法の思想と歴史』第 3 号（信山社、令和 5（2023）年 4 月 17 日刊。石部雅亮（1933～2023.12、大阪公立大学名誉教授）責任編集）（※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺一和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載）（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加、同年 12 月 12 日一部補正）

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉

・※法制史学会第 74 回総会（令和 5（2023）年 6 月 10、11 日）時「ミニ・シンポジウム」（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加）

〈<https://www.jalha.org/>〉 ⇒

〈<https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/>〉

【参考 2】 穂積陳重博士・宮崎道三郎博士関係最近論稿・報告等一覧（令和 2 年 5 月 26 日新設）（宮崎道三郎博士専題分は冒頭に※印あり。）

（参考）昭和 62（1987）年

・岩野英夫（1944～）「わが国における法史学の歩み（1873～1945）：法制史関連科目担任者の変遷」『同志社大学法学』第 39 巻第 1・2 号（昭和 62（1987）年 7 月 31 日刊）225～312 頁

〈<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/11524/kj00000658370.pdf>〉

⇒・研究代表者岩野英夫『法学教育における法史学の存在価値—わが国における法史学の成立と展開との関連で—』平成 11 年度—平成 13 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告（3 月刊）（註：これには、上記岩野英夫「わが国における法史学の歩み（1873—1945）—法制史関連科目担任者の変遷—」『同志社法学』第 39 巻第 1・2 号（第 200 号記念論集 I、昭和 62（1987）年 7 月 31 日刊）の修正版が収録されている。）

（参考：〈<http://ci.nii.ac.jp/naid/110000588862>〉）（令和 3 年 1 月 17 日追加）

平成 30（2018）年

・内田貴（1954～）『法学の誕生 近代日本にとって「法」とは何であったか』（筑摩書房、平成 30（2018）年 3 月 28 日刊）（令和 5（2023）年 7 月 18 日追加）

〈<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480867261/>〉

・吉原達也「穂積陳重のローマ法講義について」『日本法学』第 84 巻第 1 号（平成 30（2018）年 6 月 30 日刊）1～51 頁（穂積陳重：1855～1926）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_1.pdf〉

（参考）・小野翠・七戸克彦「内子町・重岡薫五郎関係資料」『法政研究』第 85 巻第 1 号（平成 30（2018）年 7 月 13 日刊）251～307 頁（東京大学法学部別課法学科における江木衷（1858～1925）担当「ローマ法講義」（明治 18（1885）年）関係記載がある。256、281 頁）（令和 3 年 1 月 17 日追加）

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=frombib&lang=0&amode=MD100000&opkey=B156895559945133&bibid=1957719&start=1〉

・※吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 巻第 3 号（池村正道教授古稀記念号、平成 30（2018）年 12 月 25 日刊）423～451 頁

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

平成 31（2019）年（～2019 年 4 月 30 日）

・HP「宮崎道三郎博士略年譜・著作目録」（平成 31（2019）年 1 月 31 日初稿アップ）（令和 3 年 10 月 19 日追加）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miyazaki001.pdf>〉

・吉原達也「東京大学草創期におけるローマ法講義—穂積陳重博士・宮崎道三郎博士・戸水寛人博士の場合—」東京大学大学院人文社会系研究科『2014—2018 年度他分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』（平成 31（2019）年 3 月刊）219～262 頁（令和 2 年 2 月 21 日追加）〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I029775148-00>〉

・※吉原達也編「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』緒言及び第一部 羅馬法制史」『日本法学』第 84 巻第 4 号（平成 31（2019）年 3 月 25 日刊）303～387 頁（平成 31 年 4 月 7 日追加）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_4.pdf〉

・神野潔（1976～）（報告「明治期における日本法制史学の展開図」（法制史学会東京部会第 274 回例会「テーマ：日本における法史研究の歴史」（下記法制史学会第 71 回総会〔ミニ・シンポジウム〕準備会との由。平成 31（2019）年 4 月 13 日（土）午後、於東京

大学東洋文化研究所大会議室)の一つとして) <<https://www.jalha.org/tokyo/>> (平成 31 年 4 月 5 日追加)

・※藤野奈津子 (報告「明治前期における西洋法史学の成立過程—宮崎道三郎『羅馬法講義』ノートを中心に—」(法制史学会東京部会第 274 回例会「テーマ:日本における法史研究の歴史」(下記法制史学会第 71 回総会〔ミニ・シンポジウム〕準備会との由。平成 31 (2019) 年 4 月 13 日午後(土)、於東京大学東洋文化研究所大会議室)の一つとして) <<https://www.jalha.org/tokyo/>> (平成 31 年 3 月 31 日追加)

令和元 (2019) 年 (2019 年 5 月 1 日～)

・法制史学会第 71 回総会〔ミニシンポジウム〕「日本における法史研究の歴史」(令和元 (2019) 年 6 月 8 日(土)午後、於神戸学院大学ポートアイランドキャンパス。田口正樹、神野潔、赤城美恵子、藤野奈津子、松沢裕作、大中有信各氏)

・神野潔 (1976～) (報告)「明治期における日本法制史学の展開図」

⇒『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 131～147 頁に収録 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・藤野奈津子 (報告)「明治前期における西洋法史学の誕生」あり。

<<https://www.jalha.org/soukai2/>>

<<https://www.jalha.org/wordpress/wp-content/uploads/2019/05/71soukai.pdf>>

⇒『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 179～207 頁に収録 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・※吉原達也編「(資料)宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 巻第 1 号 (令和元 (2019) 年 6 月 28 日刊) 1～96 頁 (令和元年 7 月 11 日追加)

<https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf>

【書評】林智良『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 417～420 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

・※吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 巻第 2 号 (日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元 (2019) 年 9 月 27 日刊) 1～30 頁 (令和元年 10 月 22 日追加)

<https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf>

【書評】林智良『法制史研究 70 (2020)』(令和 3 (2021) 年 3 月 30 日刊) 417～420 頁 (令和 3 (2021) 年 9 月 8 日追加)

令和 2 (2020) 年

・吉原達也編「(資料)穂積陳重博士『羅馬法講義』総論及び第一編 羅馬法律史」『日本法学』第 85 巻第 3 号 (令和 2 (2020) 年 1 月 31 日刊) 147～215 頁 (穂積陳重: 1855～1926) (令和 2 年 2 月 21 日追加)

<https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_3/each/06.pdf>

・※吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 巻第 4 号 (南部篤教授退職記念号、令和 2 (2020) 年 3 月 27 日刊) 223～266 頁 (令和 2 年 5 月 26 日

追加)

[〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉](https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf)

・※「宮崎道三郎博士漢詩文題目抄」『法史学研究会会報』第 23 号（小林宏先生米寿記念号、令和 2（2020）年 3 月 30 日刊）213～216 頁（令和 2 年 4 月 18 日追加）

・吉原達也編「(資料) 穂積陳重博士『羅馬法講義』第二編 羅馬法正編第 1 卷及び第 2 卷」『日本法学』第 86 卷第 1 号（令和 2 年 6 月 26 日刊）37～125 頁（穂積陳重: 1855～1926）（令和 2 年 7 月 15 日追加）

[〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf〉](https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf)

令和 3（2021）年

・神野潔（1976～）「明治期における日本法制史学の展開図」『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）131～147 頁（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

・藤野奈津子「明治前期における西洋法史学の誕生」『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）179～207 頁に収録（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

・林智良（1962～）「(書評) 吉原達也編「宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」(『日本法学』85-1) 同著「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」(『日本法学』85-2)」『法制史研究 70（2020）』（令和 3（2021）年 3 月 30 日刊）417～420 頁（令和 3（2021）年 9 月 8 日追加）

令和 4（2022）年

・ブログ「海神日和」: 「東大教授となり結婚——美濃部達吉遠望（18） [美濃部達吉遠望]」（2022-02-08 06:47）[〈https://kimugoq.blog.ss-blog.jp/2022-02-08〉](https://kimugoq.blog.ss-blog.jp/2022-02-08)（令和 5（2023）年 2 月 26 日追加）

・吉原丈司・吉原達也・阪本尚文・高橋均編『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』（令和 4（2022）年 4 月 1 日刊）

[〈https://www.jalha.org/publication/〉](https://www.jalha.org/publication/)

[〈https://cir.nii.ac.jp/crid/1130010676870877056〉](https://cir.nii.ac.jp/crid/1130010676870877056)（令和 4（2022）年 6 月 1 日追加）

令和 5（2023）年

・※和仁かや「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一卷 公法・基礎法編』（成文堂、令和 4（2022）年 12 月 28 日刊）213～231 頁（令和 5（2023）年 1 月 26 日追加）

[〈http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html〉](http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html)

・『法の思想と歴史』第 3 号（信山社、令和 5（2023）年 4 月 17 日刊。石部雅亮（1933～2023.12、大阪公立大学名誉教授）責任編集）（※石部雅亮「はしがき」、※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺—和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載）（令和 5（2023）年 4 月 20 日追加、同 12 月 12 日一部補正）

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉（ここには、【高評】河上正二「源流を知る喜び—源泉の水は、流れの合流したところの水よりも純粋なものだ—」あり。）
・※法制史学会第74回総会（令和5（2023）年6月10、11日）時「ミニ・シンポジウム」（令和5（2023）年4月20日追加）

〈<https://www.jalha.org/>〉 ⇒

〈<https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/>〉

【参考3】穂積陳重博士関係最近論稿等一覧（令和3年12月25日新設）

平成30（2018）年

・内田貴（1954～）『法学の誕生 近代日本にとって「法」とは何であったか』（筑摩書房、平成30（2018）年3月28日刊）（令和5（2023）年7月18日追加）

〈<https://www.chikumashobo.co.jp/product/9784480867261/>〉

・吉原達也「穂積陳重のローマ法講義について」『日本法学』第84巻第1号（平成30（2018）年6月30日刊）1～51頁（穂積陳重：1855～1926）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_1.pdf〉

平成31（2019）年（～2019年4月30日）

・吉原達也「東京大学草創期におけるローマ法講義—穂積陳重博士・宮崎道三郎博士・戸水寛人博士の場合—」東京大学大学院人文社会系研究科『2014—2018年度他分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』（平成31（2019）年3月刊）219～262頁（令和2年2月21日追加）〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I029775148-00>〉

令和2（2020）年

・吉原達也編「（資料）穂積陳重博士『羅馬法講義』総論及び第一編 羅馬法律史」『日本法学』第85巻第3号（令和2（2020）年1月31日刊）147～215頁（穂積陳重：1855～1926）（令和2年2月21日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_3/each/06.pdf〉

・吉原達也編「（資料）穂積陳重博士『羅馬法講義』第二編 羅馬法正編第1巻及び第2巻」『日本法学』第86巻第1号（令和2（2020）年6月26日刊）37～125頁（穂積陳重：1855～1926）（令和2年7月15日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_86_1/each/04.pdf〉

【参考 4】宮崎道三郎博士関係最近論稿等一覧（令和 3 年 12 月 25 日新設）

平成 30（2018）年

- ・※吉原達也「宮崎道三郎博士の講述『比較法制史』について」『日本法学』第 84 卷第 3 号（池村正道教授古稀記念号、平成 30（2018）年 12 月 25 日刊）423～451 頁

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_3.pdf〉

平成 31（2019）年（～2019 年 4 月 30 日）

- ・HP「宮崎道三郎博士略年譜・著作目録」（平成 31（2019）年 1 月 31 日初稿アップ）（令和 3 年 10 月 19 日追加）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/miyazaki001.pdf>〉

- ・吉原達也「東京大学草創期におけるローマ法講義—穂積陳重博士・宮崎道三郎博士・戸水寛人博士の場合—」東京大学大学院人文社会系研究科『2014—2018 年度他分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』（平成 31（2019）年 3 月刊）219～262 頁（令和 2 年 2 月 21 日追加）

〈<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R300000001-I029775148-00>〉

- ・※吉原達也編「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』緒言及び第一部 羅馬法制史」『日本法学』第 84 卷第 4 号（平成 31（2019）年 3 月 25 日刊）303～387 頁（平成 31 年 4 月 7 日追加）

〈https://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/doc/law84_4.pdf〉

令和元（2019）年（2019 年 5 月 1 日～）

- ・※吉原達也編「（資料）宮崎道三郎博士講述『比較法制史』第二部 独逸法制史」『日本法学』第 85 卷第 1 号（令和元（2019）年 6 月 28 日刊）1～96 頁（令和元年 7 月 11 日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_1/each/03.pdf〉

- ・※吉原達也「宮崎道三郎博士の羅馬法講義について」『日本法学』第 85 卷第 2 号（日本大学法学部創設 130 周年記念号、令和元（2019）年 9 月 27 日刊）1～30 頁（令和元年 10 月 22 日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_2/each/06.pdf〉

令和 2（2020）年

- ・※吉原達也「宮崎道三郎博士の独逸法律史講義について」『日本法学』第 85 卷第 4 号（南部篤教授退職記念号、令和 2（2020）年 3 月 27 日刊）223～266 頁（令和 2 年 5 月 26 日追加）

〈https://www.publication.law.nihon-u.ac.jp/pdf/law/law_85_4/each/13.pdf〉

- ・※「宮崎道三郎博士漢詩文題目抄」『法史学研究会会報』第 23 号（小林宏先生米寿記念号、令和 2（2020）年 3 月 30 日刊）213～216 頁（令和 2 年 4 月 18 日追加）

令和 4 (2022) 年

・吉原文司・吉原達也・阪本尚文・高橋均編『CD版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録—【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』（令和4（2022）年4月1日刊）

〈<https://www.jalha.org/publication/>〉

〈<https://cir.nii.ac.jp/crid/1130010676870877056>〉（令和4（2022）年6月1日追加）

・※和仁かや「宮崎道三郎の「都加佐名義考」」『早稲田大学法学会百周年記念論文集 第一巻 公法・基礎法編』（成文堂、令和4（2022）年12月28日刊）213～231頁（令和5（2023）年1月26日追加）

〈<http://www.seibundoh.co.jp/pub/search/038528.html>〉

令和 5 (2023) 年

・『法の思想と歴史』第3号（信山社、令和5（2023）年4月17日刊。石部雅亮（1933～2023.12、大阪公立大学名誉教授）責任編集）（※石部雅亮「はしがき」、※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺一和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載）（令和5（2023）年4月20日追加、同12月12日一部補正）

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉

（ここには、【高評】河上正二「源流を知る喜び—源泉の水は、流れの合流したところの水よりも純粹なものだ—」あり。）

・※法制史学会第74回総会（令和5（2023）年6月10、11日）時「ミニ・シンポジウム」（令和5（2023）年4月20日追加）⇒後掲「【参考6】法制史学会第74回総会」参照。

〈<https://www.jalha.org/>〉⇒

〈<https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/>〉

【参考5】山口道弘教授講義その他

・「日本法制史演習」（(当時) 千葉大学)

〈<http://www.chiba-u.ac.jp/syllabus/2012/A1/2012A114A7601.htm>〉

・「日本法制史」（九州大学、令和元（2019）年2月8日最終更新）

〈http://www.law.kyushu-u.ac.jp/faculty/syllabus/syllabus_v2.cgi?nengakki=2019_2&iid=52〉

・山口道弘（1979～）「牧健二と文科派法制史学の展開（上）」『法政研究』第88巻第4号（令和4（2022）年3月14日刊）（横書）242～191頁（宮崎道三郎博士関連箇所: 196～

194 頁) (令和 4 (2022) 年 6 月 1 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4772779/8804_pa242.pdf〉

・山口道弘 (1979～) 「牧健二と文科派法制史学の展開 (下)」『法政研究』第 89 巻第 1 号 (令和 4 (2022) 年 7 月 29 日刊) (横書) 170～117 頁 (令和 4 (2022) 年 11 月 20 日追加)

〈https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_download_md/4796016/8901_p117.pdf〉

【参考 6】法制史学会第 74 回総会 (令和 5 (2023) 年 6 月 10、11 日) 時「ミニ・シンポジウム」の件 (令和 5 (2023) 年 4 月 20 日追加)

・法制史学会第 74 回総会 (令和 5 (2023) 年 6 月 10、11 日) 「ミニ・シンポジウム」
第 1 日 令和 5 (2023) 年 6 月 10 日 (土)

〈<https://www.jalha.org/>〉 ⇒

〈 <https://www.jalha.org/soukai2/%e7%ac%ac74%e5%9b%9e%e6%b3%95%e5%88%b6%e5%8f%b2%e5%ad%a6%e4%bc%9a%e7%b7%8f%e4%bc%9a%e3%81%ae%e5%8f%82%e5%8a%a0%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%83%bb%e3%83%97%e3%83%ad%e3%82%b0%e3%83%a9%e3%83%a0/> 〉

13 : 30～17 : 00 [ミニ・シンポジウム 1]

「法制史学資料の来し方と行く末—紙媒体資料・蔵書の継承に向けて—」

「趣旨説明」 和仁かや (早稲田大学)

青木睦 (前国文学研究資料館) 「アーカイブズ保存論の新展開—「脱・保管 (post-custodial)」時代の渦中で—」

山根泰志 (九州大学附属図書館) 「特殊文庫の死蔵と再生」

新田一郎 (東京大学) ・ 田口正樹 (東京大学) 「宮崎道三郎旧蔵書の紹介」

「コメント」 ディミトリ・ヴァンオーヴェルベーク (東京大学)

(参考)

・『法の思想と歴史』第 3 号 (信山社、令和 5 (2023) 年 4 月 17 日刊。石部雅亮 (大阪公立大学名誉教授) 責任編集) (※石部雅亮「はしがき」、※新田一郎「宮崎道三郎旧蔵書とその周辺—和漢書目録と雑考」、※田口正樹「宮崎道三郎旧蔵洋書の再構成と若干の検討」を収載。)

〈<https://www.shinzansha.co.jp/book/b10031304.html>〉 (ここには、【高評】河上正二「源流を知る喜び—源泉の水は、流れの合流したところの水よりも純粋なものだ—」あり。)

【参考 7】 国立国会図書館、CiNii 関係（令和 4（2022）年 6 月 1 日「CiNii 関係」追加）

① 国立国会図書館次世代デジタルライブラリー（令和 4（2022）年 3 月 9 日追加）

〈<https://lab.ndl.go.jp/service/tsugidigi/>〉

これでもって本稿も再検討する必要がある。本件については、最近九州大学法学部教授西英昭先生より御懇篤な御示教を賜った。厚く御礼申し上げます。

② 国立国会図書館より令和 3（2021）年 12 月 3 日に下記のことが公表された。本件については、旧臘宮部香織先生の貴重な御教示に与った。厚く御礼申し上げます。

（令和 4（2022）年 3 月 9 日追加）

「国立国会図書館のデジタル化資料の個人送信に関する合意文書」の公表について

「国立国会図書館のデジタル化資料の個人送信に関する合意文書」（令和 3 年 12 月 3 日）を公表しました。

〈https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2021/211222_01.html〉

③ 上記国立国会図書館個人向けデジタル化資料送信サービス（個人送信）が、令和 4（2022）年 5 月 19 日から開始された（令和 4（2022）年 6 月 1 日追加）

〈https://www.ndl.go.jp/jp/use/digital_transmission/individuals_index.html〉

④ CiNii: 〈<https://ci.nii.ac.jp/>〉 ⇒ 〈<https://cir.nii.ac.jp/>〉（【[2022] 4/18 更新】 CiNii Articles の CiNii Research への統合について）、〈<https://ci.nii.ac.jp/books/>〉（令和 4（2022）年 6 月 1 日追加）

（了）

